

市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2冊

高 松 城 跡（寿町一丁目）

2007年3月

高松市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、市街地再開発関連街路事業のうち都市計画道路高松駅南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第2冊であり、高松市西の丸町・寿町一丁目に所在する高松城跡（寿町一丁目）の調査報告を収録した。本報告書では1区の第1遺構面・第2遺構面、Ⅱ区、Ⅲ区を報告する。なお、第1冊では書名・遺跡名を『高松城跡（無量壽院跡）』としていたが、遺跡名は高松城跡（寿町一丁目）で統一する。
2. 発掘調査期間は、平成14年11月28日～平成15年3月14日と平成17年12月19日～平成18年2月28日の2年次に分かれている。
3. 発掘調査および本報告書作成は、高松市教育委員会が実施した。
4. 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々のご指導とご協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

香川県教育委員会

片桐節子 片桐孝治 蔵本晋司 乗松真也 松本和彦 森下友子

5. 調査は、文化振興課文化財専門員 大嶋和則と中西克也（～平成18年3月 讃岐文化遺産研究会 平成18年4月～ 文化振興課非常勤嘱託職員）が担当し、大朝利和が輔佐した。
6. 本報告書の執筆は、第1章第1節を大嶋、第2章を文化振興課文化財専門員 川畑聡が行い、それ以外は中西が行った。編集は中西が行った。
7. 本報告書の第4章第1節樹種同定は、（株）吉山生物研究所に委託した。
8. 本報告書の出土遺物写真撮影は、杉本和樹（西大寺フォト）に委託した。
9. 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。
10. 本報告書における表記および記述に関する凡例は、以下のとおりである。

- (1) 使用した遺構略号は次のとおりである。

SB 掘立柱建物跡 SD 溝 SE 井戸 SK 土坑 SP 柱穴
SU 犁跡状遺構 SX 性格不明遺構

- (2) 出土遺物観察表中の表記方法は次のとおりである。

- a. 法量の中で（ ）を付けているのは残存値である。
- b. 色調が内外面とも同じ場合は内外面と表記する。
- c. 土器胎土の粒土表記の基準

微砂：非常に細かい 細砂：0.5mm以下 粗砂：0.5～1mm 細礫：1mm以上

- (3) 方位の北は、国土座標第Ⅳ座標系（世界測地系）の北であり、標高は東京湾平均海面からのプラス値である。
- (4) 土壌及び土器観察の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）による。
- (5) 挿図の一部に国土地理院地形図「高松北部」と高松市都市計画図2千5百分の1「高松市街北部」を一部改変して使用した。
- (6) 第4章自然科学的分析は、市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第1冊に既載したが、本報告書に記載する木製品が関係するため再度記載する。
- (7) 写真図版の出土遺物の中で、本報告書に記載する第1・2遺構面出土の遺物の番号をつける。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要	8
第2節 基本土層	9
第3節 遺構・遺物	13
第1小節 I区 第2遺構面	13
1 掘立柱建物跡	13
2 溝	14
3 井戸	16
4 土坑	21
5 柱穴	28
6 性格不明遺構	31
7 第2遺構面出土遺物	39
第2小節 I区 第1遺構面	42
1 溝	42
2 井戸	49
3 土坑	56
4 柱穴	63
5 犁跡状遺構	65
6 性格不明遺構	66
7 第1遺構面出土遺物	71
第3小節 II区	72
第4小節 III区	74
第4章 自然科学的分析	
第1節 高松市高松城跡出土木製品の樹種調査結果	75
第5章 まとめ	
第1節 遺構の変遷	81
第2節 絵地図・文献史料における「西ノ丸」について	82
出土遺物観察表	89

插图目次

第1图 通称位置图	1	第37图 第2道横面出土遺物実測図(1)	40
第2图 調査地位位置図(1)	5	第38图 第2道横面出土遺物実測図(2)	41
第3图 調査地位位置図(2)	6	第39图 第2道横面出土遺物実測図(3)	42
第4图 高松城跡周辺主要調査地位位置図	7	第40图 I区第1道横面平面図(1)	43・44
第5图 調査区設定図	8	第41图 I区第1道横面平面図(2)	45
第6图 I区土層図	10	第42图 S D 1001平・立面図	45
第7图 I区第2道横面平面図	11・12	第43图 S D 1001出土遺物実測図(1)	46
第8图 S B 1201平・断面図	13	第44图 S D 1001出土遺物実測図(2)	47
第9图 S B 1201出土遺物実測図	14	第45图 S D 1001出土遺物実測図(3)	48
第10图 S D 1201～1203断面図及び出土遺物実測図	14	第46图 S E 1001平・断面図	49
第11图 S D 1204平・断面図及び出土遺物実測図	15	第47图 S E 1001出土遺物実測図(1)	50
第12图 S E 1201平・断面図	16	第48图 S E 1001出土遺物実測図(2)	51
第13图 S E 1201出土遺物実測図(1)	17	第49图 S E 1002平・断面図	52
第14图 S E 1201出土遺物実測図(2)	18	第50图 S E 1002出土遺物実測図(1)	53
第15图 S E 1201出土遺物実測図(3)	19	第51图 S E 1002出土遺物実測図(2)	54
第16图 S E 1201出土遺物実測図(4)	20	第52图 S E 1003・S P 1039平・断面図	55
第17图 S K 1201平・断面図及び出土遺物実測図	21	第53图 S E 1003出土遺物実測図	56
第18图 S K 1202平・断面図及び出土遺物実測図	21	第54图 S K 1001・1002平・断面図及び出土遺物実測図	57
第19图 S K 1203平・断面図及び出土遺物実測図	22	第55图 S K 1003～1005平・断面図及び出土遺物実測図	58
第20图 S K 1204～1208平・断面図及び出土遺物実測図	23	第56图 S K 1007・1009平・断面図	59
第21图 S K 1209平・断面図	24	第57图 S K 1013・1014平・断面図及び出土遺物実測図	59
第22图 S K 1209出土遺物実測図(1)	25	第58图 S K 1015平・断面図	60
第23图 S K 1209出土遺物実測図(2)	26	第59图 S K 1016～1018平・断面図及び出土遺物実測図	61
第24图 S K 1210・1211・1215平・断面図 及び出土遺物実測図	26	第60图 S K 1019・1020平・断面図及び出土遺物実測図	62
第25图 S K 1212平・断面図及び出土遺物実測図	27	第61图 第1道横面 S P 出土遺物実測図	64
第26图 S K 1213・1214平・断面図及び出土遺物実測図	28	第62图 S U 1001出土遺物実測図	65
第27图 第2道横面 S P 出土遺物実測図	29	第63图 S X 1002平・断面図及び出土遺物実測図	66
第28图 S X 1201平・断面図及び出土遺物実測図	32	第64图 S X 1003平・断面図及び出土遺物実測図(1)	67
第29图 S X 1202平・断面図	32	第65图 S X 1003出土遺物実測図(2)	68
第30图 S X 1202出土遺物実測図(1)	33	第66图 S X 1004平・断面図及び出土遺物実測図	69
第31图 S X 1202出土遺物実測図(2)	34	第67图 第1道横面出土遺物実測図(1)	70
第32图 S X 1203平・断面図及び出土遺物実測図	35	第68图 第1道横面出土遺物実測図(2)	71
第33图 S X 1204・1205平・断面図及び出土遺物実測図	36	第69图 第1道横面出土遺物実測図(3)	72
第34图 S X 1206平・断面図及び出土遺物実測図	37	第70图 II区平面図	73
第35图 S X 1207平・断面図及び出土遺物実測図	38	第71图 II区出土遺物実測図	73
第36图 S X 1208・1209平・断面図及び出土遺物実測図	39	第72图 III区平・断面図及び出土遺物実測図	74

図 版 目 次

- 図版 1 - 1 第 2 遺構面完掘状況 (東から)
- 2 第 2 遺構面完掘状況 (西から)
- 図版 2 - 1 第 2 遺構面完掘状況 (南から)
- 2 第 2 遺構面完掘状況 (北から)
- 図版 3 - 1 SB 1201 完掘状況 (西から)
- 2 SB 1201 P - 2
- 3 SB 1201 P - 4
- 図版 4 - 1 SE 1201 土層断面 (西から)
- 2 SE 1201 完掘状況 (南から)
- 3 SK 1202 ~ 1208 完掘状況 (北から)
- 図版 5 - 1 SK 1209 土層断面 (西から)
- 2 SK 1209 完掘状況 (東から)
- 3 SK 1212 完掘状況 (北から)
- 図版 6 - 1 北東部完掘状況 (東から)
- 2 SX 1202 (西から)
- 3 SX 1201 完掘状況 (西から)
- 図版 7 - 1 第 1 遺構面完掘状況 (東から)
- 2 第 1 遺構面完掘状況 (西から)
- 図版 8 - 1 SD 1001 完掘状況 (東から)
- 2 SD 1001 完掘状況 (東から)
- 3 SE 1001 検出状況
- 図版 9 - 1 SE 1001 完掘状況 (北から)
- 2 SE 1002 検出状況 (南から)
- 3 SE 1002 完掘状況 (東から)
- 図版 10 - 1 SE 1003 完掘状況 (西から)
- 2 SK 1020 完掘状況 (西から)
- 3 SP 1039 硯出土状況 (西から)
- 図版 11 - 1 SX 1003 完掘状況 (南から)
- 2 SX 1003 西側土層断面
- 3 第 1 遺構面完掘状況 (東から)
- 図版 12 - 1 第 1 遺構面完掘状況 (北から)
- 2 第 1 遺構面完掘状況 (東から)
- 3 第 1 遺構面完掘状況 (東から)
- 図版 13 - 1 II 区全景 (東から)
- 2 III 区全景 (西から)
- 3 III 区土層断面
- 図版 14 出土遺物 (1)
- 図版 15 出土遺物 (2)
- 図版 16 出土遺物 (3)
- 図版 17 出土遺物 (4)
- 図版 18 出土遺物 (5)
- 図版 19 出土遺物 (6)
- 図版 20 出土遺物 (7)

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

高松市では、サンポート高松整備事業の一環でJR高松駅周辺の再開発事業を進めており、これに伴い都市計画道路高松駅南線の整備が計画された。道路新設部分は幅員20m、延長約90m、事業面積約1,800㎡である。

平成13年度に事業主体である高松市都市開発部都市再開発課から、高松市教育委員会に対して道路建設予定地における埋蔵文化財について照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地としては認識されていなかったが、東側には国史跡高松城跡が所在し、西側隣接地では(財)香川県埋蔵文化財調査センターによって調査が行われた高松城跡(西の丸町地区)が所在した。また、事業予定地は周辺の発掘調査成果や地割と絵図との比較によって、江戸時代には高松城内であり、東半が西ノ丸、西半が中堀に位置することが推定された。しかし、事業予定地内には鉄筋コンクリート造の建物が建てられており、攪乱を受けている可能性もあったため、事前に道路建設予定地内について試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況を確認することで合意した。

これを受け、高松市教育委員会では平成13年10月9・10日に道路建設予定地内の用地取得地について試掘調査を実施した。事業予定地東半の西ノ丸推定地のみが試掘可能であり、道路幅員の両端に沿って東西方向のトレンチを設定した。南側のトレンチでは、中世と江戸時代の3面の遺構面を確認し、それぞれから土坑を検出した。北側のトレンチでは、西半は溝や柱穴を検出したが、東半はコンクリート基礎による攪乱が遺構面以下まで及んでいた。このため事業予定地の北東部分については攪乱が著しく、遺跡は消滅してしまっているが、その他の部分についてはほぼ全面に遺跡が所在することが判明した。なお、事業予定地西半は試掘調査できなかったが、堀が推定されていることから遺構の深さが深く、また既存建築物が2階建であることから地下遺構に対する攪乱の影響が少ないと考えられた。さらに、西側隣接地において(財)香川県埋蔵文化財調査センターによって調査が行われた高松城跡(西の丸町地区)が所在することからも、埋蔵文化財が包蔵することは確実視された。試掘調査結果については都市再開発課と香川県教育委員会に報告した。

平成14年9月11日に都市再開発課より埋蔵文化財発掘の通知が提出され、これに対し、9月26日に香川県教育委員会から事前に発掘調査を行うよう指導があった。これを受け、都市再開発課と協議を行った結果、道路建設前の平成14・15年度の2カ年で発掘調査を実施し、記録保存を行うことで合意した。平成14年度においては事業予定地の東半と西端部分が用地取得済みであったことから、この範囲を調査対象とした。東半のうち北東部については試掘調査によって攪乱が著しいことが判明しており発掘対象範囲から除外した。このため、東半部分の発掘面積は360㎡となった。西端は堀の検出が予想され、掘削深度が深くなることから、十分な法面を設け、10m四方の100㎡程度を調査することとした。また、平成15年度については、事業予定地の中央部分を発掘対象地としていたが、用地取得が完了しなかったため調査は延期となった。その後、平成17年度において用地取得が部分的に完了した範囲内で175㎡の調査を実施し、堀に伴う石垣や多量の遺物の出土が認められた場合には平成18年度以降に残りを調査することで合意した。平成17年度調査地は堀内にあたり遺物量も少なかったことから、この調査において全調査を完了した。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

1. 発掘調査の経過

第1次発掘調査は、平成14年11月28日～平成15年3月14日に実施した。東側の調査区はⅠ区、西側の調査区はⅡ区と称する。本調査については、事前協議の中で廃土搬出費用の削減という観点から、遺構の調査に伴う廃土は調査区内に仮置きすることとなり、Ⅰ区は二分して調査を実施した。Ⅰ区の東側をⅠ-1区、西側をⅠ-2区と仮称した。最初にⅠ-1区・2区の第1遺構面を調査し、次にⅠ-1区の第2遺構面・第3遺構面を調査した。最後にⅠ-2区の第2遺構面・第3遺構面の調査を実施した。Ⅱ区の調査は調査期間の最終に実施した。

第2次発掘調査は、平成17年12月19日～平成18年2月28日に実施した。調査の目的は中堀の東側の石垣の確認であり、南北両側に住宅が接するように建っており、さらに掘削深度が3.5m以上になると想定されたために十分な安全対策を講じた後に調査を行った。

以下、調査日誌を掲げて調査の詳細について報告する。

調 査 日 誌 (抄)

平成14年

11月

28日にⅠ-1区の重機による第1遺構面までの機械掘削作業を開始し、29日に終了する。

12月

2～5日にⅠ-1区の第1遺構面の遺構検出作業を行う。6日に遺構配置図を作成し、東端より遺構の調査を開始する。9・10日に柱穴などの小規模の遺構を完掘し、同時にⅠ-2区の重機による第1遺構面までの機械掘削作業を行う。

11～16日にSD1001・SK1010・SE1001の掘り下げを行い、土層図を作成する。

17・18日にSE1002の掘り下げ、Ⅰ-2区の遺構検出作業を行う。24日にⅠ-2区の遺構配置図を作成し、遺構の調査を開始する。27日までSD1001、SE1001・1002、SX1003等の大きな遺構を完掘する。SD1001では集石を検出する。

平成15年

1月

6・7日にⅠ-2区の溝・柱穴・土坑を完掘し、調査区の北壁・西壁の土層図を作成する。8・9日に調査区南壁の土層図を作成する。

10日にⅠ区における第1遺構面の空中写真測量を行う。高所作業車を使用して全体の完掘写真を撮り、次に個々の遺構の写真を撮る。

14～16日にⅠ-1区の重機による第2遺構面までの機械掘削作業を行い、遺構配置図を作成した後にSX1201や柱穴などの遺構の調査を行う。SD1001を掘り下げる。

17日に柱穴や土坑等の全ての遺構を完掘し、20・21日に遺構の平面図を作成する。全体の完掘写真を撮り、次に個々の遺構の写真を撮る。

22～24日にSP1203～1208に切られるSK1209を掘り下げて完掘する。調査区東端より第3遺構面までの機械掘削作業を行い、随時、遺構検出作業を行う。

28～31日にSD1301～1303、SE1301、SX1301、土坑、柱穴の調査を行う。

2月

3・4日にSD 1301～1304、SE 1301、SX 1301を完掘する。SD 1301は集石が検出され、平面図を作成する。SE 1301の石組と曲物の平面図・立面図を作成する。

5日にI-1区の第3遺構面の空中写真測量を行う。6日にSD 1301・1304の遺物出土状況の平面図を作成し、遺物を取り上げる。SD 1302の集石の平面図を作成し、五輪塔2点を取り上げる。

7日にSD 1302の集石を取り除き、完掘写真を撮る。SX 1302を掘り下げる。

10～14日にI-1区SD 1302の平面図とSD 1001の列石立面図を作成し、SD 1303・1304を完掘する。I-2区において第2遺構面までの機械掘削作業を行い、遺構検出作業を行う。

17日にI-2区の第2遺構面の遺構配置図を作成した後に柱穴・土坑の調査を行う。

18～24日にI-2区第2遺構面の柱穴・溝・土坑を完掘し、SB 1201、SE 1201は土層図を作成した後に完掘する。全ての遺構を完掘した後に平面図を作成する。I-2区第2遺構面の完掘写真を撮り、個々の遺構の写真を撮影する。

25・26日にI-1区のSD 1001の列石を取り除き、地山まで掘り下げる。調査区南壁の土層図の下層を付け加える。I-2区の第3遺構面までの機械掘削作業と遺構検出作業を行う。

27・28日にI-2区の第3遺構面の柱穴・土坑・溝の調査を行う。SD 1301を完掘し、土層図と集石平面図を作成する。北西側に検出された第3遺構面上層のビット群・土坑群を完掘する。

3月

4日にI-2区のSD 1302の掘り下げを行う。土層観察用の畦を2本設定する。調査区北西側の畦を掘り下げ、第3遺構面下層の遺構を検出し、遺構配置図を作成する。5日にSD 1302の東側畦の土層図を作成し、青磁香炉の出土平面図作成と写真撮影を終える。

10日にII区の調査を行う。現地表から約2.50mの深さまで重機により掘り下げる。

11・12日にI-2区第3遺構面の全ての遺構を完掘する。

13日にII区の一部に鉄板を打ち込み、約3.50mの深さまで掘り下げる。下層に中堀の埋土である黒褐色シルト質極細砂が検出される。I-2区第3遺構面とII区の空中写真測量を行う。

平成 17 年

12月

コンクリート基礎の撤去を行う。

平成 18 年

1月

コンクリート基礎の撤去を行い、15日に試掘として重機により約1.5m掘り下げた。その結果、砂層が厚く堆積しており、十分な安全対策が必要であることが確認される。

2月

7日に重機により現地表からの深さ約3.40mまで掘り下げる。午後より人力による調査を実施する。ラミナ状堆積をなす堀の埋土を掘り下げ、地山であろう砂礫層を確認し、調査区南側を完掘する。

8日に土層図を作成し、北側を完掘する。午後より平面図を作成し、写真撮影を行う。

2. 整理作業の経過

第1次発掘調査の整理作業は次のように実施する。平成14年度末～15年度は出土遺物の水洗いと図面修正と遺物の復元・選定作業を行う。平成16年度～17年度前半に遺物の実測を行う。平成17年度後半～18年度前半に挿図を作成し、平成19年1月中旬までに原稿の執筆を完了する。

第2次発掘調査の整理作業は、平成18年度前半に出土遺物の水洗い・実測を行い、挿図を作成し、平成19年1月中旬までに原稿の執筆を完了する。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。また、この平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。

さて、高松城の城下町として発展した高松市街地は、香東川の東流路が瀬戸内海に注いでいた河口の中洲や砂堆上に立地している。このため、城下町は高松城築城と同時にこの中洲や砂堆を大規模に埋め立てて形成されたと考えられている。香東川は、現在、石滑尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが、17世紀初頭、高松藩に招かれた西嶋八兵衛の河川改修によって一本化されたものである。なお、17世紀の魔川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

第2節 歴史的環境

高松市街地の下に埋没している中洲や砂堆上に初めて人の活動が認められるのは、弥生時代後期である。高松城内南に位置する高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）では、ベースとなる砂層上面より柱穴とともに弥生土器が多く出土し、付近に集落が存在していた可能性が指摘できる。この発掘調査では、平安時代前期の溝もわずかながら確認している。

この地域の土地が安定し、人が恒常的に居住できるようになるのは平安時代後期と考えられる。当時、この地域は笠原郷と呼ばれ、安楽寿院領である野原庄が高松城跡の南方に所在していた。野原庄は、白河院の勅使田が応徳年間頃（11世紀末葉）に立券荘号されたものである。康治2年（1143）8月19日の太政官符によれば野原庄の四至が条里によって表記されていることから、土地が安定し条里地割または条里呼称がこの地まで普及していたと考えられる。

さらに時代が下ると、荘園としての機能以外にも、文安2年（1445）の「兵庫北関入船納帳」には船籍地として名前が記載されていることから、中世においては港町としての機能を有していたと考えられる。時代は過ぎるが、高松城跡西の丸地区の発掘調査では、11世紀後半～13世紀前半の護岸施設とともに県外から搬入された土器が高い比率で出土している。さらに、西の丸地区に隣接する浜ノ町遺跡では、白磁四耳壺を埋納していた13世紀末から15世紀末の集落跡が確認されている。また、本遺跡第3遺構面では16世紀に存在した寺院である無量壽院に関係する遺構・遺物が見つかった。一方、高松城跡東の丸地区に目を転じると、16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている。城跡より南東方向にある片原町遺跡においては、15～16世紀に属するL字形の大溝を検出しており、これは居館の外側にめぐらしていた堀の一部と考えられている。

このように、高松市街地下において、古代末から中世の集落等が確認され、かつて港町が栄えていたと考えられる。この砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は、博多や草戸千軒遺跡にも見られるように全国的な傾向であり、これらの都市をつなぐ交易が行われていたのであろう。このような時代背景のもとに、高松城がこの地に築かれ、城下町が整備されたと考えられる。

さて、この高松城および城下町を造ったのは、豊臣秀吉の家臣であった生駒親正である。豊臣秀吉の



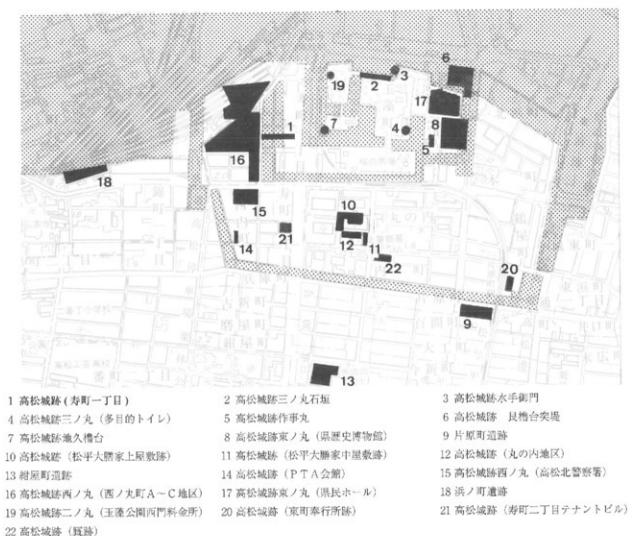
第2図 調査地位図(1) (S:1/5,000)



第3図 調査地位置図(2)(高松城下図を基に作成)(S:1/2,500)

四国征伐により、天正13年(1585)長宗我部元親が降伏し、讃岐国は仙石秀久・十河存保に与えられ、その後尾藤知宣の領国となったが、天正15年(1587)生駒親正が入封し、讃岐17万6千石を領した。高松城は、生駒親正の居城として、翌天正16年から築城され、数年を要して完成された水城である。北の守りを瀬戸内海にゆだね、堀には海水が引き込まれるのが水城と呼ばれる由縁である。また、南方には大手(旧太鼓門)を構え、城の南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は、内堀・中堀・外堀といった三重の堀をめぐらし、内堀より内側には本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配している。本丸は、さらに堀によって他の曲輪と独立しており、本丸と二ノ丸をつなぐ鞘橋を落とすことによって敵の侵入を防ぐ構造となっている。

生駒氏は御家騒動により寛永17年(1640)出羽国矢島に転封となり、代わって松平頼重が寛永19(1642)年に高松城主となり、東讃岐12万石を領した。松平頼重は、城の改修を度々行っているが、寛文10年(1670)頃の大規模な改修では、北ノ丸・東ノ丸を造成するとともに、月見槽・続槽・波槽などを造り、北に設けた水手御門より直接海から出入りができるようにしている。松平氏は明治4年(1871)に廃城になるまで11代にわたって230年間城主を務めた。その後、天守は老朽化のため明治17年(1884)に取り壊され、高松城跡は昭和29年(1954)に高松市が取得し、翌30年玉藻公園として市民に開放し、現在に至っている。一方、史跡として昭和30年(1955)に国指定を受け、文化財の保護が図られている。



第4図 高松城跡周辺主要調査地位置図(S:1/10,000)

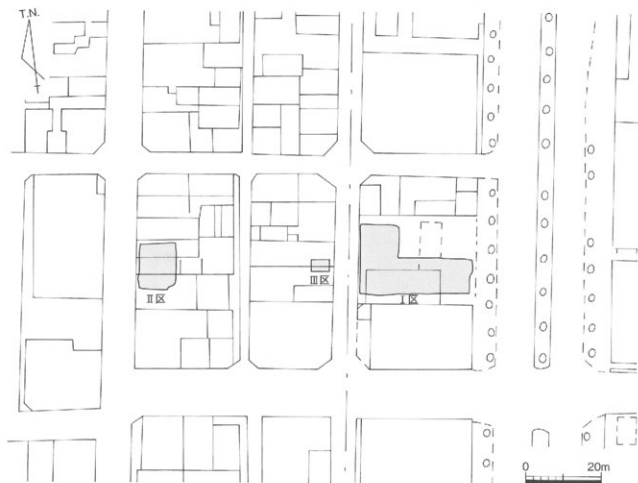
第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

本遺跡の調査は、道路建設に伴う発掘調査であるため東西方向に長い調査区に設定された。第1章で記述したように、平成14年度の調査は国道30号線（通称中央通り）に接する東端の部分と高松駅に面する西端の部分において実施し、東側の調査区をⅠ区、西側をⅡ区と呼称する。平成17年度の調査はⅠ区と道路を挟んだ西側において実施し、Ⅲ区と呼称する。

Ⅰ区は、高松城の中堀の内側、内堀の外側に位置しており、調査前は駐輪場であった。この地点は寛永15～16年に描かれた『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』には「生駒隼人下屋敷」と記載されている。1650年代前半の『高松城下図屏風』では1頭の馬と二人の人物が描かれている。享保年間の『高松城下図』と文化年間の『高松市街古図』、弘化年間の『高松城下町屋敷割図（弘化年間高松城下絵図）』等では何も書かれておらず空白である。

試掘調査の結果によりⅠ区の北東部分にコンクリート基礎が確認され調査対象外となったため、Ⅰ区の平面形は横向きの逆「L」字形を呈する。東西方向の長さは29.50m、南北は18.00mである。調査では中世から明治時代に至る3面の遺構面が検出された。



第5図 調査区設定図 (S: 1/1,000)

第1遺構面では江戸～明治時代の遺構を検出し、標高は1.20 m前後である。主な遺構としては、井戸・溝・土坑・柱穴がある。遺構は調査区全域において検出しているが、北壁の中央から東側にかけては攪乱を受けていた。

第2遺構面では江戸時代の独立柱建物跡・井戸・溝・土坑・柱穴等の遺構を検出し、その標高は1.10 m前後である。調査区の西側ではほぼ全域に遺構を検出したが、東側の北壁付近は第1面と同一の攪乱を受け、南壁付近に石列を有する第1面のSD 1001があり、遺構の検出は中央部の狭い範囲のみである。

第3遺構面は、中世から江戸時代初頭の遺構が調査区全域に分布しており、その標高は0.80～1.00 mである。主な遺構は井戸・溝・土坑・柱穴であり、調査区北西部では遺構面が北方向に緩やかに低くなっており、第3遺構面の上位に確認された遺構面を第3遺構面上層と呼称する。

Ⅱ区は、中堀の西端と推定される位置であり、中堀西側の石垣の確認を目的に調査を実施した。調査前には木造の個人住宅とビルが建っていた。調査区の平面形は長方形を呈し、上端の東西方向の長さは10.00 m、南北12.50 mである。約0.60 mの深さまでコンクリート基礎があり、明治時代に埋め立てられた海砂が地表面から約2.50 mの深さまで達する。その下は中堀の埋土であり、地表面から約3.50 mまで掘り下げたが、堀底面は確認できなかった。さらに、西側の石垣は検出されなかった。

Ⅲ区は、中堀の東端と推定される位置であり、中堀東側の石垣の確認を目的に調査を実施した。調査前にはビルが建っていたため、調査区全域に地表面から約0.60 mの深さまでコンクリート基礎があった。調査は東西5.00 m×南北3.00 mの範囲に鋼鉄製の矢板を打ち込み、その内側に鋼鉄の内枠を設置するという十分な安全対策を講じた後に実施した。調査の結果、東側の石垣は検出されなかった。

第2節 基本土層（第6図）

Ⅰ区では北壁の一部と西壁・南壁の土層図を作成した。

地表面から約0.60 mの深さまで花崗土（第1層）で埋め立てられ、その直下に昭和20年7月4日の高松空襲による焼土・炭を多量に含む黒褐色シルト質細砂（第2層）が最大0.40 m堆積している。

第3～6層は明治時代から第2次世界大戦までの埋め立てである。

第7・8層の灰白色および灰黄色シルト質細砂の上面は第1遺構面である。第8層は最大0.20 mの厚さではほぼ水平な堆積をなしている。第7層は薄く、部分的に確認した。

第13層の褐灰色シルト質極細砂～細砂の上面は第2遺構面である。厚さは0.20 mであり、北西方向に若干低くなっている。西壁の土層図では攪乱により第14層以上が削平されているが、調査区内では攪乱が浅く、第1・2遺構面の遺構が検出されている。

第16層の浅黄色細砂の上面は第3遺構面上層の確認面であり、調査区の北西隅のみに堆積し、北西方向に若干低くなっている。第17層の淡黄色細砂の上面は第3遺構面である。上層と同様に北西方向に低くなっている。

Ⅱ区は現地表面から約3.50 mの深さまで重機により掘り下げるが、崩落しやすい海砂と湧水のため土層図は作成できなかった。現地表面から深さ2.50 mまでは明治時代に埋め立てられた海砂であり、その下位は堀底面近くの堆積であると考えられる暗緑灰色シルトが堆積している。

Ⅲ区は現地表面から約3.40 mの深さまで中～粗砂が厚く堆積し、その下位は黒褐色シルト・灰色細砂・灰白色中～粗砂の薄い層が交互にラミナ状堆積しており、その厚さは約0.50 mである。これらの土層が堀底面近くの堆積であると考えられる。最下層は砂礫層である。

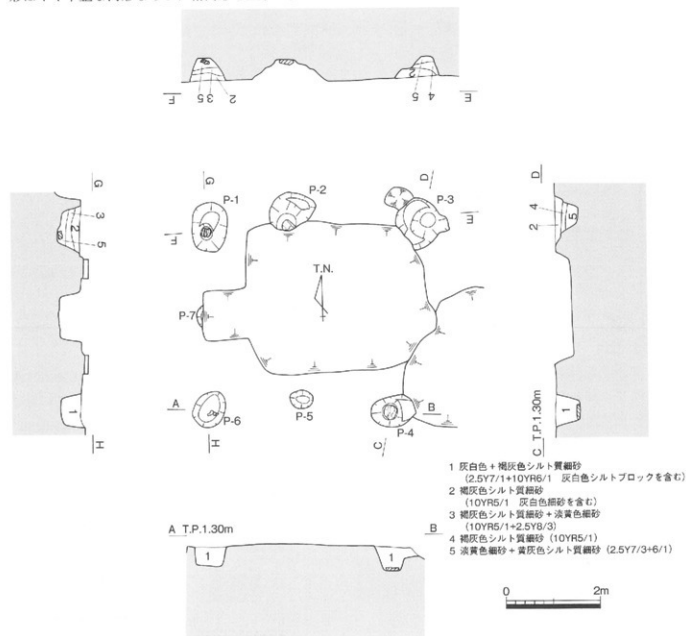
第3節 遺構・遺物

第1小節 Ⅰ区 第2遺構面

Ⅰ 掘立柱建物跡

SB 1201 (第8・9図)

調査区西端の中央において検出した掘立柱建物跡であり、中央部には近代の擾乱が大きく掘り込まれている。検出した標高は1.00～1.07 mである。規模は南北2間×東西2間(4.90×5.30 m)である。主軸方位はN-90°-Eである。検出した柱穴は7個であるが、P-3とP-4の間に擾乱により消失するが1個の柱穴が存在していたと考えられる。南北の芯芯間距離は1.80～2.00 m、東西の芯芯間距離は1.80～3.00 mを測る。P-3の位置が北東側にやや離れており、建物跡の平面形は台形を呈する。直径0.48 mのP-5を除く、その他の柱穴は直径0.80～1.03 m、検出面からの深さ0.40～0.49 mを測り、平面形はやや不整な円形ならびに楕円形を呈する。P-1～4の掘り方は段を有し、P-1・2・4は底面



第8図 SB 1201 平・断面図 (S: 1/80)

に扁平な根石が残存する。埋土は5層に分けられ、水平な堆積状態をなす。出土遺物には11・12のように中世のものも含まれるが、所属時期は16世紀末～17世紀初頭である。

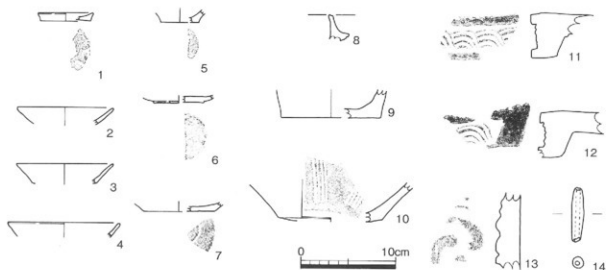
出土遺物は、土師質土器小皿(1～3)、同杯(4～6)、土師器杯(7)、土師質土器羽釜(8)、須恵質土器甕(9)、土師質土器播鉢(10)、軒平瓦(11・12)、軒丸瓦(13)、土鍾(14)である。

1は器高の低い小皿で、体部の調整は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りが施される。2・3は口径10cmを測り、調整はナデである。4は口径11.8cmを測り、5の底部は静止ヘラ切り、6は回転糸切り、7は回転ヘラ切りが施される。

8は直立する口縁部と水平に伸びる鋤部である。9は平底でナデが施される。10は内面に4本一単位の御目がある。

11・12は「重波文の波状文」の軒平瓦であり、波の数は3～5本である。12は瓦当上縁を幅広く面取り、顎後縁に狭い面取りが施される。13は巴文である。

14は細管状の土鍾である。

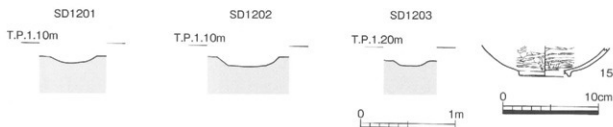


第9図 SB 1201 出土遺物実測図 (S : 1/4)

2 溝

SD 1201 (第7・10図)

調査区北西隅において検出した溝であり、SK 1211に切られる。検出した標高は0.96 mである。溝の方位は狭い検出範囲ではあるがN-90°-Eを示す。検出できた溝の全長は1.30 mで、直線的に延びる。溝の西側は調査区外にかかっているが、SK 1211より東側は検出できなかった。溝の幅は0.50 m、検出面からの深さは5 cmを測る。断面は浅いU字形を呈し、底面のレベルは平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。遺物は出土していないが、検出状況や重複関係から所属時期は17世紀初頭である考えられる。



第10図 SD 1201～1203 断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

S D 1202 (第7・10図)

調査区北西隅において検出した溝であり、S P 1279, S X 1208 に切られ、S K 1211, S X 1209 を切る。溝の南側は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は0.98 mである。溝の方位は狭い検出範囲ではあるがN - 0° - Eを示す。検出できた溝の全長は1.64 mを測り、直線的に延びる。溝の北側は調査区外にかかっている。溝の幅は0.50 ~ 0.68 m、検出面からの深さは0.10 mを測る。断面は浅いU字形を呈し、底面のレベルは平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。遺物は出土していないが、検出状況や重複関係から所属時期は17世紀初頭であると考えられる。

S D 1203 (第7・10図)

調査区北西隅において検出した溝であり、S P 1237・1240・1279, S X 1208 に切られる。検出した標高は1.05 mである。溝の方位は狭い検出範囲ではあるがN - 5° - Eを示す。検出できた溝の全長は2.26 mを測り、直線的に延びる。溝の北側は調査区外にかかっている。溝の幅は0.50 m、検出面からの深さは0.10 mを測る。断面は浅いU字形を呈し、底面のレベルは平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂である。検出状況や重複関係から所属時期は17世紀初頭であると考えられる。

出土遺物は瓦器碗(15)で、その時期は12世紀に比定されるが混入品である。

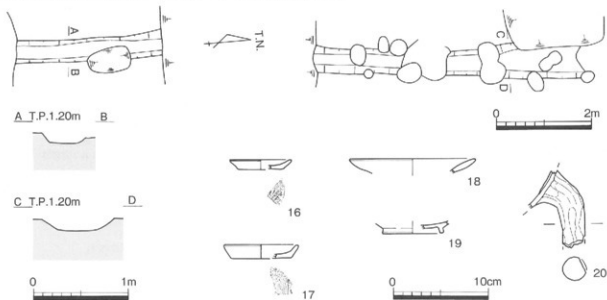
S D 1204 (第11図)

調査区北西隅において検出した溝であり、S E 1201, S K 1210・1214, S P 1268 ~ 1275 に切られる。検出した標高は1.00 ~ 1.08 mである。溝の方位はN - 5° - Eを示す。溝の北端はS K 1210, 南端はS E 1201 に切られ、中央部は近代の攪乱により一部消滅する。検出できた溝の全長は12.00 mを測り、ほぼ直線的に延びる。溝の幅は0.46 ~ 0.75 m、検出面からの深さは0.03 ~ 0.12 mを測る。断面は浅いU字形を呈し、底面のレベルは南から北方向に緩やかに低くなる。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。他の遺構との関係から、所属時期は16世紀末期 ~ 17世紀初頭であると考えられる。

出土遺物は、土師質土器皿(16・17)、同甕(18)、黒色土器碗(19)、土師質土器足釜(20)である。16・17は器高の低い小皿で、体部の調整は回転ナデである。16の底部は回転ヘラ切り後に板目が施され、17は回転ヘラ切りが施される。

18は甕の口縁部であり、口縁部の中央はやや厚くなる。

19はやや高い高台を有し、内面にヘラミガキが施される。



第11図 S D 1204 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/80・1/40・1/4)

3 井戸

SE 1201 (第12～16図)

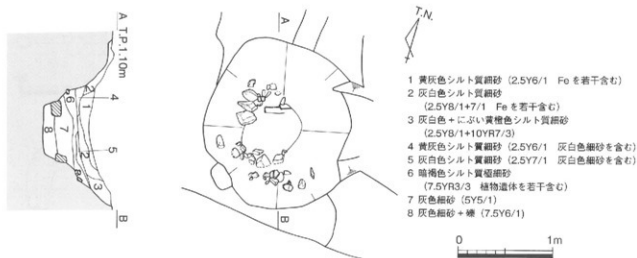
調査区南西隅において検出した井戸であり、西側上面の一部は第1遺構面のS X 1003により削平され、東側は試掘トレンチにかかる。本遺構はS D 1204とS X 1206を切る。検出した標高は1.00 m前後である。平面形は南北方向に長軸を持つやや不整な楕円形を呈し、南北方向の直径は3.60 m、東西方向は3.15 mを測る。検出面から最深部までの深さは1.50 mを測り、底面は中央より若干南西側に片寄った位置にある。底面の直径は1.30 mを測る。井戸の断面形態は逆台形を呈し、掘り方は急傾斜であり、僅かな段を有する。埋土の中央から下位にかけては大小の石が多量に出土した。同様に側面にも大小の石を検出した。これらの石は井戸枠の石組みに使用された石材であると考えられるが、石組みの大部分は崩落している。井戸の底面には井戸枠の板材が数枚出土した。石材と板材の出土から判断して、本遺構は石組みと木枠を構造とする井戸であったと考えられる。埋土は8層に分層できた。第1層は黄灰色シルト質細砂、第2層は灰白色シルト質細砂、第3層は灰白色+にぶい黄橙色シルト質細砂、第4層は灰白色細砂を含む黄灰色シルト質細砂、第5層は灰白色細砂を含む灰白色シルト質細砂、第6層は植物遺体を若干含む暗褐色シルト質細砂、第7層は灰色細砂、第8層は灰色細砂+礫である。上層の第1～5層はやや乱れた堆積状態であるが、下層の第6～8層は水平な堆積である。出土遺物には古い要素を持つ遺物も含まれるが、所属時期は17世紀前半であると考えられる。

出土遺物は、磁器皿(21)、同碗(22・23)、陶器甕(24・27～30)、同杯(25)、同壺(26)、同鉢鉢(31～39)、土師質土器皿(40～53)、同杯(54～57)、同鉢(58)、同鍋(60)、同足釜(61・62)、瓦質土器(59)、瓦器碗(63)、白磁碗(64)、青磁碗(65)、須恵器甕(66)、軒丸瓦(67)、丸瓦(68・69)、軒平瓦(70)、道具瓦(71)、鬼瓦(72)、瓦製円盤(73)、土錘(74～76)、加工板(77～83)、曲物(84)、骨(85)である。

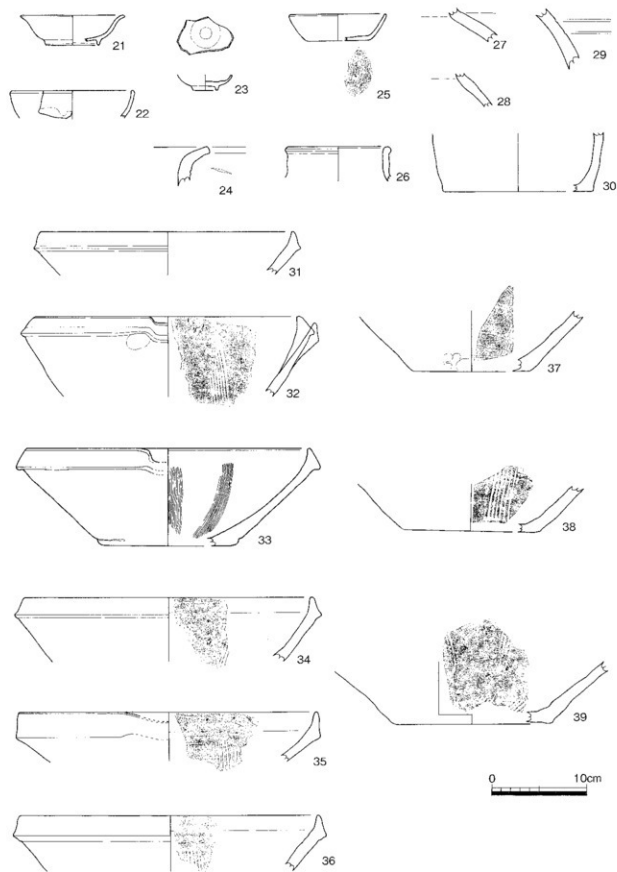
21～23は肥前系磁器である。21は折縁の小皿であり、皿付が露胎である。22は内湾する体部で、下半は無釉である。23は見込に蛇ノ目釉割りが施される。

24は陶器甕の口縁部である。25～30は備前焼陶器である。25は若干内湾気味の体部で、底面の調整は回転糸切りの後に板日が施される。26は直立する口縁部であり、口縁部端部がやや肥厚する。27～29は肩部破片である。30は平底からほぼ直立する。

31～39は備前焼鉢である。31～36は上下にやや拡張する口縁部であり、外面の調整は回転ナデ



第12図 SE 1201 平・断面図 (S : 1/80)



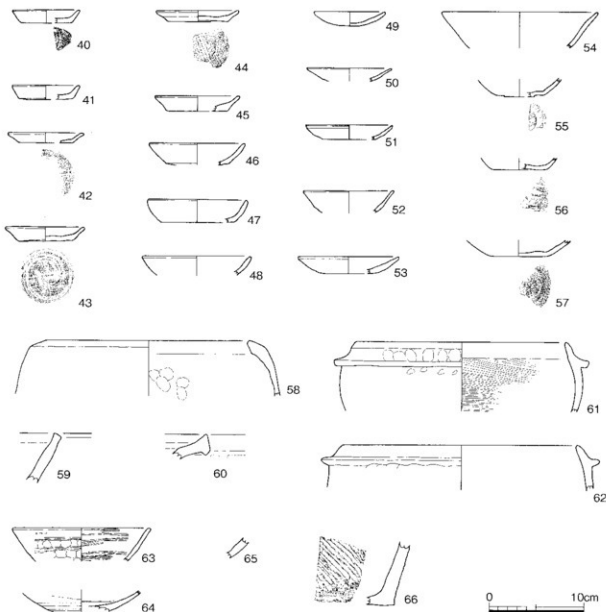
第13图 SE 1201 出土物实测图 (1) (S: 1/4)

が施される。内面の卸目は6～8本一単位である。

40～45は口径8～9cmを測り、体部の短い形態の小皿である。40の底部の調整は回転ヘラ切りの後に回転ヘラナデ、41は回転ヘラ切りの後にナデ、42・43は回転ヘラ切りの後に板目、44は回転ヘラ切りの後に板目、回転ヘラナデが施される。46～48は口径10～11.5cmを測り、体部と底部の境が明確である。46の底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。47は僅かに内湾気味の体部である。49～53は体部と底部の境が不明瞭で、体部が緩やかな傾斜で立ち上がる。49の底部はナデが施される。50・51・53はロクロ成形痕が明瞭に見られる。

54は口径16.4cmを測り、体部はほぼ直線的に延びる。55の底部は回転ヘラ切りの後に板目、回転ヘラナデが施され、56は回転ヘラ切りの後に板目、57は回転ヘラ切りの後にナデが施される。

61・62は内傾する口縁部の外面に鐏が付き、鐏からの立ち上がりがやや長い。61の体部外面は指頭圧が施され、煤が付着する。内面は横方向のハゲが施される。



第14図 S E 1201 出土遺物実測図(2) (S:1/4)

63は体部外面に指頭圧の後にヘラミガキ、内面に間隔のあくヘラミガキが施される。

64は底部近くの体部破片であり、外面に同軸ヘラケズリが施される。65は鎗蓮弁文を配する。

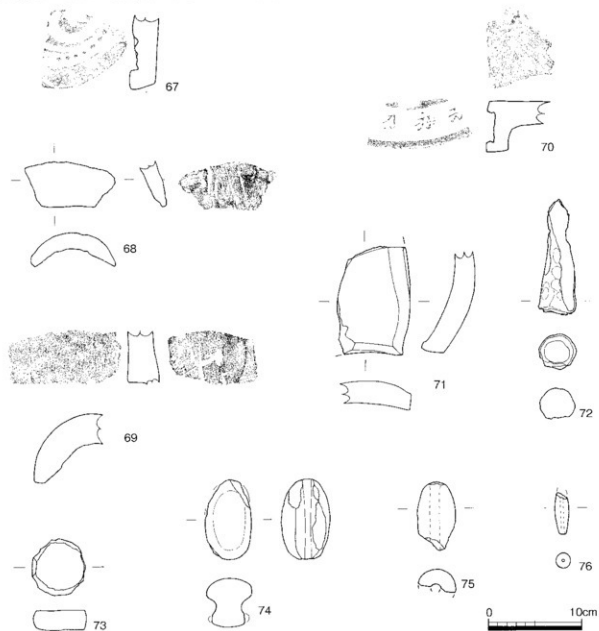
66は外面に平行タタキ、内面に指頭圧・ヘラナデが施される。

67は瓦当に巴文がある軒丸瓦で、尾は長く、珠文の間隔は狭い。68は玉縁の破片である。69は凸面に縄目叩き痕、凹面に布目が残存する。70は瓦当に梵字のある軒平瓦で、凹面は布目・コビキAの痕跡が残存し、凸面は横方向のヘラナデが施される。梵字は胎藏界五仏を表し、無量寿如来・大日如来・閼婆摩王如来を意味する3文字が残存する。71は僅かに湾曲する道具瓦、72は鬼瓦の角である。

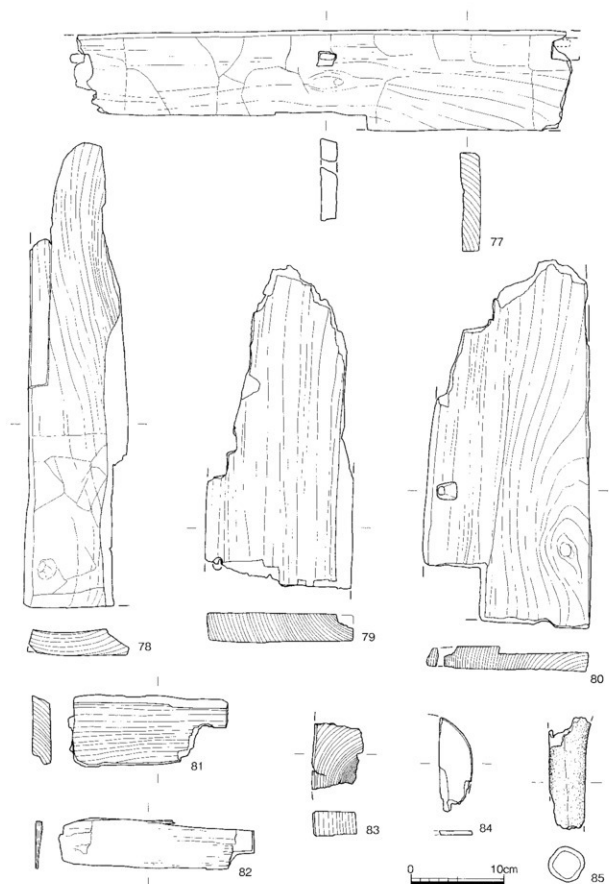
73は瓦製の円盤であり、不整な円形に加工する。

74は側面に溝を有する有溝土鍾、75は管状土鍾、76は細管状土鍾である。

77～81は井戸枠の可能性のある板材であり、77・79～81は框目材、78は板目材である。77・78は加工痕が明瞭に見られ、77・79・80は方形の孔が1ないし2個残存する。82は薄い板材であり、加工痕が見られる。83は切断面を有する。84は曲物の底板である。



第15図 SE 1201 出土遺物実測図(3) (S: 1/4)



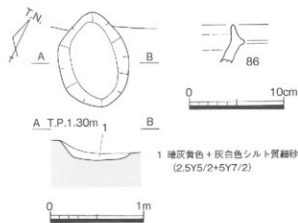
第16図 SE 1201 出土遺物実測図(4)(S:1/4)

4 土坑

S K 1201 (第17図)

調査区の南端中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり、S K 1202 を切る。検出した標高は1.20 m前後である。平面形は不整な楕円形である。南北方向の長軸は2.00 m、東西方向の短軸は0.75 mを測る。検出面からの深さは0.20 mである。底面は平坦である。埋土は暗灰黄色+灰白色シルト質細砂である。所属時期は17世紀前半であると考えられる。

出土遺物は、備前焼罎鉢 (86) であり、口縁端部を上下に少し拡張する。



第17図 S K 1201 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

S K 1202 (第18図)

調査区中央において検出した土坑であり、単独で存在する。検出した標高は1.10 m前後である。南半分は試掘トレンチにより削平される。残存する平面形は不整な円形であり、南北方向の直径は1.04 m以上、東西方向は1.07 mを測る。検出面からの深さは0.10 mである。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄色+黄褐色シルト質細砂である。出土遺物や埋土から所属時期は17世紀初頭であると考えられる。

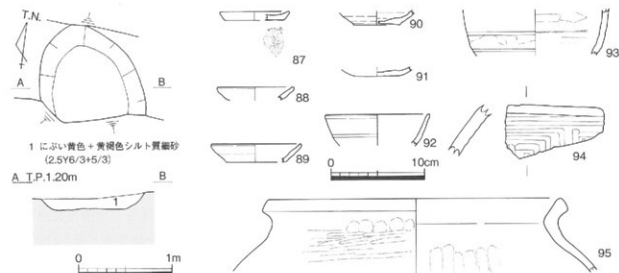
出土遺物は、土師質土器皿 (87~89)、同杯 (90・91)、陶器碗 (92)、同鉢 (93・94)、土師質土器甕 (95) である。

87・88は体部の短い形態の小皿であり、87の底部は回転ヘラ切りの後にヘラナデが施される。89は直線的な体部で、底部との境は明確である。

90は体部の内外面にロクロ成形痕が明瞭に残存し、底部は回転系切りが施される。91は体部と底部の境が不明瞭であり、底部にはナデが施される。

92は肥前系陶器碗で、外面に沈線を2本巡らし、内面にナデ・板ナデが施される。

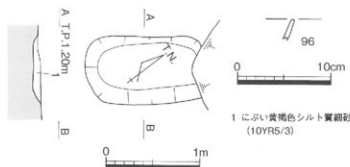
95は短く外反する口縁部で、体部外面は指頭圧、ヘラミガキ、内面は指頭圧、ナデが施される。



第18図 S K 1202 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

S K 1203 (第19図)

調査区中央において検出した土坑であり、S K 1207 を切る。検出した標高は1.00 mである。平面形は隅丸長方形であり、南北方向の長軸は1.15 m以上、東西方向の短軸は0.70 mを測る。検出面からの深さは8 cmである。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂である。所属時期は17世紀前半である。



第19図 S K1203 平・断面図及び出土遺物実測図
(S : 1/40・1/4)

出土遺物は、肥前系磁器碗(96)である。

S K 1204 (第20図)

調査区中央において検出した土坑であり、S K 1205・1208 に切られる。検出した標高は0.95 m前後である。平面形は不整な円形である。検出した規模は南北方向0.80 m、東西方向0.74 mを測る。検出面からの深さは2 cmである。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。検出状況や他の遺構との重複関係から所属時期は17世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は、瓦器碗(97・98)、数点の土師質土器破片がある。97・98は口縁部が若干外反する器形で、体部外面に指頭圧と僅かなヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。

S K 1205 (第20図)

調査区中央において検出した土坑であり、S K 1204・1206 を切り、S K 1208 に切られる。検出した標高は0.92 mである。平面形は不整な隅丸長方形であり、南北方向の長軸は0.80 m、東西方向の短軸は0.50 mを測る。検出面からの深さは3～6 cmである。底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。検出状況や他の土坑との重複関係から、所属時期は17世紀前半であると考えられる。

出土遺物は、数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

S K 1206 (第20図)

調査区中央において検出した土坑であり、S K 1205・1208、S X 1202 に切られる。検出した標高は0.88 m前後である。本遺構の北側は近代の掘削により消滅し、さらに他の遺構に切られるため平面形の全容は不明であるが、残存する形から円形であると考えられる。検出した規模は、南北方向1.17 m、東西方向1.34 mを測る。検出面からの深さは4～8 cmである。底面は北方向にやや低くなるが、ほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。検出状況や他の土坑との重複関係から、所属時期は17世紀前半であると考えられる。

出土遺物は、数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

S K 1207 (第20図)

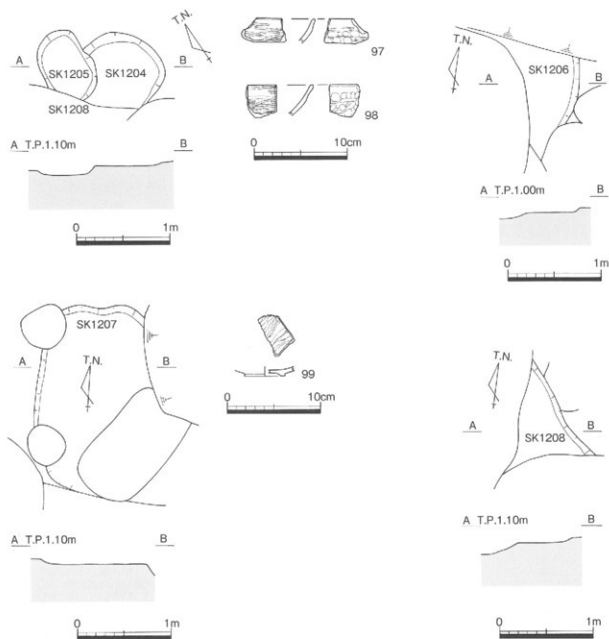
調査区中央において検出した土坑であり、S K 1203、S P 1221・1222 に切られる。検出した標高は0.93～0.96 mである。本遺構の北東側は近代の掘削により消滅し、さらに南側は試掘トレンチにより削平される。残存する形から平面形は隅丸長方形であると考えられる。検出した規模は、南北方向の長軸が1.98 m、東西方向の短軸が1.25 mを測る。検出面からの深さは3～8 cmである。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂である。重複関係から所属時期は17世紀前半と考えられる。

図化できた出土遺物は、瓦器碗(99)だが、その他に数点の土師質土器破片がある。99は低い高台で、内面にヘラミガキが施される。

SK 1208 (第20図)

調査区中央において検出した土坑であり、SK 1204・1205・1206を切り、SX 1202と第1遺構面SE 1003に切られる。検出した標高は0.96 m前後である。本遺構の大部分はSX 1202とSE 1003に切られ、北側の一部のみ残存する。このために平面形の全容は不明であるが、検出した北壁は直線的であり、大規模な遺構であると想定できる。検出した規模は、南北方向1.10 m、東西方向0.84 mを測る。検出面からの深さは0.10 mである。底面はほぼ平坦である。埋土にはふい黄褐色シルト質細砂の単一層である。検出状況や他の土坑との重複関係から、所属時期は17世紀前半であると考えられる。

出土遺物は、数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。



第20図 SK 1204～1208 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40・1/4)

SK 1209 (第21～23図)

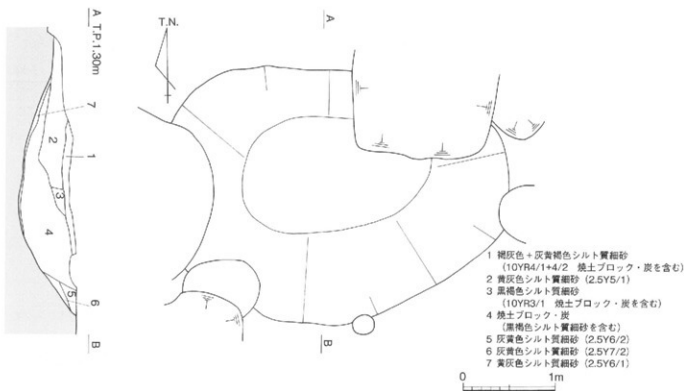
調査区東端において検出した土坑であり、SP 1202～1210、第1遺構面SE 1002に切られる。本遺構の北東隅は近代の掘削により消滅する。検出した標高は1.15 mである。平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。SE 1002に切られるため東西方向本来の規模は確定できないが、検出した東西方向の長軸は3.15 m、南北方向の短軸は2.72 mを測る。底面の平面形は上場と同様に東西方向に長い楕円形を呈し、その規模は2.05 m × 1.25 mを測る。底面は中央部が若干低くなる。掘り方は非常に緩やかな傾斜である。埋土は7層に細分でき、第1層は褐灰色+灰黄褐色シルト質細砂、第2層は黄灰色シルト質細砂、第3層は黒褐色シルト質細砂、第4層は黒褐色シルト質細砂を含む焼土ブロック・炭、第5・6層は灰黄色シルト質細砂、第7層は黄灰色シルト質細砂である。第1・3層は焼土ブロック・炭を含み、さらに第4層焼土ブロック・炭が厚く堆積しており、本遺構は火災による焼土を埋めたと考えられる。所属時期は出土遺物や重複関係から17世紀前半であると考えられる。

出土遺物は、陶器皿(100)、同蓋(101)、同播鉢(102)、同甕(103・104)、土師質土器播鉢(105)、同足釜(106・107)、同鍋(108)、同甕(109)、同皿(110～116)、同杯(117～121)、同火舎(122)、青磁碗(123)、須恵器高杯(124)、軒丸瓦(125)、丸瓦(126)、瓦製円盤(127)、砥石(128)、鉄製品(129)である。

100は肥前系陶器皿であり、口縁部が僅かに外反する。高台は非常に小さく、体部外面下半は露胎である。101は軟質施箱陶器であり、外面に細い沈線を通ずる。

102は備前焼播鉢で、内面に5本一単位の卸目が見られる。体部外面は回転ナデが施される。103・104は備前焼甕であり、103の口縁端部は折り返され、玉縁状口縁となる。104の外面は回転ナデ・ナデ、内面は回転ナデ・板ナデが施される。

105は口縁部が肥厚し、内面に4本一単位の浅い卸目が見られる。106・107は鍋からの立ち上がりやや長い器形であり、106の内面は横方向のハケが施される。108は口縁部内面と口縁端部外面に横方



第21図 SK 1209 平・断面図 (S: 1/40)

向の粗いハケが施される。109 は 2 本の細い沈線の間に花文状の刻印が見られる。

110 ～ 116 は口径 8 ～ 10cm を測り、体部と底部の境が明確である。110 の底部は回転ヘラ切りの後に回転ヘラケズリ、内面に指ナデが施される。111 の底部は回転ヘラ切りの後に板目が施され、口縁端部に煤が付着する。114 の底部は回転ヘラ切りの後にナデ、115 は回転ヘラ切りが施される。

117 ～ 121 は底部であり、118 の底部は回転ヘラ切りの後にナデ、119・120 は内外面にロクロ成形痕が明瞭に見られ、底部に回転ヘラ切りの後にナデ、120 の底部は板目・回転ヘラナデが施される。

122 は口縁端部が外側に大きく張り出し、内面に 2 本の粘土帯を貼り付ける。

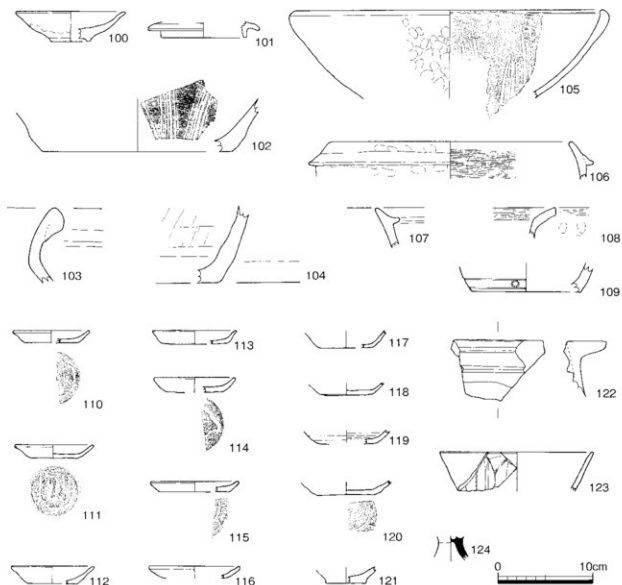
123 は竈運弁文を配する青磁碗である

125 は瓦当に巴文がみられる軒丸瓦であり、尾は長く、珠文の間隔は狭い。瓦当裏面はナデが施される。

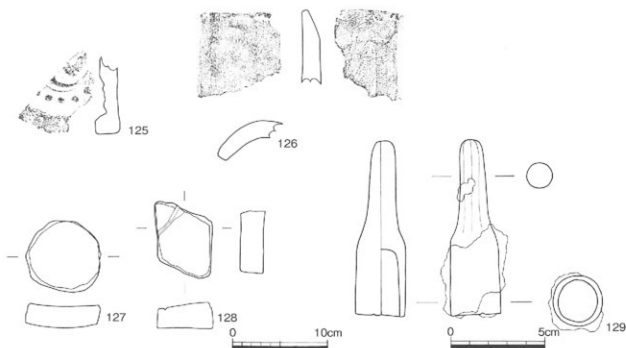
126 は凸面に縄叩き痕、凹面に布目が残存する。127 は瓦を円形に加工する。

128 は砂岩の砥石であり、2 面に使用痕が見られる。

129 は用途不明の鉄製品で、下半はソケット状の中空である。



第 22 図 SK 1209 出土遺物実測図 (1) (S : 1/4)



第 23 図 SK 1209 出土遺物実測図 (2) (S : 1/4・1/2)

SK 1210 (第 24 図)

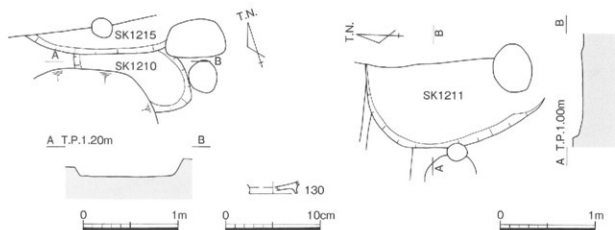
調査区北西隅において検出した土坑であり、SK 1215、SP 1263 に切られる。検出した標高は 1.05 m である。本遺構の北側は近代の擾乱により消滅する。平面形は東西に長い楕円形であり、東西方向の長軸は 1.32 m を測る。検出面からの深さは 0.17 m である。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。出土遺物と重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は、須恵質土器碗 (130) であるが、ほかに土師質土器と陶磁器の小片が出土した。

SK 1211 (第 24 図)

調査区北西隅において検出した土坑であり、SD 1201 を切り、SD 1202、SP 1279・1280 に切られる。検出した標高は 0.95 m である。平面形は不整な円形であり、検出した南北方向は 1.92 m、東西方向は 0.88 m を測る。検出面からの深さは 5 ~ 12 cm である。底面は北方向に緩やかに下がる。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。出土遺物と重複関係から所属時期は 17 世紀前半と考えられる。

出土遺物は、数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。



第 24 図 SK 1210・1211・1215 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

S K 1212 (第 25 図)

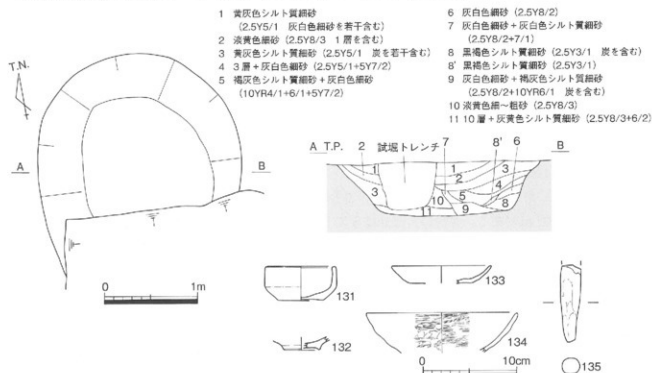
調査区北西隅において検出した土坑であり、単独に存在するが、南側は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は 0.94 ~ 1.00 m である。平面形は円形であり、検出した南北方向の長さは 1.68 m、東西方向の直径は 2.18 m を測る。検出面からの深さは 0.57 m である。底面はほぼ平坦である。掘り方は緩やかな傾斜であり、断面は逆台形を呈する。埋土は 10 層に細分でき、その堆積過程は次の 3 段階になると考えられる。まず、最下層の第 10・11 層が西方から堆積し、次に第 4 ~ 9 層が短期間に堆積し、最後に第 1 ~ 3 層が全体を覆うようにレンズ状に堆積する。出土遺物や埋土から所屬時期は、17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は、陶器鉢 (131)、土師質土器椀 (132)、同杯 (133)、同足釜 (135)、瓦器椀 (134) である。

131 は軟質施釉陶器であり、体部下半は露胎である。底部は回転ヘラ切りが施される。

132 は低い高台を有し、内面・底面はナデが施される。133 は口径 10.8 cm を測り、底部に回転ヘラ切りの後にナデが施される。体部内外面にクロコ成形成痕が明瞭に残る。

134 は体部外面に指頭圧、ヘラミガキ、内面に細かいヘラミガキが施される。

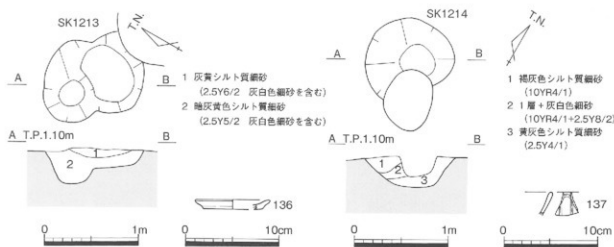


第 25 図 SK 1212 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

S K 1213 (第 26 図)

調査区北西側において検出した土坑であり、SK 1214 に切られる。検出した標高は 1.00 m 前後である。平面形は中央に挟りのある楕円形であり、2 基の土坑が合体したような形である。南北方向の長軸は 1.07 m、東西方向の短軸は 0.85 m を測る。掘り方は緩やかな傾斜で、底面は段を有し、北西寄りに最深部がある。検出面から最深部までの深さは 0.37 m を測り、最深部と段部の比高差は 0.10 m である。段部はほぼ平坦であり、底面は狭い。埋土は 2 層に分層でき、第 1 層は灰白色細砂を含む灰黄色シルト質細砂、第 2 層は灰白色細砂を含む暗灰黄色シルト質細砂であり、その中で第 2 層が大部分を占める。出土遺物や重複関係から所屬時期は 17 世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は、土師質土器皿 (136) のみであるが、数点の土師質土器と陶磁器の破片も出土する。136 は非常に体部の短い形態の小皿であり、底面にナデが施される。



第26図 SK 1213・1214 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

SK 1214 (第26図)

調査区北西側において検出した土坑であり、SD 1204、SK 1213を切り、SP 1286に切られる。検出した標高は1.05 m前後である。平面形は不整な円形であり、直径は0.96 mを測る。底面は東側にやや片寄る。検出面からの深さは0.31 mを測る。底面は狭く、土坑断面は逆台形を呈する。埋土は3層に分類でき、第1層は褐灰色シルト質細砂、第2層は褐灰色シルト質細砂+灰白色細砂、第3層は黄灰色シルト質細砂である。出土遺物や重複関係から所属時期は17世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は、青磁碗(137)のみであるが、数点の土師質土器と陶磁器の破片も出土する。137は口縁部の小片であり、口径は不明である。外面に鎗蓮弁文を配する。

SK 1215 (第24図)

調査区北西隅において検出した土坑であり、SD 1204、SK 1210を切り、SX 1208に切られる。検出した標高は1.02 mである。遺構の大部分はSX 1208に切られており、平面形は不明である。検出した南北方向は0.36 mを測るのみである。検出面からの深さは3 cmである。底面は北方向に緩やかに下がる。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。検出状況や重複関係から所属時期は17世紀前半であると考えられる。出土遺物は、数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

5 柱穴

SP 1201 (第27図)

調査区中央において検出した柱穴であり、SX 1201と重複する。検出した標高は1.10 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.20 m、深さは8 cmを測る。埋土は浅黄色シルト質細砂である。

出土遺物は、鉄釘(138)であり、断面は方形である。

SP 1221 (第27図)

調査区中央において検出した柱穴であり、SK 1207を切る。検出した標高は0.98 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.42 m、深さ6 cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂+灰白色細砂である。

出土遺物は、龍泉窯系青磁碗(139)であり、見込みに片切彫りで劃花文を描く。

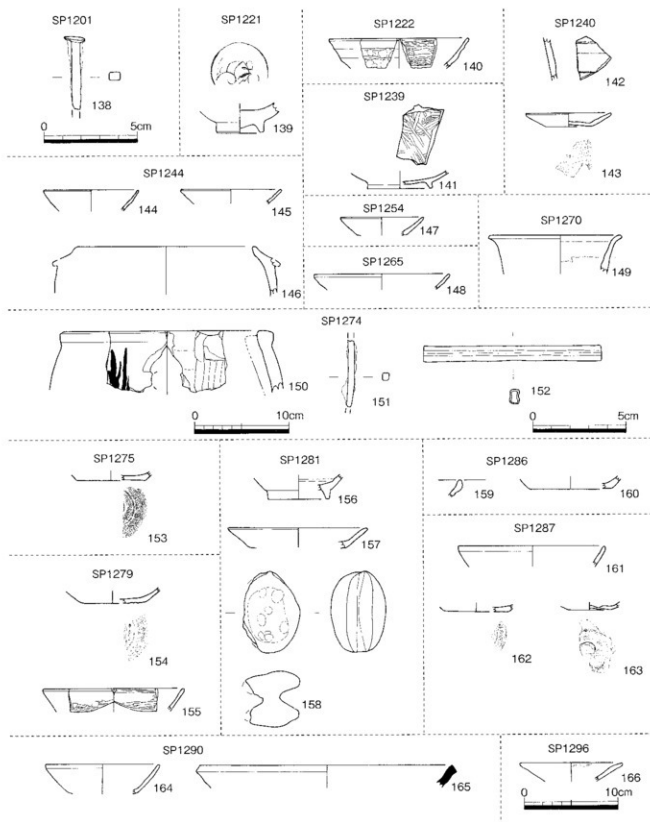
SP 1222 (第27図)

調査区中央において検出した柱穴であり、SK 1207を切る。検出した標高は0.93 mである。平面形は不整な円形を呈し、直径は0.46 × 0.48 m、深さは5 cmを測る。埋土は黒褐色+灰黄褐色シルト質細砂+灰白色細砂である。出土遺物は、瓦器碗(140)で、内面に細かなヘラミガキが施される。

SP 1239 (第 27 図)

調査区北西側において検出した柱穴であり、単独で存在する。検出した標高は 1.06 m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.25 m、深さは 0.20 m を測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は、瓦器碗 (141) で、やや高い高台を持つ。内面はヘラミガキが施される。



第 27 図 第 2 遺構面 SP 出土遺物実測図 (S : 1/4・1/2)

S P 1240 (第 27 図)

調査区北西側において検出した柱穴であり、S D 1204 を切り、S P 1299 に切られる。検出した標高は 1.04 m である。平面形は楕円形を呈し、直径は 0.40 × 0.70 m、深さは 0.10 m を測る。埋土は灰黄褐色 + 淡黄色シルト質細砂である。

出土遺物は、陶器甕 (142)、土師質土器杯 (143) である。143 は、S P 1244 出土の破片と接合する。底部は回転ヘラ切りの後に板目、内面にナデが施される。

S P 1244 (第 27 図)

調査区北西側において検出した柱穴であり、S X 1207 を切る。検出した標高は 1.01 m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.34 m、深さは 0.16 m を測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は、土師質土器杯 (144・145)、同足釜 (146) である。

S P 1254 (第 27 図)

調査区北西側において検出した柱穴であり、単独で存在する。検出した標高は 1.03 m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.25 m、深さは 0.10 m を測る。埋土は褐色シルト質細砂である。

出土遺物は、土師質土器杯 (147) である。

S P 1265 (第 27 図)

調査区北西隅において検出した柱穴であり、S X 1208 を切る。柱穴の北半分は調査区外にかかる。検出した標高は 1.02 m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.48 m、深さは 9 cm を測る。埋土は褐色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は、須恵質土器杯 (148) である。

S P 1270 (第 27 図)

調査区北西隅において検出した柱穴であり、S D 1204 を切り、S P 1285 と重複する。検出した標高は 1.05 m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.42 m、深さは 0.10 m を測る。埋土は灰白色粗砂を含む灰黄褐色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は、肥前系陶器壺 (149) である。

S P 1274 (第 27 図)

調査区北西側において検出した柱穴であり、S D 1204 を切り、S P 1273 と重複する。検出した標高は 1.00 m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.25 m、深さは 0.12 m を測る。埋土はにぶい黄色シルト質細砂である。

出土遺物は、土師質土器火鉢 (150)、鉄釘 (151)、青銅品 (152) である。150 は外面に墨書が見られ、内面に器受用の突起がある。151 は断面方形である。152 は用途不明で、断面が 8 の字形を呈する。

S P 1275 (第 27 図)

調査区北西側において検出した柱穴であり、S D 1204 を切る。検出した標高は 1.04 m である。平面形は楕円形を呈し、直径は 0.30 × 0.42 m、深さは 0.14 m を測る。埋土は灰白色細砂を多量に含むにぶい黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は、土師質土器杯 (153) で、底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。

S P 1279 (第 27 図)

調査区北西隅において検出した柱穴であり、S D 1202、S K 1211 を切る。検出した標高は 0.96 m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.40 m、深さは 0.13 m を測る。埋土は淡黄色シルト質細砂である。

出土遺物は、土師質土器杯 (154)、黒色土器杯 (155) である。154 は底部に回転ヘラ切りが施される。155 は黒色土器 A 類で、外面に指頭圧とヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。

S P 1281 (第27図)

調査区北西隅において検出した柱穴であり、S P 1280に切られ、S P 1287と重複する。検出した標高は0.98 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.58 m、深さは0.13 mを測る。埋土は黄褐色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は、磁器碗(156)、土師質土器杯(157)、有溝土鍾(158)である。156は外面露胎であり、高い高台を持つ。157は15cmの口径に対して低い器高で、底部はナデが施される。

S P 1286 (第27図)

調査区北西隅において検出した柱穴であり、S D 1204、S K 1214を切る。検出した標高は1.05 mである。平面形は楕円形を呈し、直径は0.56 × 0.40 m、深さは0.10 mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は、白磁碗(159)、土師質土器杯(160)である。159は玉縁状の口縁部である。160は底部に回転ヘラケズリが施され、内面には黒漆が付着する。

S P 1287 (第27図)

調査区北西隅において検出した柱穴であり、S P 1281と重複する。検出した標高は0.94 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.70 m、深さは0.44 mを測る。埋土は黄灰色シルト質細砂+灰白色細砂+灰白色シルトである。

出土遺物は、黒色土器碗(161)、土師質土器杯(162・163)である。161は黒色土器A類であり、162の底部は回転ヘラケズリ、163は回転ヘラ切りの後にナデが施される。

S P 1290 (第27図)

調査区北西隅において検出した柱穴であり、S P 1232・1233に切られる。検出した標高は1.01 mである。平面形は楕円形を呈し、直径は0.84 × 0.65 m、深さは0.16 mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂の単一層である。出土遺物は、土師質土器杯(164)、須恵器甕(165)である。

S P 1296 (第27図)

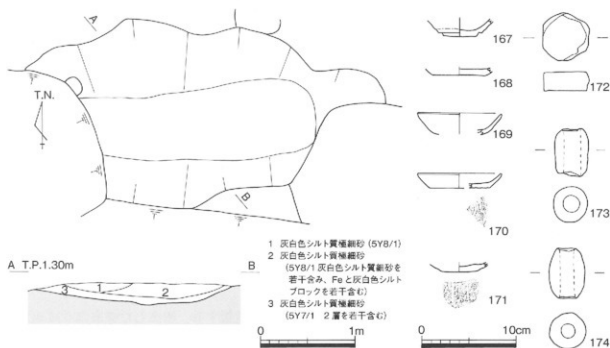
調査区南西隅において検出した柱穴である。検出した標高は1.10 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.22 m、深さは5cmを測る。出土遺物は、土師質土器杯(166)である。

6 性格不明遺構

S X 1201 (第28図)

調査区中央やや東寄りにおいて検出した落ち込みであり、S P 1201・1216と重複する。本遺構の東端は第1遺構面のS K 1005、南側は第1遺構面のS D 1001に切られ、西端は試掘トレンチにより消滅する。検出した標高は1.15 mである。平面形は東西方向に長軸を持つ不整な楕円形を呈する。検出した長軸の長さは3.10 mを測り、南北方向の短軸は1.95 mを測る。底面は上端と同様で東西方向に長い平面形であり、検出した東西方向の長さは2.30 m、南北方向は0.70 mを測る。検出面からの深さは0.23 mを測る。掘り方は非常に緩やかである。底面は西方向に若干低くなる。埋土は色調や包含物の若干違う3層の灰白色シルト質極細砂である。所属時期は17世紀前半であると考えられる。

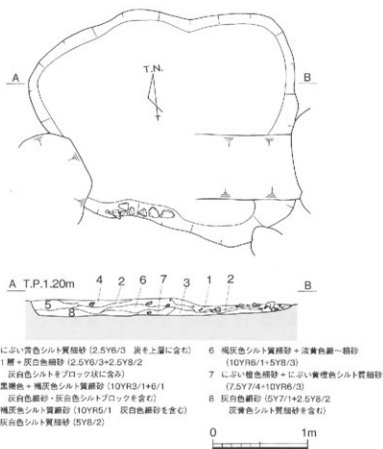
出土遺物は、陶器碗(167)、同皿(168)、土師質土器皿(169～171)、瓦製円盤(172)、土鍾(173・174)である。167は削り出し風の高台で、外面下半は露胎である。168は底部に回転ヘラケズリが施される。169は直線的な体部で、体部と底部の境は不明瞭である。170は体部の短い形態の小皿であり、底部は回転ヘラ切りが施される。171の底部は静止糸切りの後にヘラケズリが施される。172は瓦を円形に加工作る。173・174は管状土鍾であり、中央に径の大きな孔を穿つ。



第28図 SX 1201 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

SX 1202 (第29～31図)

調査区中央やや西寄りにおいて検出した落ち込みであり、SK 1201と第1遺構面のSE 1003に切れ、SK 1206・1208を切る。本遺構の南東隅は試掘トレンチにより、南西隅は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は0.86～1.16 mである。平面形は北側に長辺を持つ不整な台形を呈する。長辺の長さは約2.60 m、短辺は約2.20 mであり、南北方向の長さは約2.25 mを測る。検出面からの深さは0.46 mを測り、底面はほぼ平坦である。南西隅付近の壁面に沿って拳大～人頭大の石が並んで検出された。埋土は8層に細分でき、その堆積状態は複雑であり、上層の第1・2層には礫や小石を多量に含む。出土遺物や重複関係から所属時期は17世紀前半であると考えられる。

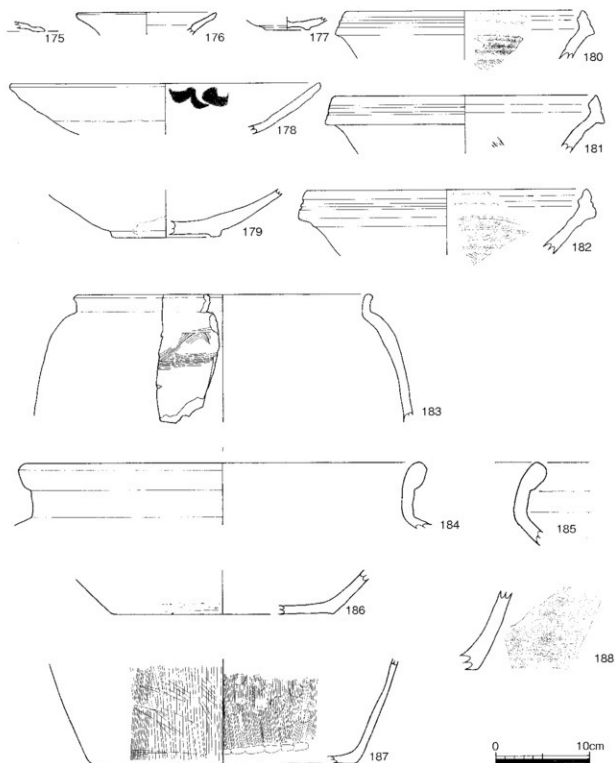


第29図 SX 1202 平・断面図 (S : 1/40)

出土遺物は、陶器蓋 (175)、同皿 (176)、磁器皿 (177)、陶器大皿 (178)、陶器鉢 (179)、同鉢鉢 (180～182)、同甕 (183～188)、土師質土器甕 (189～190)、同足釜 (191～192)、同皿 (193～195)、同杯 (196～200)、同焼塩壺 (201)、同碗 (202)、弥生土器高杯 (203)、イダコ壺 (204)、土鍾 (205)、軒丸瓦 (206～208)、獅子瓦 (209) である。

175 は蓋の小片である。176 は肥前系陶器で、体部で折れ、口縁端部が内方向に先細る。177 は肥前系磁器で、内面に施釉される。低い高台であり、壺付は静止ヘラ切りが施される。178 は肥前系陶器であり、直線的な体部の外面下半は露胎である。179 は肥前系陶器で、扁平な高台を持つ。

180 ～ 182 は備前焼指鉢で、口縁部を上下に拡張し、門線を2本みられる。卸目は斜め方向に施され

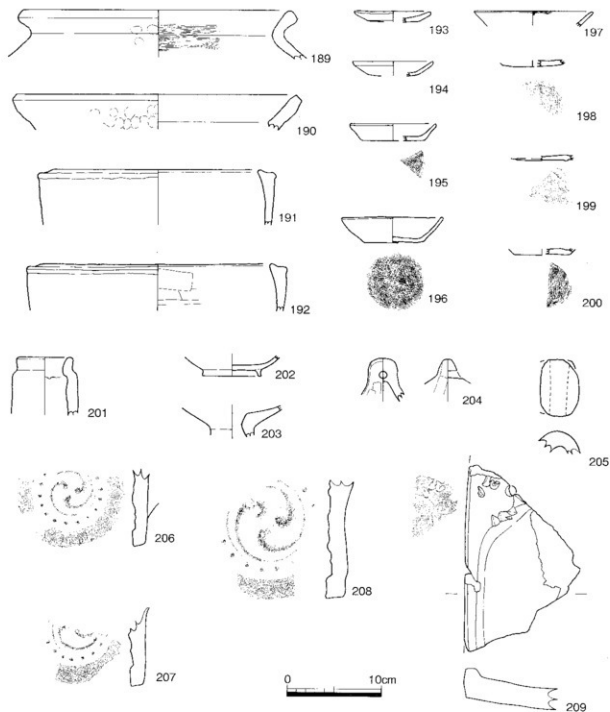


第30図 S X 1202 出土遺物実測図 (1) (S : 1/4)

る。183～188は備前焼甕である。183は口縁部が短く直立し、肩部外面に櫛描直線文と波状文がある。184・185は大甕の口縁部であり、口縁部は直立し、口縁端部は外側に拡張する。186～188は平底の底部であり、186の外面にヘラケズリが施され、187は外面にヘラナデ、内面に指頭圧・縦方向のハケ、188は外面にヘラナデが施される。

189は短く外半する口縁部で、口縁端部が若干肥厚する。体部内面は横方向のハケが施される。190の口縁端部は角ばり、外面に指頭圧が残存する。191・192は内傾する口縁部の外面直下に鈐が付く。

193は体部の短い小皿であり、底部は回転ヘラナデが施される。194・195は体部がやや長い小皿で、194の底部はナデ、195は回転糸切りが施される。



第31図 SX 1202出土遺物実測図(2)(S:1/4)

196は口径10.7cmを測り、底部は板目の後にナデ、内面に指ナデが施される。197は口縁端部に煤が付着する。198・199の底部は回転糸切り、200は静止糸切りが施される。202はやや高い高台を持ち、底部は指頭圧・静止ヘラケズリ・ヘラナデが施される。

201の口縁部は体部から屈曲し直立する。板作り成形であり、外面はヘラナデ、内面は部分的なヘラナデが施される。

204はイイダコ壺の上部破片である。205は直径3cmの管状土鍾である。

206～208は瓦当に巴文のある軒丸瓦であり、瓦当表面にヘラナデが施される。206は巴頭部が丸みを持ち、僅かにくびれを有し、尾はやや短く、珠文の間隔は狭い。207は206の巴文とはほぼ同様であるが、尾がやや長い。208は巴が太く、尾は長い。珠文の間隔は広い。

209は凹面に梵字の刻印があるが、一部分のみの残存であるため意味は不明である。

S X 1203 (第32図)

調査区南東隅において検出した落ち込みであり、S P 1202・1203、S K 1209と重複する。本遺構の南側は第1遺構面S D 1001に切られ、東端と中央部は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は1.09～1.16 mである。本遺構はS D 1001に大部分を切られ、北端部のみの検出であり平面形は不明である。検出できた東西方向の長さは5.75 m、南北方向の長さは0.60 mを測る。最深部は検出した平面形の東端に位置し、検出面からの深さは0.28 mを測る。埋土は黄灰色シルト質細砂+灰白色細砂である。遺物は古い要素を示すが、埋土や重複関係から所属時期は17世紀前半と考えられる。

出土遺物は、白磁碗(210)、土師質土器杯(211)、同羽釜(212)、骨(213)である。

210は体部の破片であり、下半は露胎である。

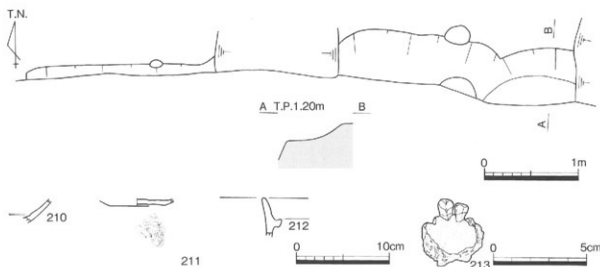
211はやや上げ底の底部であり、静止ヘラ切りの後に周辺部に回転ヘラケズリが施される。

212は内傾する口縁部の外面に短い鰐が付く。外面の調整はヨコナデ、内面は板ナデが施される。

213は顎骨であり、奥歯2本が残存する。

S X 1204 (第33図)

調査区南西側において検出した落ち込みであり、S B 1201、S D 1204、S P 1293に切られる。本遺構の北側は近代の大きな攪乱とコンクリート基礎により消滅する。検出した標高は1.15 mである。直線的に延びる南壁のみの検出であるため平面形の全容は不明であるが、大規模な遺構であると推測される。

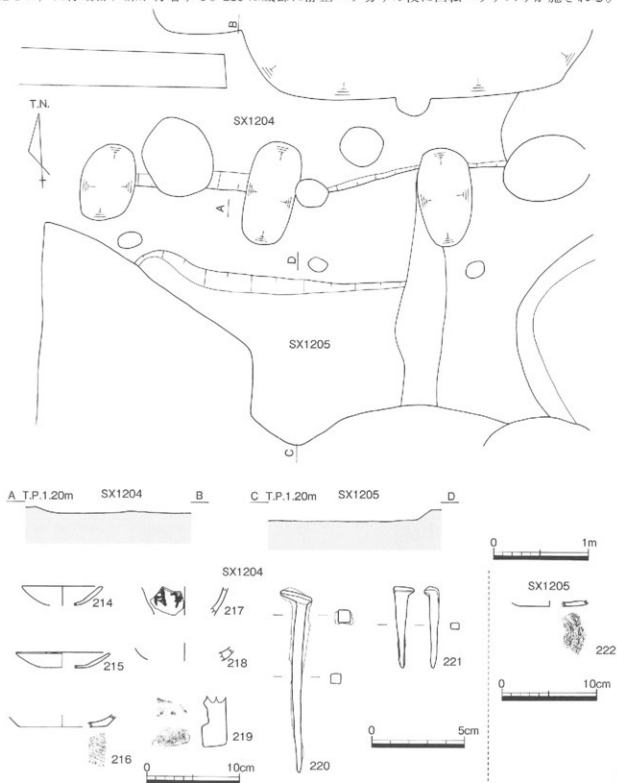


第32図 S X 1203 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4・1/2)

検出できた南辺の長さは3.45 m, 検出面からの深さは6 cmを測る。底面は平坦である。埋土は黄灰色シルト質細砂である。検出状況や重複関係から所属時期は17世紀前半であると考えられる。

出土遺物は、土師質土器皿(214・215)、同杯(216・217)、青磁碗(218)、軒丸瓦(219)、鉄釘(220・221)である。

214・215の体部は緩やかな傾斜で立ち上がり、体部と底部の境は不明瞭である。215は底部にナデが施され、口縁端部に煤が付着する。216は底部に静止ヘラ切りの後に回転ヘラケズリが施される。217



第33図 SX 1204・1205 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4・1/2)

は器高の高い形態であり、外面に「月 幸(?)」の墨書がある。

218 は体部下半の破片である。

219 は瓦当に巴文のある軒丸瓦の破片である。

220・221 は断面方形の釘であり、完形品である。220 は全長 9.7cm, 221 は 4.3cm を測る。

S X 1205 (第 33 図)

調査区南西隅において検出した落ち込みであり、S D 1204, S E 1201, 第 1 遺構面 S X 1003 に切られる。検出した標高は 1.12 m である。本遺構の南側は S E 1201 と S X 1003 に大きく切られており、検出できたのは北辺付近の一部のみであり、平面形の全容は不明である。検出した北辺の長さは 2.90 m, 南北方向の長さは 1.75 m を測る。検出面からの深さは 0.10 m であり、底面は若干凹凸がある。埋土は黄灰色シルト質細砂である。埋土や重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は、土師質土器杯 (222) のみであるが、数点の陶磁器片も出土した。222 は底部に回転ヘラ切りの後に静止ヘラケズリ・ナデ、内面に指ナデが施される。

S X 1206 (第 34 図)

調査区南西隅において検出した落ち込みであり、北側は S E 1201, 西側は第 1 遺構面 S X 1003 に切られる。南側は調査区外にかかる。検出した標高は 1.10 m 前後である。検出した範囲は非常に狭く、遺構全体の平面形は不明であるが、残存する東辺は湾曲していることより本遺構は円形を呈すると考えられる。検出した東西方向の長さは 1.92 m, 南北方向は 0.90 m を測る。検出面からの深さは 0.13 m を測り、底面は東方向に緩やかに下がる。埋土は褐黄灰色シルト質細砂 + 灰白色細砂の単一層である。検出状況や重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は、土師器杯 (223), 土師質土器羽釜 (224), 白磁碗 (225) であり、その他に数点の陶磁器片が出土した。

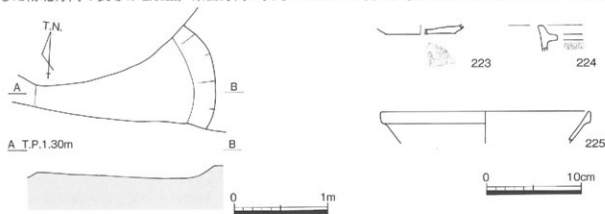
223 は底径 7.6cm を測る大型の杯であり、底部は静止ヘラケズリが施される。

224 は若干内傾する口縁部の外面に鈐が付く。鈐は断面方形であり、ほぼ水平である。外面は縦方向の粗いハケが施される。

225 は口径 22.0cm を測る大型であり、口縁部は玉縁状である。

SX1207 (第 35 図)

調査区北西隅において検出した落ち込みであり、S P 1241 ~ 1244・1299 に切れ、S P 1291・1292 を切る。本遺構の東側は調査区外にかかる。検出した標高は 1.01 m 前後である。検出できたのは遺構の西側のみであるが、下端の平面形から推測すると本遺構の平面形は不整な長方形であると考えられる。検出した南北方向の長さは 2.40m, 東西方向の長さは 1.85 m を測る。検出面からの深さは 6 ~ 17cm を



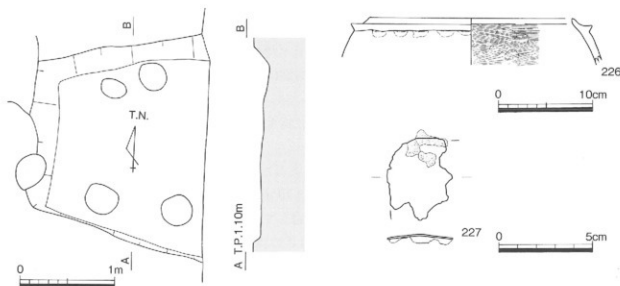
第 34 図 S X 1206 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

測り、底面は北方向に緩やかに下がる。北辺と西辺の掘り込みは緩やかな傾斜である。埋土は褐灰色シルト質細砂+灰白色細砂である。検出状況から所属時期は17世紀前半と考えられる。

出土遺物は、土師質土器足釜(226)、鉄板(227)であり、その他に数点の陶磁器片が出土した。

226は内傾する口縁部の外面に鋳が付く。鋳は断面三角形を呈する。外面には指頭圧・ナデが施され、内面は横方向の細かいハケが施される。

227は薄い鉄板であり、若干湾曲する。



第35図 SX 1207 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

SX 1208 (第36図)

調査区北西隅において検出した落ち込みであり、SD 1204、SK 1215を切り、SP 1264～1266に切られる。本遺構の北側は調査区外にかかる。検出した標高は1.04 m前後である。本遺構は南辺付近のみの検出であり、全体の平面形は不明であるが直線的な南辺となだらかに曲がる南東・南西隅を参考にすると、平面形は大規模な隅丸方形と考えられる。検出した東西方向の長さは3.65 m、南北方向の長さは0.51 mを測る。検出面からの深さは0.12 mを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂+灰白色細砂である。検出状況や重複関係から所属時期は17世紀前半と考えられる。

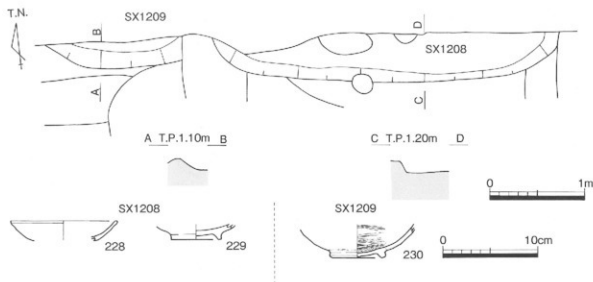
出土遺物は、土師質土器皿(228)、瓦器椀(229)であり、その他に数点の陶磁器片が出土した。

228は口径11cmで、若干内湾気味の体部である。229はやや高い高台を持ち、内面にヘラミガキが施され、回転ナデの高台以外の外面にナデが施される。

SX 1209 (第36図)

調査区北西隅において検出した落ち込みであり、SD 1202に切れ、SK 1211と重複する。本遺構の北側は調査区外にかかる。検出した標高は0.95 mである。本遺構は南辺のみの検出であり、全体の平面形は不明であるが、なだらかに湾曲する南辺を参考にすると、平面形は大規模な円形と考えられる。検出した南辺の長さは1.50 m、南北方向の長さは0.27 mを測る。検出面からの深さは0.12 mを測り、底面は平坦である。掘り込みはなだらかな傾斜である。埋土は灰白色シルト質細砂+灰白色細砂である。検出状況や重複関係から所属時期は17世紀前半と考えられる。

図化できた出土遺物は、土師質土器椀(230)のみであるが、数点の土師質土器と陶磁器の破片も出土した。230は、底部に回転ヘラ切り、内面に丁寧なヘラミガキが施される。



第36図 SX1208・1209 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40・1/4)

7 第2遺構面出土遺物 (第37～39図)

231は軟質施釉陶器壺であり、外面に細い沈線が巡り、口縁部内面の長い返りは垂直である。

232は肥前系陶器碗であり、口縁部は内湾する体部から屈曲して外反する。体部下半は露胎で、ロクロ成形痕が明瞭に残る。底部は回転ヘラケズリが施される。233～235は肥前系陶器皿であり、体部で折れ、口縁部が内方向に先細る。体部下半は露胎である。235は見込みに胎土目が認められ、体部下半に回転ヘラケズリが施される。236～238は肥前系陶器皿の底部であり、見込みに砂目が認められ、外面は露胎である。236の高台は高く、断面は方形であり、237・238は低い高台である。239は肥前系磁器皿であり、体部が僅かに内湾する。全面に施釉され、高台は切高台状となっている。見込みに胎土目が認められる。

240～242は備前焼播鉢であり、口縁端部は上下に若干拡張し直立する。口縁端部の断面は丸みを持つものと平らなものがある。内面には卸目がある。体部外面の調整は回転ナデが施される。

243～258は土師質土器皿である。243～248は体部の短い形態の小皿であり口径6.8～8.4cmを測る。249～257は前者より体部の長い小皿であり口径8.2～11.0cmを測る。243・246の底部は回転ヘラ切り、244は回転ヘラ切りの後に回転ヘラナデ、247は回転ヘラ切りの後に板目、248は回転ヘラ切りの後に板目・ナデが施される。249は体部と底部の境が明瞭で、底部の調整は回転ヘラ切りが施される。250～253は体部と底部の境が不明瞭で、250の底部は回転ヘラ切りの後に板目・ナデ、251は口縁端部を面取りし、底部はナデが施される。252は厚い器壁であり、底部は静止糸切りが施される。253は先細る口縁端部に煤が付着し、底部は板目が施される。254～256は緩やかな傾斜の体部である。257はやや丸みのある底部から体部が立ち上がり、底部は回転ヘラ切りの後に板目・回転ヘラナデが施される。258は底部に回転糸切りが施される。

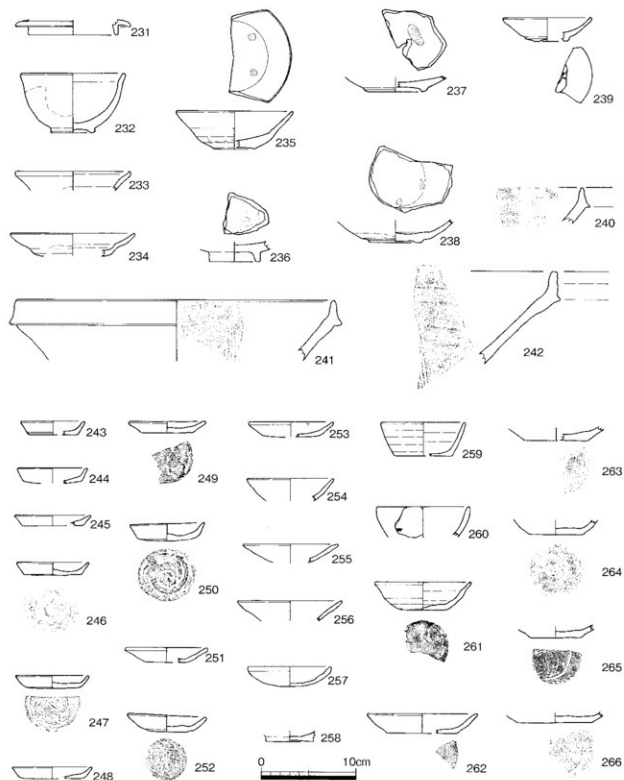
259～266は土師質土器杯である。259は底部から急傾斜で立ち上がる体部であり、内外面にロクロ成形痕が明瞭に残る。底部は回転ヘラ切りの後に回転ヘラナデが施される。260は内湾する体部で、外面に墨書が認められる。261はやや内湾する体部が僅かに折れて口縁部となる。底部は回転糸切りが施される。262は底部に回転ヘラ切りが施され、263は静止糸切り、264・265は回転糸切り、266は回転ヘラ切りが施される。

267 は土師質土器碗であり、断面台形の高台が付く。

268 は瓦器碗であり、ヨコナデが施された高い高台が付き、内面にナデが施される。

269 は土師質土器甕であり、直線的な体部からそのまま口縁部に至る。

270 は土師質土器の火消壺の蓋であり、口縁部はほぼ垂直である。外面はヘラミガキにより光沢を持ち、内面は回転ナデ・ハケが施される。



第37図 第2遺構面出土遺物実測図(1)(S:1/4)

271は土師質土器足釜であり、内傾する口縁部の外面に低い鐏が付く。鐏からの立ち上がりがやや長い。外面は指頭圧、内面は横方向のハケが施される。

272・273は黒色土器A類椀であり、低い高台を有する。内面にヘラミガキが施され、273は暗文が見られる。

274は須恵器碗であり、非常に低い高台を有する。

275・276は青磁碗である。275は外面に鏡連弁文を配し、276は雷文を配する。

277～279は青磁鉢であり、体部で僅かに折れ、口縁部は直立する。277は厚い器壁である。

280は弥生土器甕であり、口縁端部が上下に拡張する。内外面とも磨滅がおよんでいる。281は弥生土器高杯の脚部であり、外面はナデ、内面はヘラナデが施される。

282は丸瓦であり、凸面には縄叩きの後に縦方向のヘラナデが施され、凹面には布目が残存する。内面は両側面を面取りする。

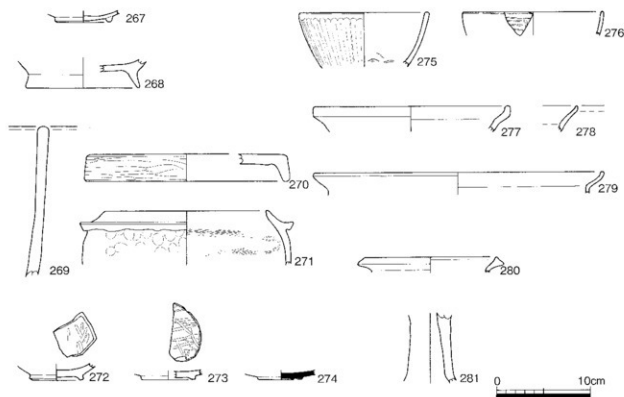
283は軒平瓦であり、瓦当に中心飾りとして巴文と珠文が見られる。瓦当裏面は横方向のナデが施される。

284は土製円盤であり、円形に割った後に断面を磨く。

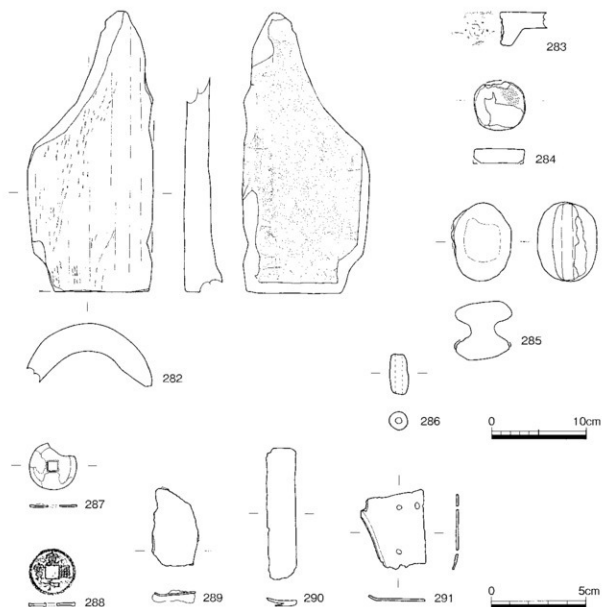
285は側面に溝を有する有溝土錘であり、ほぼ完形品である。重量は270.9gを測る。286は直径2cmを測る管状土錘であり、重量は16.9gである。

287・288は銅銭である。287は錆びのため銭名不明であるが、288は「宣和通宝」である。

289～291は用途不明の鉄板である。289は現存幅24cmを測り、片側がやや折れる。290は現存長7.0cm、現存幅1.3cmを測る細長い鉄板である。291は現存形が台形を呈し、3個の小孔が開けられている。



第38図 第2遺構面出土遺物実測図(2)(S:1/4)



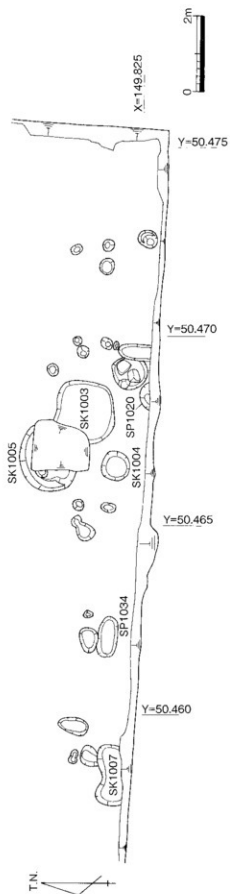
第 39 図 第 2 遺構面出土遺物実測図 (3) (S : 1/4・1/2)

第 2 小節 I 区 第 1 遺構面

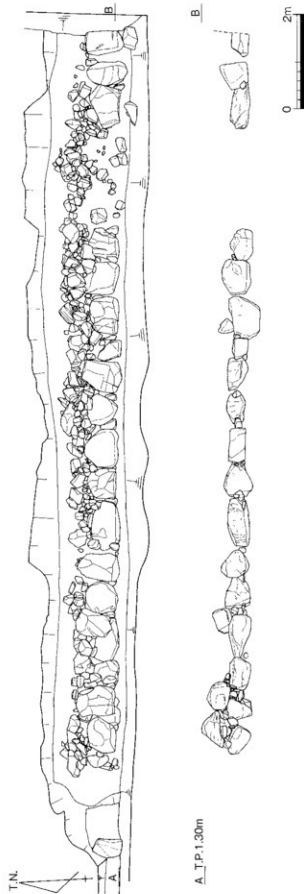
1 溝

S D 1001 (第 42 図)

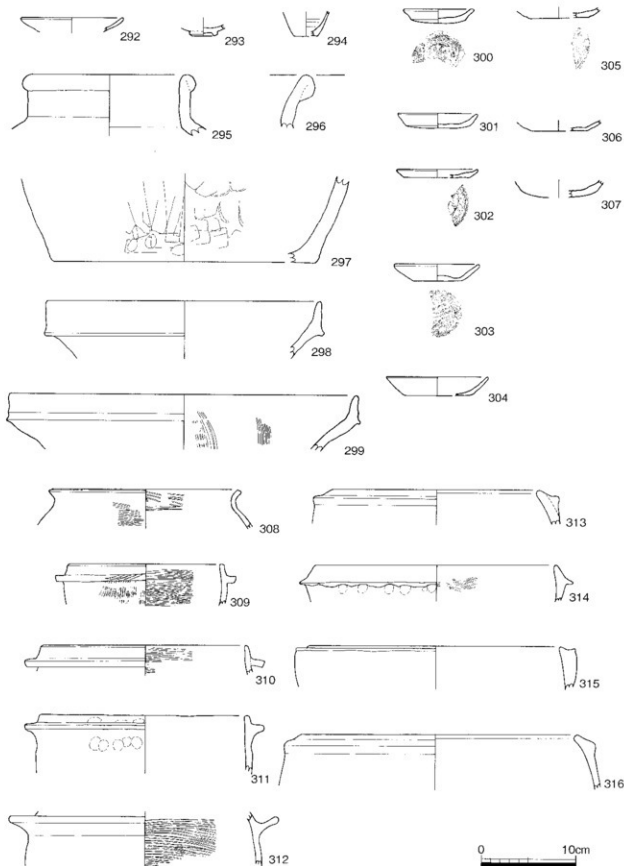
調査区南東隅から南壁中央にかけて検出した石組み溝であり、SK 1001 を切り、SK 1003 ~ 1007、SP 1001 ~ 1004・1014 ~ 1023・1030 ~ 1038 に切られる。調査時には石組みが建物の基礎である可能性も考えたが、本報告書では石組み溝とする。本遺構の東端上面は、近代の擾乱により消滅し、南側は調査区外にかかる。検出した標高は 1.25 m 前後である。主軸方位は N - 92° - E であり、ほぼ東西方向を示す。検出した溝の全長は 17.50 m を測り、前述したように調査区外に延びるため完掘できなかったが、検出した南北方向の最大幅は 2.20 m である。検出面から底面までの深さは約 0.95 ~ 1.00 m を測り、北側の掘り込みは急傾斜である。西端の掘り込みは段をなし、その段上には 0.36 × 0.64 m の石が単独で検出された。溝の底面直上には 0.40 ~ 1.00 m 大の扁平な石材が一段積みないし二段積みの状態で検出された。石組みは南側に面を通しており、ほぼ直線的に延びる。一段目の石の上面レベルはほぼ揃ってお



第41図 I区第1遺構平面図(2) (S: 1/100)



第42図 SD 1001 平・立面図 (S: 1/80)



第43图 SD 1001 出土遺物実測図(1) (S:1/4)

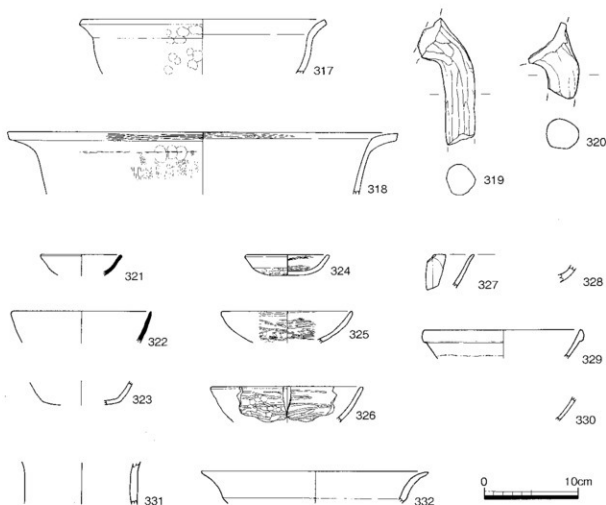
り標高 0.80 m 前後である。石組みの下面是標高 0.30 m である。石組みの基盤は砂礫層である。石組みの内側は多量の小石・拳大の石が裏込めとして用いられる。出土遺物の中にはもっと古い特徴を持つ遺物も含まれるが、検出状況から所属時期は 17 世紀中頃であると比定される。

出土遺物は、磁器皿 (292)、同碗 (293)、陶器鉢 (294)、同甕 (295～297)、同備鉢 (298・299)、土師質土器皿 (300～307)、同甕 (308)、同羽釜 (309～312)、同足釜 (313～316・319・320)、同鍋 (317・318)、須恵器杯 (321・322)、須恵質土器杯 (323)、瓦器皿 (324)、同碗 (325)、黒色土器碗 (326)、青磁碗 (327・328)、白磁碗 (329・330)、弥生土器壺 (331)、同高杯 (332)、土鍾 (323～336)、イダコ壺 (337)、瓦製円盤 (338)、丸瓦 (339・340)、軒平瓦 (341)、骨 (342・343)、砥石 (344) である。

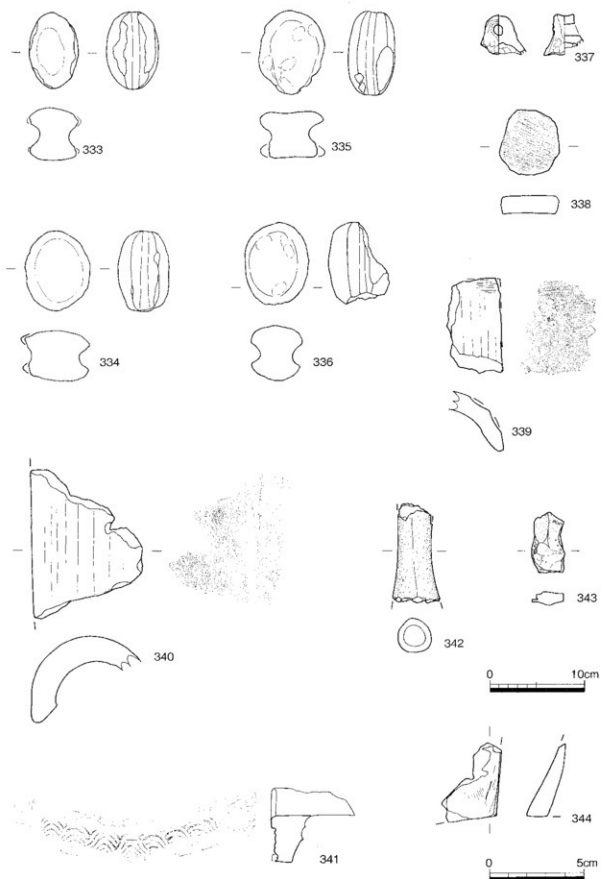
292 は生産地不詳で器高が低く若干内湾気味の体部である。293 は断面台形の高台を持ち、外面は露胎である。294 は備前系陶器であり、底部は回転糸切りが施される。

295～299 は備前焼である。295 の口縁部は直立し、口縁端部は外側に折り返す。296 の口縁部は若干外に広がり、口縁端部は外側に折り返す。297 は外面にヘラナデ、内面に板ナデ・ナデが施される。298・299 は口縁端部が上下に拡張し、外面に僅かな凹凸を有する。

300～302 は体部の短い形態で、300 の底部は回転ヘラケズリ、301・302 は回転ヘラ切りの後にナデが施される。303・304 は体部の長い形態で、303 の底部は板目・ナデ、304 はナデが施される。305 の底部は板目・ヘラナデ、306 はナデ、307 は静止ヘラケズリの後にナデが施される。



第 44 図 SD 1001 出土遺物実測図 (2) (S: 1/4)



第 45 図 S D 1001 出土遺物実測図 (3) (S : 1/4・1/2)

308は短く外反する口縁部であり、内外面に横方向の粗いハケが施される。

309～312は直立する口縁部外面に鈎が付く。309～311の鈎はほぼ水平に延び、312はやや上方に延びる。311を除いて内面は横方向のハケが施される。

313・314・316は口縁部外面に低い鈎が付く、315は口縁端部の直下に非常に低い鈎が付く。313は外面にナデ、内面に板ナデ、314は外面に指頭瓦・ナデ、内面にハケ、315・316は外面にナデ、内面にヘラナデが施される。

317・318は口縁部の大きく外反する器形であり、317の外面は指頭瓦・ヘラナデ、318の体部・口縁部外面と口縁部内面は粗いハケが施される。

321は口径8.8cmを測る小型の杯であり、322は口径14.8cmを測る杯である。323は底部と体部の境がやや不明瞭で、底部にナデが施される。

324は底部から緩やかに立ち上がる体部で、口縁部との境に僅かな稜を有する。外面は指頭瓦、内面はヘラミガキが施される。325は低い器高で体部からそのまま口縁部に至る。外面は指頭瓦・ヘラミガキ、内面はヘラミガキが施される。

326は黒色土器B類であり、外面に指頭瓦・ヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。

327は外面に竊蓮弁文を配し、328は体部下位の破片である。329は玉縁の口縁部であり、体部下半は露胎となる。330は体部下半の破片である。

323～336は側面に溝を有する有溝土鍾であり、335は中央部が若干窪む。

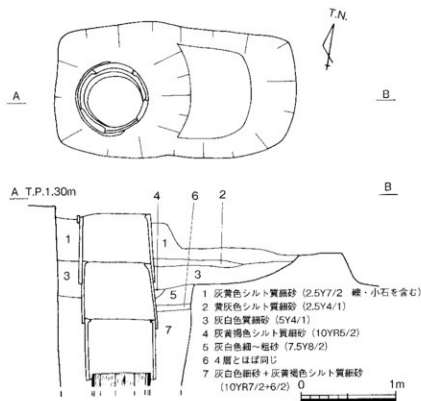
339は凸面にヘラナデが施され、凹面に布目が残存する。340は凸面にヘラナデが施され、凹面に布目・コピキA痕が残存する。341は瓦当に「重波文の波状文」があり、瓦当上縁と頸後縁に面取りが施される。

342は脚部の骨、343は肩甲骨である。344は石灰岩製の梶であり、1面のみに使用痕が見られる。

2 井戸

SE 1001 (第46～48図)

調査区中央の東寄りにおいて検出した井戸であり、SE 1002を切り、東半分の上端は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は1.20 mである。上端の平面形は東西方向に長辺を持つ長方形を呈し、規模は2.58 × 1.45 mを測る。掘り方は東側に段を有し、土器組みの井戸枠は西壁寄りに位置し、その部分を正方形に深く掘り込む。その規模は1辺1.45 mを測る。土器枠は3段であり、さらに最上位に土器枠の一部が残存しており、少なくとも4段であったと考えられる。土器枠の直径は0.70 m、器高は0.70 mを測る。土器枠の下



第46図 SE 1001 平・断面図 (S: 1/40)

には細長い板を縦方向に並べる木枠が検出されるが、崩落の危険性があるため完掘できなかった。この木枠が井戸の最下部である。木枠の上部の標高は- 0.56 mである。井戸枠内には多量の石が投げ入れられていたため土層は不明であるが、掘り方部分は7層に分層できた。所属時期は土器枠を使用していることから幕末～明治時代である。

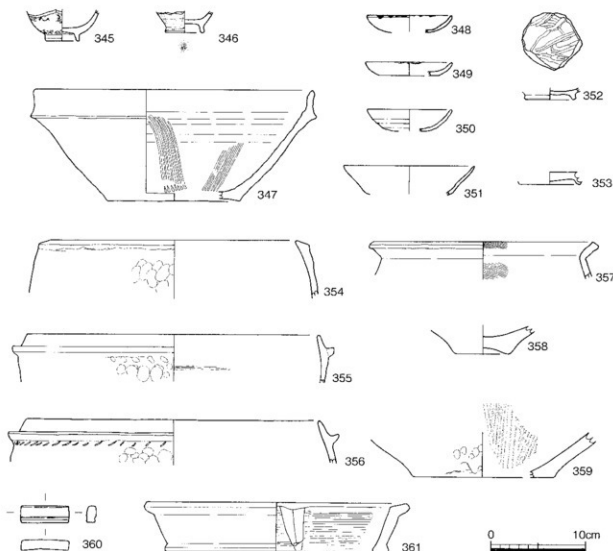
出土遺物は、磁器碗 (345・346)、陶器播鉢 (347)、土師質土器皿 (348・349)、同杯 (350・351)、瓦器碗 (352)、青磁碗 (353)、土師質土器足釜 (354～356)、同甕 (357・358)、同播鉢 (359)、須恵質土器鉢 (360)、五徳 (361)、軒丸瓦 (362～364)、軒平瓦 (365～369)、砥石 (370) である。

345 は文字と草文の染付けが描かれる。346 は生産地不詳の磁器であり、黒色・水色・朱色の線が描かれ、底部に小判型の刻印がある。刻印は「松景」の可能性はある。

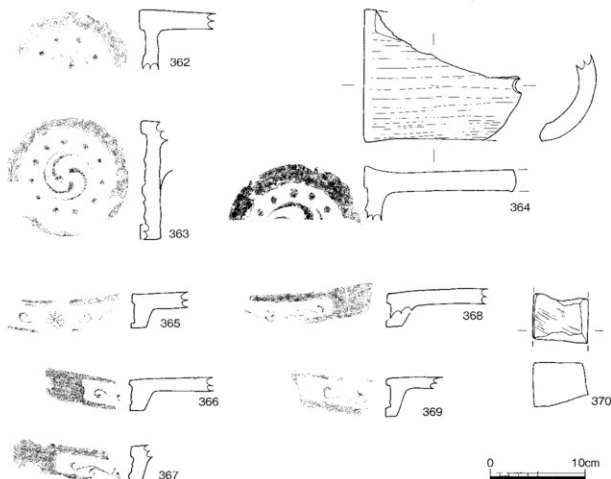
347 は備前焼であり、口縁部は上下に拡張するが薄い器壁である。体部外面は指ナデが施され、内面には7本一単位の卸目がある。

348・349 は口縁部に煤が付着し、調整はナデが施される。350 は口径9.2cmの小型であり、底部と体部の境は不明瞭である。底部は回転糸切りが施される。351 は口径14.0cmを測り、体部は緩やかな傾斜で立ち上がる。調整は内外面ともナデが施される。

354 は口縁端部直下に低い鈐が付き、355・356 は口縁部の外面に鈐が付く。



第47図 SE 1001 出土遺物実測図 (1) (S: 1/4)



第48図 SE 1001 出土遺物実測図(2)(S:1/4)

357は「く」の字口縁で、内面に斜め方向のハゲが施される。358は上げ底である。

359は内面に7本一単位の間隔がある。

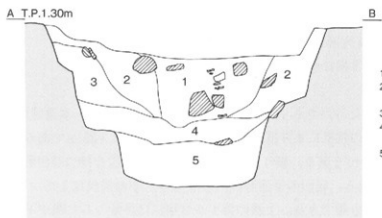
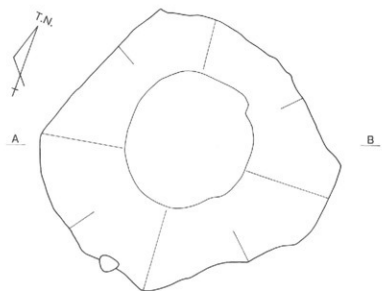
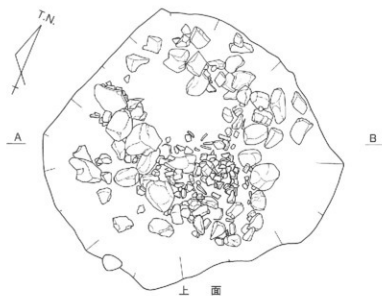
360は口縁部の破片を磨いて長方形にする。361は内面に器受用の突帯がある。

362～364は巴文の軒丸瓦である。362・364は巴の尾が短く巻き込み、珠文の間隔はやや広い。凸面はヘラナデが施される。363は珠文数11個を数え、巴頭部は丸みを持ち、僅かにくびれを有し、尾はやや短く巻き込む。365～369は瓦当に唐草文の軒平瓦である。365は中心飾りを菊花文とし、一重線の唐草文である。366・367は一重線の唐草文である。368は中心飾りを巴文とし、一重線の唐草文である。369は一重線の唐草文であり、瓦当面上端に面取りがある。

370は砂岩製の砥石であり、3面に使用痕が認められる。

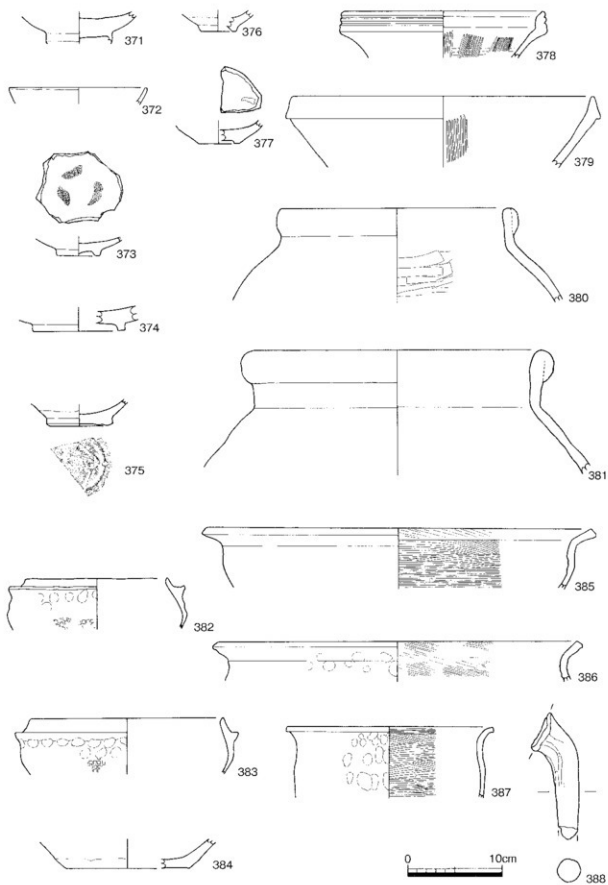
SE 1002 (第49～51図)

調査区南東側において検出した井戸であり、SE 1001の南東に位置する。本遺構はSE 1001に切られ、北側と南東側の上端は近代の掘削により消滅する。検出した標高は1.25 mである。平面形は不整な円形を呈し、直径は3.05 × 2.95 mを測る。掘り方は一つないし二つの段を持つ逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは1.65 mを測る。底面の平面形は円形であり、その規模は1.45 × 1.30 mを測り、底面は平坦である。埋土は5層に分層できる。上層の第1～3層には多量の石と礫が不規則な状態で出土し、同時に瓦も含まれ、人為的に埋められたと考えられる。下層の第4・5層は自然堆積である。出土遺物や重複関係から所属時期は17世紀中頃であると考えられる。



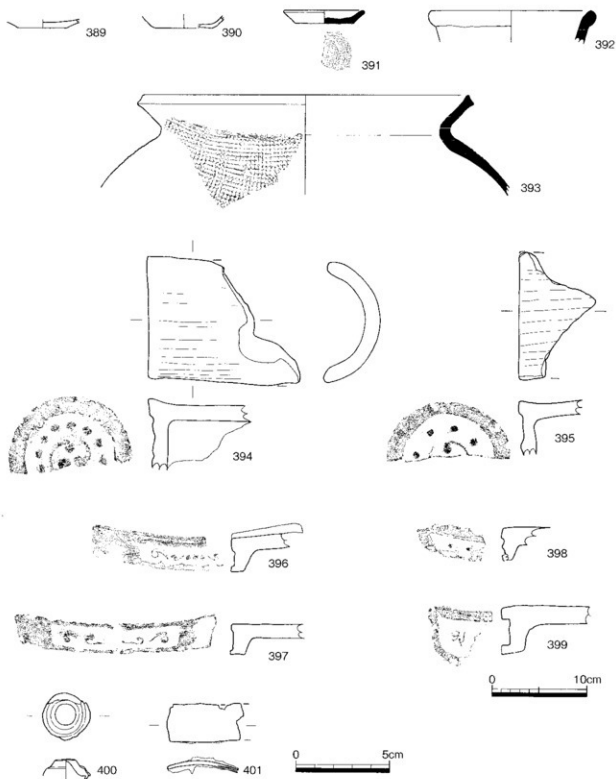
- 1 暗灰黄色シルト質細砂 (2.5Y5/2)
- 2 黄灰色 + 灰白色シルト質細砂
(2.5Y6/1+5Y7/2)
- 3 灰白色シルト質細砂 (5Y7/1)
- 4 灰黄色 + 灰白色シルト質細砂
(2.5Y6/2+8/2)
- 5 黄灰色シルト質細砂 (2.5Y4/1)

第 49 図 SE 1002 平・断面図 (S : 1/40)



第 50 図 SE 1002 出土遺物実測図 (1) (S : 1/4)

出土遺物は、磁器皿 (371)、陶器碗 (372)、同皿 (373・374)、同鉢 (375～377)、同搗鉢 (378・379)、同甕 (380・381)、土師質土器足釜 (382・383・388)、瓦質土器甕 (384)、土師質土器鍋 (385)、同甕 (386・387)、同足釜 (388)、土師器杯 (389・390)、須恵器皿 (391)、同甕 (392・393)、軒丸瓦 (394・395)、軒平瓦 (396～399)、青銅製飾り (400)、鉄板 (401) である。



第 51 図 SE 1002 出土遺物実測図 (2) (S : 1/4・1/2)

371は肥前系磁器であり、底部は肥厚する。見込みには蛇ノ目釉剥ぎと融着痕が認められる。372は肥前系陶器である。373は肥前系陶器で、見込みと畳付に3ヶ所の砂目が認められる。374は肥前系陶器で、底部は肥厚する。375は低い高台で底部に回転ヘラ切りが施される。376は肥前系陶器で、高台の断面は逆台形である。377は肥前系陶器で、見込みに融着痕が認められる。

378・379は備前焼である。378の口縁部は肥厚し、外面に2本の沈線が巡る。内面には10本一単位の卸目がある。379は口縁部が上下に若干拡張する。

380・381は備前焼で、口縁部は直立する。

382・383は内傾する口縁部に鈎が付き、体部外面下半に格子目叩き、内面に指ナデが施され、鈎以下に煤が付着する。385は口縁部が大きく外反し、体部内面に粗いハケが施され、体部下半に煤が付着する。386・387は口縁部が緩やかに外反し、外面に指頭圧、内面にハケが施される。

389は底面に静止ヘラケズリが施され、390は板目の後に回転ナデが施される。391は体部の短い小皿であり、底部は回転ヘラ切りの後に板目が施される。

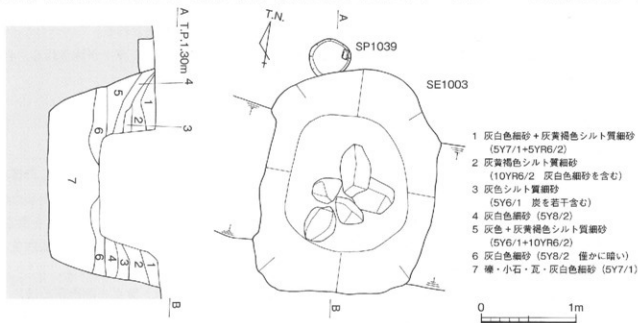
392の口縁端部は折り返し口縁である。393は体部から口縁部が鋭角に屈曲し、口縁端部が若干拡張する。体部外面は格子目叩きが施される。

394・395は巴文の軒丸瓦である。394の巴頭部は丸みを持ち、僅かにくびれを有し、尾はやや短く巻き込む。395の巴頭部は丸みを持ち、尾は非常に短く巻き込む。珠文の間隔は広い。

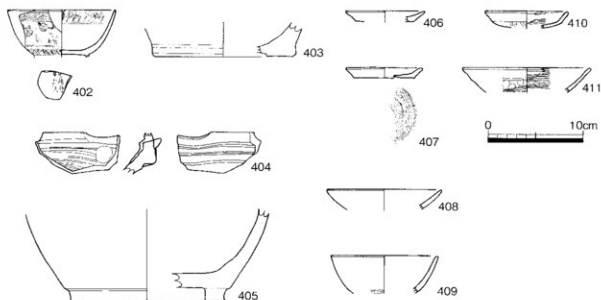
396は下向きの三葉文を中心飾りとし、文様区縦幅が狭い。397は中心飾りが磨滅して不明であり、唐草は2転する。398は珠文が認められ、文様区縦幅が狭い。399は瓦当に梵字のある軒平瓦で、梵字は胎藏界五仏の宝幢如来を意味する。

SE 1003 (第52・53図)

調査区南側中央において検出した井戸であり、SD 1001西端の北西に位置する。本遺構はSP 1039と重複し、中央部の上端は試掘トレンチにより消滅する。検出した標高は1.25 mである。平面形は不整な楕円形を呈し、南北方向の長軸は2.40 m、東西方向の短軸は1.85 mを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは1.25 mを測る。底面は不整な円形を呈し、その規模は1.45 × 1.25 mを測り、底面は平坦である。埋土は7層に分層できた。上層の第1～6層はレンズ状堆積をなし、下



第52図 SE 1003・SP 1039 平・断面図 (S: 1/40)



第53図 SE 1003 出土遺物実測図 (S : 1/4)

層の第7層は礫・小石を含む灰白色細砂で、厚く堆積する。底面直上には長さ0.35～0.60 mを測る5個の石が不規則な状態で検出される。これらの石は井戸枠としての石組みに倣うものと考えられる。出土遺物や重複関係から所属時期は17世紀中頃であると考えられる。

出土遺物は、磁器碗(402)、陶器甕(403・405)、同播鉢(404)、土師質土器皿(406～408)、同杯(409)、瓦器皿(410)、同碗(411)である。

402は瀬戸・美濃系磁器であり、口縁端部に口銘が認められ、外面に四方襷、梅花文、連続文、圏線、内面に連続文、圏線が描かれる。底部には「東陽軒□ハ製」の銘がある。403は生産地不明陶器で、平底である。404は備前焼であり、口縁部は上下に拡張し、内外面に沈線を巡らす。405は備前焼であり、断面長方形の高台は挟りが施される。底部は回転ヘラケズリが施される。

406・407は体部の短い小皿であり、406の底部はナデ、407は回転ヘラ切りの後にナデが施される。408は体部がやや長い小皿であり、外面にヘラナデが施される。

409は器高のある形態で、体部外面は回転ナデの後に指頭圧・ヘラミガキが施される。

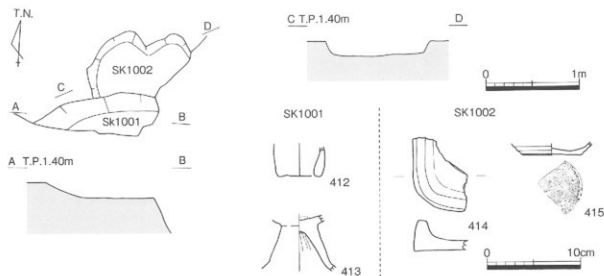
410は体部と底部の境に稜を持ち、体部外面は指頭圧・ヘラナデ、内面はヘラミガキが施される。411は外面に指頭圧・ヘラミガキ、内面に丁寧なヘラミガキが施される。

3 土坑

S K 1001 (第54図)

調査区南東隅において検出した土坑であり、S K 1002を切り、S D 1001に切られる。検出した標高は1.25 mである。本遺構の南側はS D 1001に切られ、東側は近代の攪乱により消滅する。検出した部分から平面形は円形を呈すると推定できる。検出した南北方向の幅は0.45 m、東西方向は1.35 mを測る。検出面からの深さは0.17 mである。掘り方は緩やかな傾斜であり、底面は平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。埋土や重複関係から所属時期は17世紀後半であると考えられる。

図化できた出土遺物は、イイダコ壺(412)、弥生土器高杯(413)であるが、数点の陶磁器の破片も出土した。412は口縁部の破片であり、内面はナデが施される。413は脚部下半が屈曲し外方に広がり、内外面ともに磨耗が著しい。



第54図 SK 1001・1002 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40・1/4)

S K 1002 (第 54 図)

調査区南東隅において検出した土坑であり、SK 1001に切られ、東側は近代の擾乱により消滅する。検出した標高は1.24 mである。平面形は不整形を呈し、北側が若干凹む。南北方向の幅は0.65 m、東西方向は1.12 mを測る。検出面からの深さは0.17 mである。掘り方の断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。堀土は灰白色シルト質細砂である。埋土や重複関係から所属時期は17世紀後半と考えられる。

図化できた出土遺物は、陶器皿（414）、土師器杯（415）であり、数点の陶磁器の破片も出土した。

414 は軟質施釉陶器であり、浅い隅丸方形の器形である。深い緑色の釉薬がかかる。

415 は底径 62cm で、底部は回転ヘラ切りの後にヘラナデが施される。

SK 1003 (第 55 図)

調査区南側中央寄りにおいて検出した土坑であり、SD 1001 の上面で検出した。本遺構の北東隅は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は1.16 mである。平面形は隅丸方形を呈し、規模は1.60 × 1.55 mを測る。検出面からの深さは0.14 mを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色シルト質細砂である。埋土や重複関係から所属時期は17世紀後半であると考えられる。

出土遺物は、土師器杯(416)、陶器杯(417)であり、その他に数点の陶磁器片が出土した。

416 は直線的な体部が緩やかに立ち上がる。底部は回転ヘラ切りが施される。

417は備前焼であり、外面にロクロ成形痕が残る。底部は静止糸切りが施され、体部外面上半と内面には薬釉がかかる。

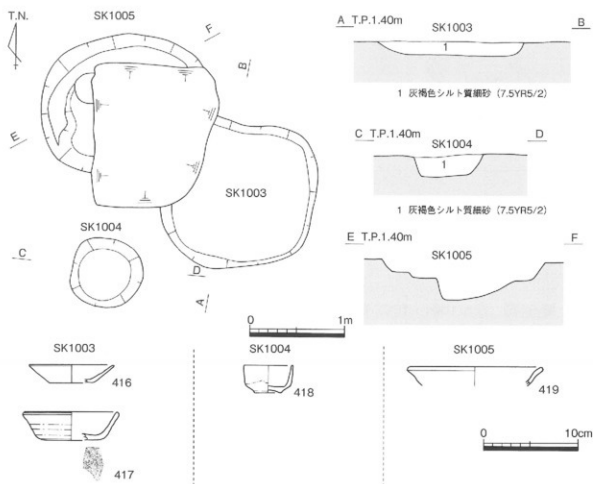
S K 1004 (第 55 図)

調査区南側中央東寄りにおいて検出した土坑であり、S D 1001の上面で検出した。検出した標高は1.16 mである。平面形は北西側の角張る不整な円形を呈し、直径は0.75 mを測る。検出面からの深さは0.24 mである。掘り方の断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色シルト質細砂の単一層である。埋土と重複関係から所属時期は17世紀後半であると考えられる。

出土遺物は、肥前系陶器段重(418)であり、その他に数点の陶磁器片が出土した。418は体部が屈曲し、ほぼ直立する。体部下半は露胎である。

S K 1005 (第 55 図)

調査区南側中央東寄りにおいて検出した土坑であり、SP 1024を切る。本遺構の南東側は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は116 mである。残存する平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。



第55図 SK1003～1005 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40・1/4)

規模は東西方向の長軸 1.85 m、南北方向の短軸 1.50 m を測る。底面は中央が 1 段低くなっており、検出面からの深さは 0.20 m である。掘り方は緩やかな傾斜である。埋土は灰褐色シルト質細砂の単一層である。埋土や重複関係から所属時期は 17 世紀後半であると考えられる。

図化できた遺物は、肥前系陶器碗 (419) のみであるが、その他に数点の陶磁器片が出土した。419 は体部が僅かに屈曲する。

SK 1007 (第56図)

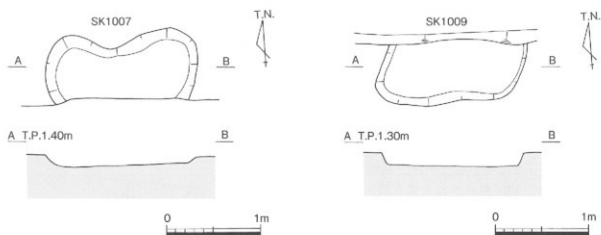
調査区南側中央西寄りにおいて検出した土坑であり、S D 1001 の上面で検出した。本遺構の南側は調査区外に広がる。検出した標高は 1.23 m である。平面形は北側中央が凹む楕円形を呈する。東西方向の長軸は 1.62 m、南北方向は 0.75 m を測る。検出面からの深さは 9 cm である。掘り方の断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。所属時期は他の土坑と時期差はほとんどないと考えられる。

出土遺物は、数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

SK 1009 (第56図)

調査区南側中央西寄りにおいて検出した土坑であり、SK 1019 を切る。本遺構の北側は試掘トレンチにより消滅する。検出した標高は 1.18 m である。平面形は不整な楕円形を呈すると推定される。東西方向の長軸は 1.52 m、南北方向は 0.68 m を測る。検出面からの深さは 0.15 m である。掘り方の断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は、数点の土師質土器と陶磁器の破片のみであり、所属時期は不明であるが、埋土や重複関係から他の土坑と時期差はほとんどないと考えられる。



第56図 SK 1007・1009 平・断面図 (S: 1/40)

SK 1013 (第57図)

調査区北西隅において検出した土坑であり、S P1079と重複する。本遺構の北側は近代の擾乱により消滅する。検出した標高は1.15 mである。平面形は長方形に近い楕円形を呈すると推定される。東西方向の短軸は0.93 m、検出できた南北方向の長軸は1.05 mを測る。検出面からの深さは0.18 mである。掘り方の断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色+淡黄色細砂と灰褐色シルト質細砂の2層に分層できる。出土遺物や重複関係から所属時期は17世紀後半と考えられる。

出土遺物は、磁器皿(420)、土師質土器皿(421)、同杯(422)である。

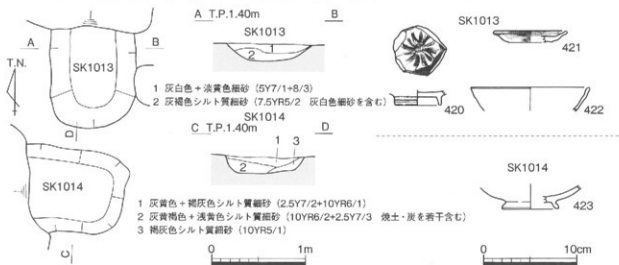
420は肥前系磁器であり、外面に圈線、見込みに退化した花卉文が認められる。

421は短い体部で内外面に煤が付着する。底部は回転ヘラ切りが施される。422は僅かに内湾する体部であり、内外面に回転ナデが施される。

SK 1014 (第57図)

調査区北西隅において検出した土坑であり、西側は近代の擾乱により消滅する。検出した標高は1.15 mである。平面形は長方形に近い楕円形を呈すると推定される。南北方向の短軸は0.89 m、検出できた東西方向の長軸は1.02 mを測る。検出面からの深さは0.20 mである。掘り方の断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は灰黄色+褐灰色シルト質細砂と灰黄褐色+浅黄色シルト質細砂と褐灰色シルト質細砂の3層に分層できる。所属時期は出土遺物や検出状況から17世紀後半と考えられる。

出土遺物は、土師質土器碗(423)、数点の陶磁器の破片である。



第57図 SK 1013・1014 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40・1/4)

S K 1015 (第58図)

調査区北西側において検出した土坑であり、単独で存在する。本遺構の東側は調査区外に広がる。検出した標高は1.15 mである。平面形は楕円形を呈し、南北方向の短軸は0.82 m、検出できた東西方向の長軸は1.00 mを測る。検出面からの深さは0.12 mである。掘り方の断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂を若干含む灰黄色シルト質細砂と暗灰黄色シルト質細砂の2層に分層できる。所属時期は出土遺物と埋土から17世紀後半と考えられる。

出土遺物は、数点の土師質土器と陶磁器の破片である。

S K 1016 (第59図)

調査区北西側において検出した土坑であり、S P 1068に切られる。検出した標高は1.14 m前後である。平面形は不整な円形を呈し、直径は0.82 × 1.05 mを測る。底面北側に段を持ち、検出面から最深部までの深さは0.24 mであり、段との比高差は0.15 mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト質細砂と灰黄褐色シルト質細砂＋灰白色細砂の2層に分層できる。出土遺物や重複関係から所属時期は17世紀後半と考えられる。

出土遺物は、須恵器杯(424)、土師質土器碗(425・426)、道具瓦(427)である。

424はやや上げ底であり、回転糸切りが施される。

425・426は高い高台を持ち、425の内面はヘラミガキ、426はナデが施される。

427は裏面に刻印が認められる。

S K 1017 (第59図)

調査区北西側において検出した土坑であり、南側は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は1.19 m前後である。平面形は3基の土坑が合体したような不規則な形を呈し、中央に最深部を持つ円形の落ち込みがある。北側と南側の落ち込みは非常に浅い。東西方向の短軸は0.64 m、検出できた南北方向の長軸は0.90 mを測る。検出面から最深部までの深さは0.30 mである。最深部の底面は平坦である。埋土は、灰黄色シルト質細砂と灰黄色シルト質細砂＋暗灰黄色シルト質細砂の上下2層に分層できる。埋土や重複関係から所属時期は17世紀後半であると考えられる。

図化できた出土遺物は、備前焼陶器杯(428)のみであるが、その他に数点の土師質土器と陶磁器の破片が出土した。

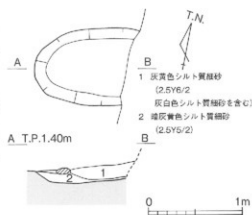
428は底部に回転糸切りが施され、内面は指ナデである。

S K 1018 (第59図)

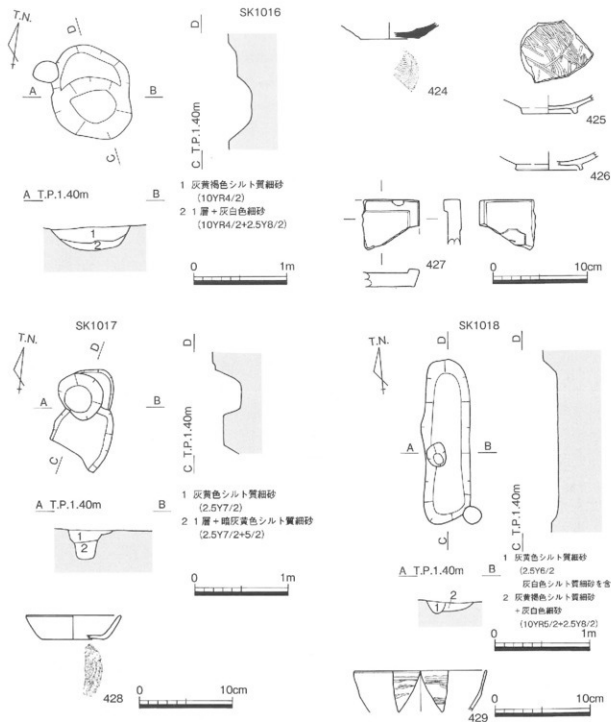
調査区北西側において検出した土坑であり、S K 1016とS K 1017の中間に位置する。本遺構はS P 1069・1100に切られる。検出した標高は1.09～1.17 mである。平面形は細長い楕円形を呈する。南北方向の長軸は1.71 m、東西方向の短軸は0.50 mを測る。検出面からの深さは0.20 mである。底面は平坦である。埋土は、灰黄褐色シルト質細砂＋灰白色細砂の単一層である。所属時期は埋土と重複関係から17世紀後半であると考えられる。

図化できた出土遺物は、土師質土器碗(429)のみであるが、その他に数点の土師質土器と陶磁器の破片が出土した。

429は内外面にまばらなヘラミガキが施される。



第58図 S K 1015 平・断面図
(S : 1/40)



第59図 SK1016～1018 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40・1/4)

SK1019 (第60図)

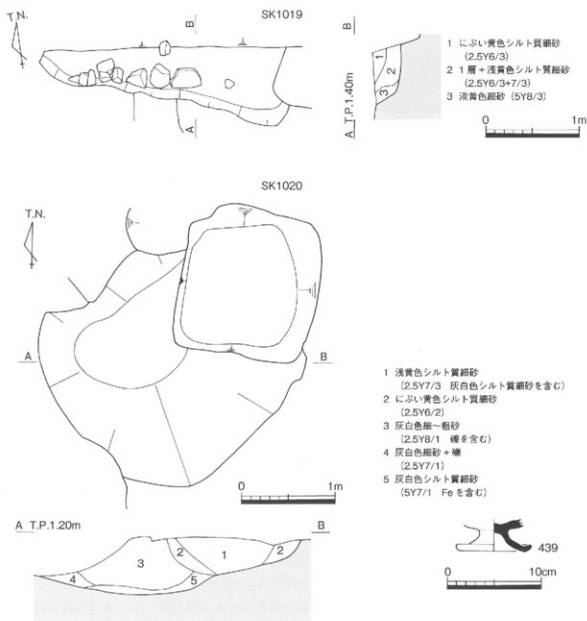
調査区南側中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり、SK1009に切られる。本遺構の北側は試掘トレンチにより消滅する。検出した標高は1.19mである。残存する平面形は方形を呈する。検出した東西方向の幅は2.70m、南北方向は0.83mを測る。検出面からの深さは0.33mである。底面は北東側に緩やかに下がる。0.15～0.30mの石が南壁に沿って並んだ状態で出土した。埋土は3層に分層できた。第1層はにぶい黄色シルト質細砂、第2層は第1層 + 浅黄色シルト質細砂、第3層は淡黄色細砂である。所属時期は埋土や重複関係から判断して17世紀後半であると考えられる。

出土遺物は、数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

SK 1020 (第60図)

調査区南西隅において検出した土坑であり、西側上端は第1遺構面のSK 1003に切られる。本遺構の北東部は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は1.20 m前後である。平面形は不整な円形を呈する。東西方向の直径は2.84 m、南北方向の直径は2.55 mを測る。検出面からの深さは0.60 mである。底面は北西側に片寄った位置にあり、底面のレベルは中央に向かって緩やかに下がる。北側の掘り方は急傾斜であるが、その他は非常に緩やかな傾斜である。埋土は5層に分層できる。第1層は灰白色細砂を含む浅黄色シルト質細砂、第2層はにぶい黄色シルト質細砂、第3層は礫を含む灰白色細～粗砂、第4層は灰白色細砂+礫、第5層は灰白色シルト質細砂である。堆積は大きく2回に分けられ、第3～5層が堆積した後に第1・2層が堆積する。所属時期は埋土や重複関係から17世紀後半であると考えられる。

図化できた出土遺物は、須恵器高杯(430)であるが、数点の上師質土器と陶磁器の破片が出土した。



第60図 SK 1019・1020 平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/40・1/4)

4 柱穴

S P 1011 (第61図)

調査区南東隅において検出した柱穴である。検出した標高は1.27 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.24 m、深さは0.23 mを測る。埋土は焼土を含む褐灰色+灰黄色細砂質シルトである。

出土遺物は、瓦製円盤(431)である。

S P 1020 (第61図)

調査区南東側において検出した柱穴であり、S D 1001の上面で検出した。南側は調査区外となる。検出した標高は1.24 mである。平面形は円形を呈し、検出できた直径は0.78 m、深さは0.18 mを測る。埋土は灰黄色細砂である。

出土遺物は、軒平瓦(432)であり、瓦当に2転する唐草が認められ、中心部分は欠損する。

S P 1027 (第61図)

調査区中央やや東寄りにおいて検出した柱穴である。検出した標高は1.23 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.25 m、深さは0.10 mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂+灰白色細砂である。

出土遺物は、土師質土器皿(433・434)、陶器皿(435)、土師質土器鍋(436)である。

433は緩やかな傾斜で立ち上がる体部である。434の底部は板目が施される。435は肥前系陶器であり、口縁部が溝縁状の皿である。436は口縁端部を面取りし、外面は指頭圧が施される。

S P 1028・1029 (第61図)

調査区中央やや東寄りにおいて検出した柱穴である。検出した標高は1.20 mである。平面形は楕円形を呈する。S P 1028は直径0.24 × 0.47 m、深さ0.10 mを測り、S P 1029は直径0.24 × 0.47 m、深さ0.13 mを測る。拳大の石が数個出土した。S P 1028の埋土は浅黄色シルト質細砂+灰白色シルト質細砂、S P 1029は灰白色細砂である。

出土遺物は、陶器皿(437)であり、内外面とも施釉される。

S P 1034 (第61図)

調査区南側中央においてS D 1001の上面で検出した柱穴である。検出した標高は1.20 mである。平面形は楕円形を呈し、直径は0.50 × 1.10 m、深さは0.20 mを測る。埋土は灰黄色細砂である。

出土遺物は、須恵質土器甕(438)である。

S P 1039 (第52・61図)

調査区南側中央において検出した柱穴で、S E 1003と重複する。検出した標高は1.04 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.39 m、深さは0.17 mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は、小型の硯(439)である。

S P 1040 (第61図)

調査区南側中央において検出した柱穴である。検出した標高は1.04 mである。平面形は円形を呈する。直径は0.26 m、深さは8 cmを測る。埋土は灰黄色シルト質細砂である。

出土遺物は、土師質土器皿(440・441)である。440は口縁端部を面取りし、底部は回転糸切りが施される。441は口径11.8 cmを測り、底部に糸切りが施される。

S P 1043 (第61図)

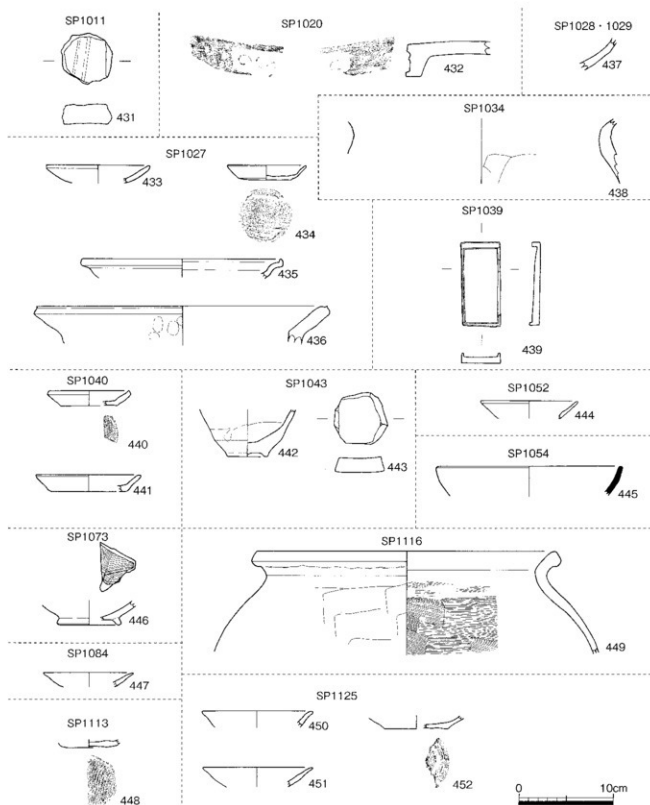
調査区南側中央やや西寄りにおいて検出した柱穴である。検出した標高は1.00 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.36 m、深さは0.15 mを測る。埋土は灰黄色シルト質細砂である。

出土遺物は、陶器碗(442)、瓦製土盤(443)である。442は肥前系陶器であり、外面下半は露胎である。内面に圈線が巡る。443は瓦を方形に近い円形に割っている。

S P 1052 (第61図)

調査区北西側において検出した柱穴である。検出した標高は1.18 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.35 m、深さは0.25 mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂+灰白色細砂である。

出土遺物は、土師質土器皿(444)である。



第61図 第1遺構面SP出土遺物実測図(S:1/4)

S P 1054 (第61図)

調査区北西側において検出した柱穴である。検出した標高は1.14 mである。平面形は不整な楕円形を呈し、直径は0.22 × 0.38 m、深さは0.12 mを測る。埋土は浅黄色シルト質細砂である。

出土遺物は、須恵器杯(445)、数点の土師質土器の破片である。

S P 1073 (第61図)

調査区北西側において検出した柱穴であり、西側は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は1.17 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.30 m、深さは0.13 mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は、内面にハケが施される須恵質土器碗(446)、数点の土師質土器の破片である。

S P 1084 (第61図)

調査区北西側において検出した柱穴であり、S U 1001 を切る。検出した標高は1.18 mである。平面形は楕円形を呈し、直径は0.46 × 0.56 m、深さは0.39 mを測る。埋土は灰黄色 + 灰黄褐色シルト質細砂である。出土遺物は、土師質土器皿(447)で、口縁部が薄くなっている。

S P 1113 (第61図)

調査区南側中央やや西寄りにおいて検出した柱穴であり、S P 1114 と重複する。検出した標高は1.00 mである。平面形は楕円形を呈し、直径は0.41 × 0.63 m、深さは6 cmを測る。底面直上に長さ0.32 mの石が出土した。埋土は灰黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は、底面に静止糸切りが施される土師質土器杯(448)である。

S P 1116 (第61図)

調査区南側中央やや西寄りにおいて検出した柱穴である。検出した標高は1.04 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.40 m、深さは0.12 mを測る。埋土は灰黄褐色 + 灰黄色シルト質細砂である。

出土遺物は、土師質土器甕(449)であり、口縁部が短く外反する。体部外面は板ナデ、内面は細かいハケが施される。

S P 1125 (第61図)

調査区南西隅において検出した柱穴であり、北側は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は1.20 mである。平面形は円形を呈し、直径は0.40 m、深さは8 cmを測る。埋土は褐色シルト質細砂の単一層である。

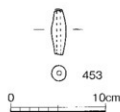
出土遺物は、土師質土器杯(450・451)、土師器杯(452)である。450・451は口縁端部が若干外反する。452は底部に回転ヘラ切りが施される。

5 犁跡状遺構

S U 1001 (第40・62図)

調査区北西側において検出した犁跡状遺構であり、S P 1047・1081・1084 に切られる。調査時に溝の可能性も考えたが、規模が小さいこととS U 1002 が並行して検出されたことから犁跡状遺構とする。検出した標高は1.19 mである。本遺構はS P 1084 から北方向にはほぼ直線的に延び、S P 1047 付近で直角に屈曲し東方に延びる。東端は近代の攪乱により消滅する。幅は0.12 ~ 0.34 m、深さは2 cmを測る。埋土は灰白色細砂の単一層である。他の遺構との重複関係から本遺構の所属時期は17世紀後半と考えられる。

出土遺物は、管状土錘(453)と数点の土師質土器小片である。



第62図 SU 1001
出土遺物実測図 (S : 1/4)

S U 1002 (第40図)

調査区北西側において検出した埴跡状遺構であり、S U 1001の西側に並行して延びる。検出した標高は1.19 mである。検出できた範囲は北端のみであり、南北方向に短く延び、北端では直角に屈曲し西方に延びる。幅は0.20 m、深さは2 cmを測る。埋土は灰白色細砂の単一層である。出土遺物はないが、所属時期はS U 1001と同じであると考えられる。

6 性格不明遺構

S X 1002 (第63図)

調査区東端において検出した落ち込みであり、東側と西側は近代の擾乱により消滅する。本遺構の北側は調査区外に広がる。検出した標高は1.22 mである。検出できた範囲は非常に狭く、平面形は不明である。検出できた南北方向の幅は2.55 m、東西方向は0.80 mを測る。検出面からの深さは0.58 mであり、掘り方は非常に緩やかである。底面は北方向に若干下がる。埋土は6層に分層できた。第1層はにぶい黄橙色 + 褐灰色シルト質細砂、第2層は白灰色粗砂、第3層は灰白色細砂、第4層は灰黄色シルト質細砂、第5層は灰白色細砂 + 黄灰色シルト質細砂、第6層は褐灰色シルト質細砂であり、第1層には多量の礫や瓦が多量に含まれる。出土遺物や埋土から所属時期は18世紀と考えられる。

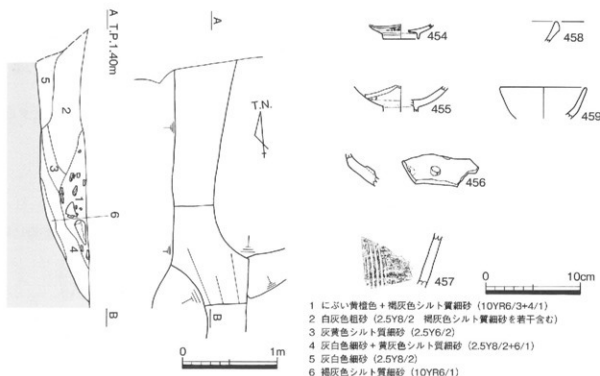
出土遺物は、磁器碗 (454・455)、陶器壺 (456)、同摺鉢 (457)、白磁碗 (458)、土師質土器杯 (459) である。

454・455は瀬戸・美濃系磁器である。454は外面に草文、高台に圈線が描かれる。455は体部外面に圈線・連続文、高台に圈線が描かれる。

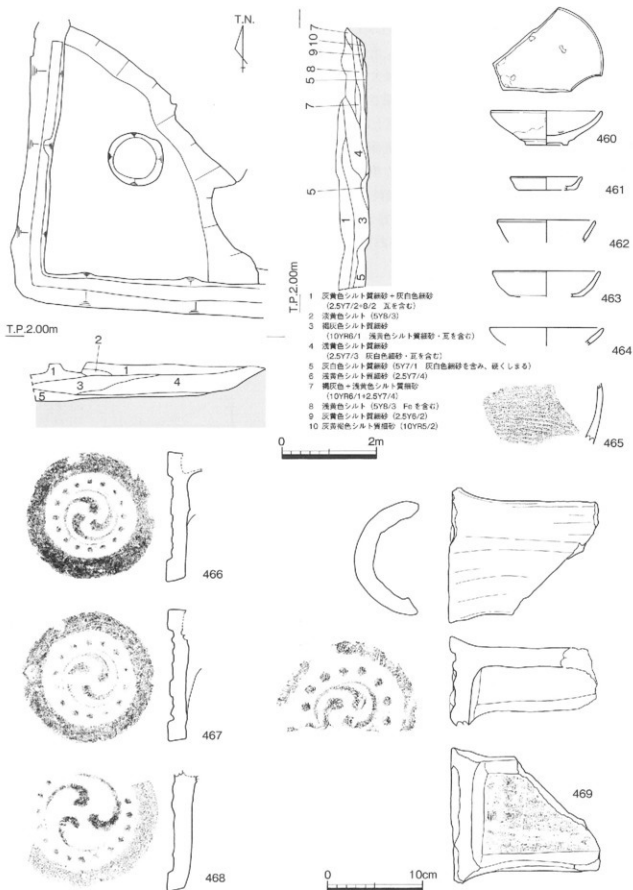
456は備前焼陶器壺の肩部片である。457は備前焼陶器であり、外面はナデが施される。

458は玉縁状の口縁を呈する。

459は口径9 cmを測り、体部が僅かに内湾する。



第63図 S X 1002 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)

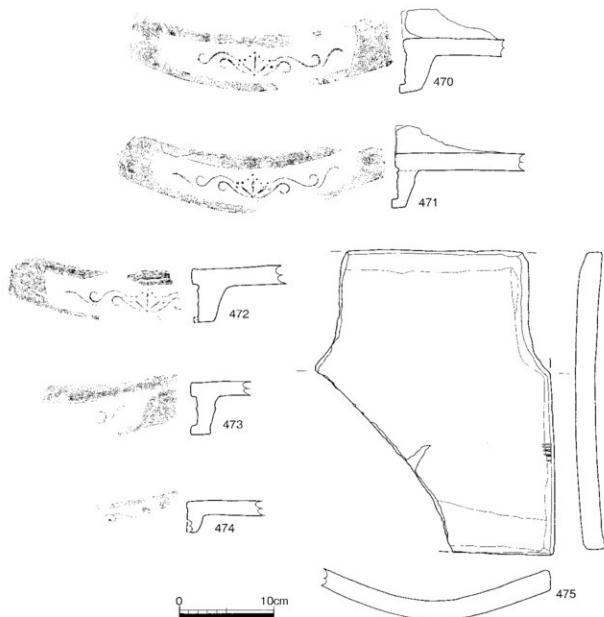


第64図 SX 1003 平・断面図及び出土遺物実測図(1) (S: 1/80・1/4)

S X 1003 (第64・65図)

調査区南西隅において検出した落ち込みであり、S K 1020 を切る。検出した標高は1.20～1.24 mである。本遺構の南側と西側は調査区外に広がり、検出できた範囲は全体の1/4のみである。残存する平面形は緩やかに湾曲しており、本遺構は大規模な円形であると推測できる。南北方向の幅は5.27 m、東西方向は4.50 mを測る。検出面からの深さは0.76 mである。東側の掘り方は緩やかであるが、北側はやや急傾斜である。底面は平坦である。埋土は10層に分層でき、その堆積は大きく二つに分かれる。まず、灰白色細砂を含み固くしまる第5層が底面直上に堆積し、第6～10層が北側を中心に堆積する。次に、第1～4層が広い範囲に堆積する。この第1～4層は瓦を多量に含んでおり、人為的な堆積を示している。出土遺物や埋土、重複関係から所属時期は17世紀後半と考えられる。

出土遺物は、陶器皿(460)、土師質土器皿(461)、同杯(462～464)、弥生土器甕(465)、軒丸瓦(466～469)、軒平瓦(470～474)、平瓦(475)である。



第65図 S X 1003 出土遺物実測図(2) (S : 1/4)

460 は肥前系陶器であり、体部外面下半は露胎である。見込みには胎土目が3ヶ所認められる。

461 は体部の短い形態の小皿であり、底部には回転ヘラ切りが施される。462 は直線的な体部であり、463 は若干内湾気味の体部で、底部にナデが施される。464 は緩やかな傾斜の体部である。

465 は外面に平行叩きが施される。胎土は石英・長石・角閃石を多量に含む。

466～469 は瓦当に巴文のある軒丸瓦である。466～468 は幅広い外区で、巴頭が比較的不明瞭であり、尾は細く、やや長く巻き込む。珠文径はやや小さく、14個・16個を数える。469 は幅狭い外区で、巴頭は比較的明瞭で、尾は細くやや長い。凹面には布目・コビキB痕・接合痕が残存する。

470～474 は瓦当に唐草文のある軒平瓦であり、唐草は一重で2転ないし3転する。中心飾りは上向きの三葉文の各先端に珠文を3点配する。475 は凸凹面に縦方向のナデが施され、凹面には面取りが認められる。

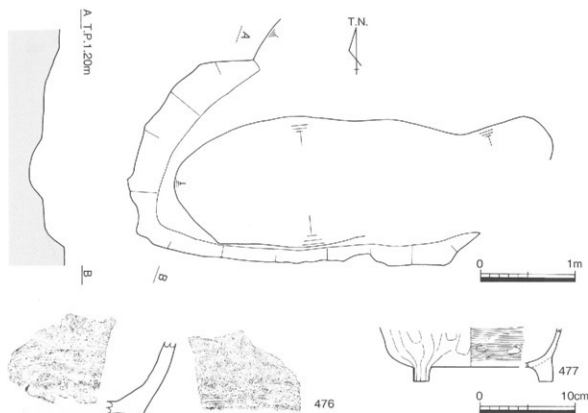
S X 1004 (第66図)

調査区中央西寄りにおいて検出した落ち込みである。検出面の標高は1.00～1.11 mである。本遺構は西側と南側のみ残存し、平面形は楕円形を呈すると考えられる。検出できた東西方向の長軸は3.73 m、南北方向の短軸は2.15 mを測る。検出面からの深さは0.23 mである。掘り方は緩やかであり、特に西壁は非常に緩やかな傾斜である。底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色細砂+黄灰色シルト質細砂である。出土遺物や埋土から所属時期は17世紀後半と考えられる。

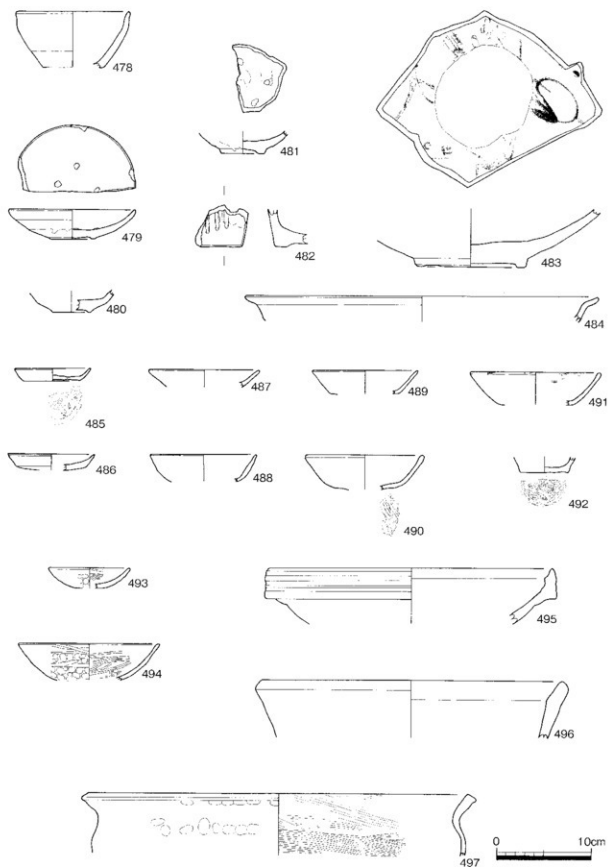
出土遺物は、陶器甕 (476)、土師質土器火鉢 (477)、数点の土師質土器小片である。

476 は備前焼陶器であり、外面に縦方向と横方向のハケ、内面と底部にハケ・ナデが施される。

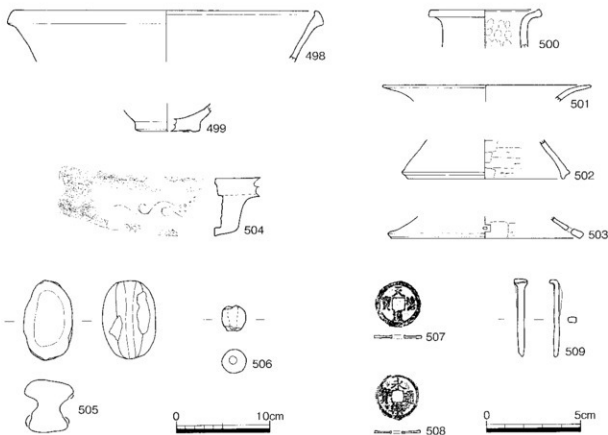
477 は棒状の脚部を有し、外面にヘラナデ、内面に横方向の粗いハケ・ナデが施される。



第66図 S X 1004 平・断面図及び出土遺物実測図 (S : 1/40・1/4)



第 67 図 第 1 遺構面出土遺物実測図 (1) (S : 1/4)



第68図 第1遺構面出土遺物実測図(2) (S: 1/4・1/2)

7 第1遺構面出土遺物 (第67～69図)

478～509は第1遺構面より出土した遺物であり、510～526は近代の擾乱より出土した遺物である。

478は肥前系磁器大目碗であり、口縁部は僅かに屈曲する。479は肥前系陶器皿であり、非常に低い高台が付く。見込みには胎土目が3ヶ所認められる。480は陶器皿であり、体部中央で湾曲する。高台は非常に低い。481は肥前系陶器碗であり、見込みには胎土目が3ヶ所認められる。482は陶器鉢であり、平面形は方形を呈する。底面は露胎である。483は肥前系陶器鉢であり、内面に草花文が描かれる。484は陶器皿であり、口縁部が大きく屈曲し外反する。

485～487は土師質土器皿である。485・486は体部の短い小皿であり、485の底部は回転ヘラ切りが施され、486は口縁端部外面に細い沈線が巡る。487は体部のやや長い小皿である。488～492は土師質土器杯である。490は口縁端部が丸く収まり、底部は静止ヘラケズリが施される。491は口縁端部に煤が付着し、底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。492は底部に回転ヘラ切りが施される。

493は瓦器皿であり、体部外面に指頭圧、内面にヘラミガキが施される。494は瓦器碗であり、体部外面に指頭圧・ヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。

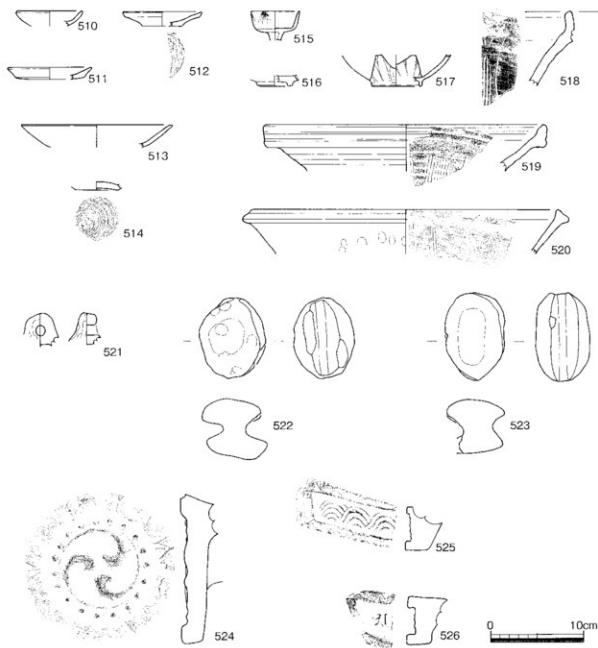
495は備前焼陶器搦鉢であり、口縁端部を上下に拡張し、内外面に数条の沈線を巡らす。496・497は土師質土器鍋である。498は須恵質土器捏ね鉢であり、口縁端部を上下に拡張する。499は青磁碗であり、外面は無釉である。500は弥生土器壺、501は弥生土器甕、502・503は弥生土器高杯である。

504は瓦当に唐草文のある軒平瓦で、中心飾りは上向きの三葉文の各先端に珠文を3点配する。

505は有溝土錘、506は管状土錘である。

507は「天槽通宝」、508は「永樂通宝」である。509は鉄釘である。

510～512は土師質土器皿であり、512の底部は回転糸切りが施される。513・514は土師質土器杯で

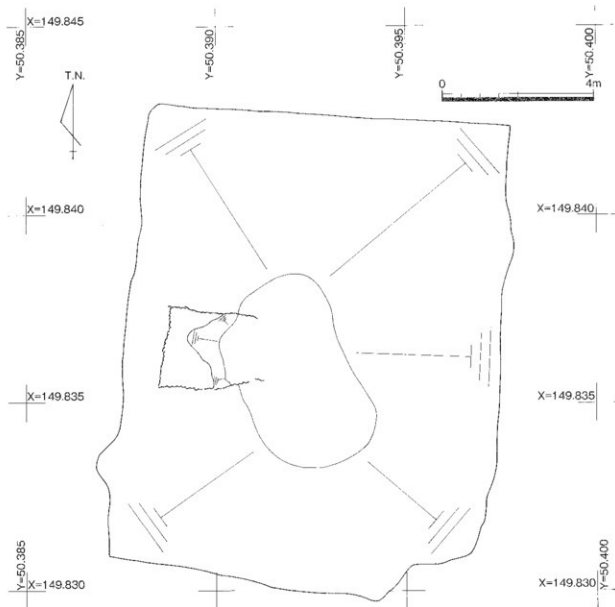


第69図 第1遺構面出土遺物実測図(3)(S:1/4)

あり、513は低い器高である。514の底部は回転ヘラ切りが施される。515は瀬戸・美濃系磁器仏飯器である。516は白磁碗である。517は青磁碗で、鍋連弁文を刻む。518・519は備前焼陶器揃鉢である。518は口縁部が直立し、519は口縁部が上下に拡張し、内外面に数条の沈線が巡る。520は瓦質土器揃鉢で、口縁端部を拡張させている。521はイイダコ壺、522・523は有溝土鍾である。524は巴文のある軒丸瓦で、巴頭に僅かな抉りが入り、尾は細く、長く巻き込む。珠文は19個を数える。525は「重波文的波状文」の軒平瓦、526は無量寿如来を意味する梵字のある軒平瓦である。

第3小節 II区 (第70・71図)

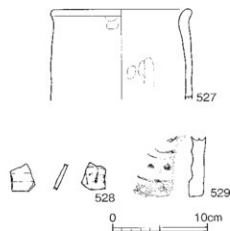
調査区の平面形は10.00 × 12.50 mを測る方形である。調査は、まず現地表と建物のコンクリート基礎を重機で取り除き、明治時代の埋め立ての上面を確認する。さらに中堀の石垣と底面を検出するために重機で掘り下げた。埋め立ては海砂を使用しており、現地表面から約2.50 mの深さまで達した。湧水と



第70図 II区平面図 (S: 1/100)

崩落が著しいため、調査区西壁中央において鉄板を打ち込んだ部分のみをさらに約 1.00 m 掘り下げた。下方の埋土は黒褐色シルト質極細砂と明緑灰色細砂であり、ラミナ状堆積が認められた。この土は堀底面の堆積土であると考えられる。現地表面から約 3.50 m の深さまで掘り下げたが、湧水と崩落のため堀の底面は確認できなかった。調査の目的のひとつである石垣は調査区内では検出できなかった。この結果、II区は中堀の中に位置しており、中堀の西岸の石垣は調査区より西側に存在すると考えられる。

出土遺物は、埋め立ての海砂より土師質土器甕 (527) やガラス瓶が出土し、黒褐色シルト質極細砂より肥前系磁器猪口 (528)、巴文の軒丸瓦 (529) と数点の植物遺体が出土した。



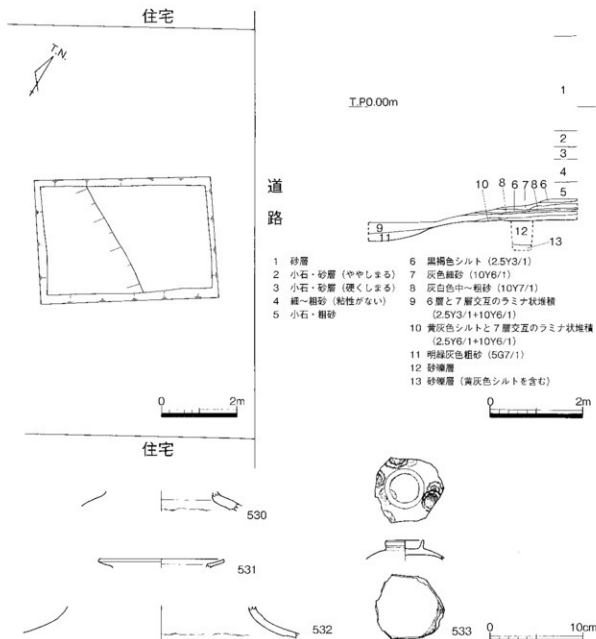
第71図 II区出土遺物実測図 (S: 1/4)

第4小節 III区 (第72図)

調査区の平面形は長方形を呈し、その規模は南北幅 3.30 m、東西幅 4.70 m を測る。調査に先立ち、崩落防止と安全確保対策を十分に行い、その後調査を実施した。

現地表面から約 3.40 m の深さまでは重機により掘り下げ、以下は人力で約 0.50 m 掘り下げた。埋土は 13 層に細分でき、現地表面からの深さ約 2.00 m までが第 1 層の砂層、その下に約 1.50 m 堆積する第 2～5 層の砂層、シルトと砂層が交互にラミナ状堆積する第 6～10 層、第 11 層の明緑灰色粗砂、第 12・13 層の砂礫層を確認した。第 1～5 層は埋め立てた砂であり、第 6～10 層と第 11 層は堀底面直上の堆積層、第 12 層が地山であると考えられる。第 12 層は現地表面から約 3.90 m の深さであり、調査区中央から西側に向かって 0.50 m の比高差で下がる。調査の結果、調査区内では中堀の東岸石垣は検出できなかった。I 区では西ノ丸が検出されていることから、III 区は中堀の東端に位置しており、中堀の東岸石垣は I 区と III 区の間には存在すると考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺 (530)、同壺 (531・532)、磁器蓋 (533) である。530～532 は第 6～11 層より出土し、内外面とも磨滅が著しい。533 は第 2～5 層より出土した瀬戸・美濃系磁器である。



第72図 III区平・断面図及び出土遺物実測図 (S: 1/100・1/80・1/4)

第4章 自然科学的分析

第1節 高松市高松城跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は高松市高松城跡から出土した容器2点、部材9点の合計11点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種調査結果（針葉樹3種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科マツ属〔二葉松類〕(Pinus sp.)

(遺物No. 2～7, 9)

(写真No. 2～7, 9)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属〔二葉松類〕はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

2) ヒノキ科アスナロ属 (Thujopsis sp.)

(遺物No. 11)

(写真No. 11)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は穏やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または絞線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3) スギ科スギ属スギ (Cryptomeria japonica D.Don)

(遺物No. 1, 8, 10)

(写真No. 1, 8, 10)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射

組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

高松市高松城出土木製品同定表

番号	遺構	遺物番号	品名	樹種
1	SE1201	84	曲物底板	スギ科スギ属スギ
2	SE1201	83	加工材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
3	SE1201	79	板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
4	SE1201	77	板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
5	SE1201	78	板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
6	SE1201	80	板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
7	SE1201	81	板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
8	SE1201	82	板材	スギ科スギ属スギ
9	SP1317		加工材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
10	SE1301		加工材	スギ科スギ属スギ
11	SE1301		曲物（井筒）	ヒノキ科アスナロ属

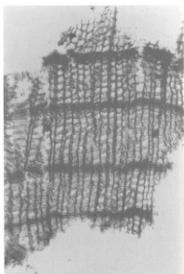
参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）
 島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）
 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）
 木村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）
 深澤和三 「樹体の解剖」 海青社（1997）

使用顕微鏡

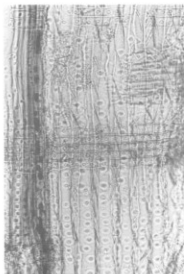
Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

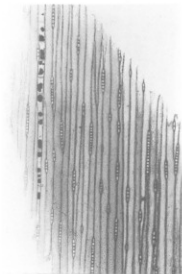


木口×40

No-1 スギ科スギ属スギ



柱目×100



板目×40



木口×40

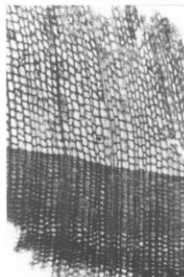
No-2 マツ科マツ属 [二葉松類]



柱目×100



板目×40



木口×40

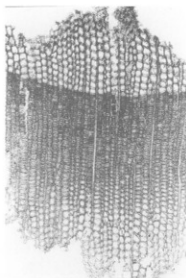
No-3 マツ科マツ属 [二葉松類]



柱目×100



板目×40

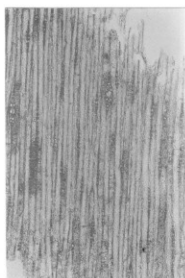


木口×40

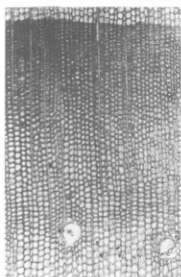
No-4 マツ科マツ属 [二葉松類]



柱目×100



板目×40

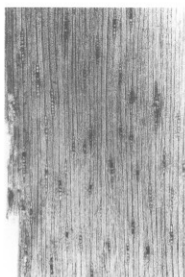


木口×40

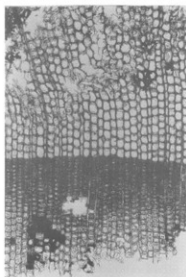
No-5 マツ科マツ属 [二葉松類]



柱目×100

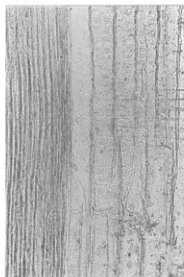


板目×40



木口×40

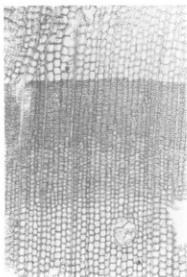
No-6 マツ科マツ属 [二葉松類]



柱目×100

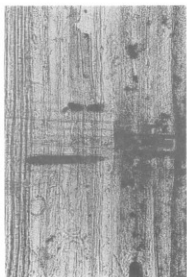


板目×40

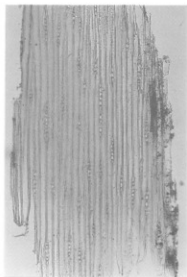


木口×40

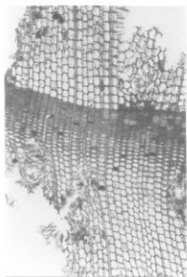
No-7 マツ科マツ属 [二葉松類]



柁目×100

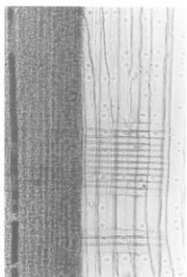


板目×40

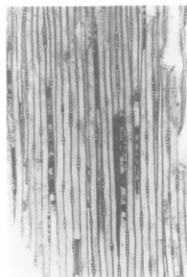


木口×40

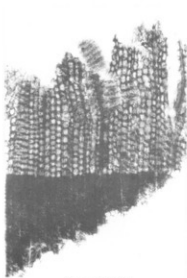
No-8 スギ科スギ属スギ



柁目×100



板目×40



木口×40

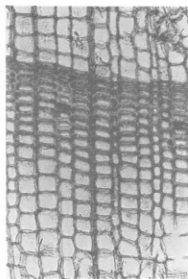
No-9 マツ科マツ属 [二葉松類]



柁目×100

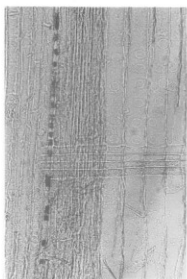


板目×40

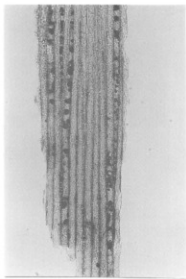


木口×40

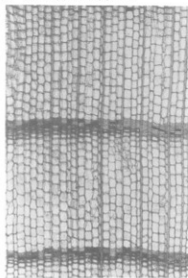
No-10 スギ科スギ属スギ



証目×100

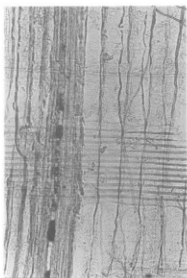


板目×40

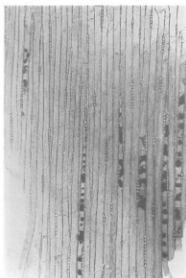


木口×40

No-11 ヒノキ科アスナロ属



証目×100



板目×40

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷

本遺跡のⅠ区では3面の遺構面を検出した。最下位の第3遺構面については『市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 高松城（無量寿院跡）』において既に報告した。ここではⅠ区の第1・2遺構面で検出した遺構の変遷に関して述べることにする。

17世紀前半

第2遺構面において検出した遺構が当該期の遺構である。遺構の検出は調査区全域に見られ、その検出したレベルは標高100 m前後である。遺構としては、掘立柱建物跡（S B 1201）、溝（S D 1201～1204）、井戸（S E 1201）、土坑（S K 1201～1215）、柱穴、性格不明遺構（S X 1201～1209）である。遺構の分布は、調査区西側中央でS B 1201が1棟のみ存在し、その北側には多数の柱穴が集中した状態で検出した。柱穴は切り合い関係があるが、明確な時期差としては確認できない。さらに建物跡としての柱穴の配置も不明瞭である。井戸は調査区南西隅で1基検出した。土坑は調査区ほぼ全域で検出したが、ほとんどの土坑は小規模であり、遺物の出土量は少ない。S K 1209は其中で最も規模が大きく、埋土中に多量の焼土と炭を含んでいた。溝は調査区北西部にのみ検出し、他の遺構に切られていることから若干古い時期のものであると考えられる。S B 1201は他の柱穴より直径が大きく、また根石が残存していたが、建物自体の規模は2×2間（4.90×5.30 m）の小規模な建物である。柱穴群の検出は何らかの建物の存在を示唆するが、S B 1201同様に小規模な建物であると考えられる。

当該期の様相としては、北側が建物域、南側には井戸とやや規模の大きな土坑が存在していた。

17世紀後半

第1遺構面において検出した遺構が当該期の遺構である。遺構の検出は調査区全域に見られ、その検出したレベルは標高120 m前後である。遺構としては、溝（S D 1001）、井戸（S E 1002・1003）、土坑（S K 1001～1020）、柱穴、性格不明遺構（S X 1001～1004）である。井戸は調査区南側に沿う位置で検出し、第2遺構面のS E 1201の東側である。土坑は調査区ほぼ全域で検出したが、ほとんどの土坑は小規模であり、遺物の出土量は少なく、いわゆるゴミ穴としての性格は考えられない。柱穴は調査区北西隅を除くほぼ全域で検出したが、建物跡とする明確な柱穴の配置は不明である。ただし、S K 1013・1014の東側には柱穴が一直線上に並んだ状態で検出され、建物跡の存在が想定される。柱穴は切り合い関係があるが、明確な時期差としては確認できない。当該期の遺構の中で注目すべき遺構は、S D 1001である。S D 1001は調査区南壁際で検出し、東西方向に延びる溝である。溝の上面は数基の土坑と柱穴が検出されており、S D 1001は他の遺構より若干古い時期の遺構である。底面に1段ないし2段の石組みが残存する。これらの石が石組み溝であるか石垣の基礎であるかは、今後の検討を必要とする。

当該期の調査区の様相としては、前段階とはほぼ同様であり、北側が建物域で、南側には井戸とやや規模の大きな土坑が存在していた。これより若干古い時期には、S D 1001の存在から調査区南壁中央より東側に何らかの施設が存在していたと考えられる。

19世紀後半

明確な遺構としては、第1遺構面の井戸（S E 1001）のみである。S E 1001はS E 1002の北西側に位置することから、17世紀後半より約200年間も地下水の水脈はほぼ変わらなかったと考えられる。

第2節 絵地図・文献史料における「西ノ丸」について

高松城は、豊田秀吉の家臣であった生駒親正が天正15年(1587)に讃岐国へ入り、翌年から築城された。この城は、北方を瀬内海にゆだね、三方に三重の堀が廻り、堀へ海水を引き入れた水城である。生駒氏は寛永17年(1640)に出羽矢島に転封され、寛永19年(1642)に松平頼重が新しい藩主となり、以後松平氏の居城として明治維新を迎えた。松平頼重は寛文10年(1670)以降に天守の改築や北ノ丸・東ノ丸の新造等、高松城の大改修を行い、ほぼ現在の縄張りとなった。

今回調査したⅠ区は、本丸と内堀を挟んで西側の位置にある西ノ丸の南部にあたり、Ⅱ区とⅢ区は中堀である。ここでは現存する数多くの絵地図と文献の中で「西ノ丸」の記載を検討し、今回の調査結果と対応して西ノ丸の変遷を考えることとする。なお絵地図の時期については、森下友子1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』Ⅳに依拠する。

高松城及び高松城下を描いた絵地図は、現段階で49点確認されている。まず、製作年代がわかっていて絵地図の中で最も古いものは、寛永4年(1627)に描かれた『讃岐探索書』(絵図-1)である。同書では西ノ丸、侍屋敷と記載されている。次に寛永14年(1637)以前と考えられる『讃岐高松丸亀兩城図 高松城図』では単に西ノ丸とのみ書かれている。寛永15年(1638)から寛永16年(1639)に製作されたと推定される『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』(絵図-2)と『讃岐国高松城図寛永17年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興預当時』(絵図-3)には、北から西ノ丸生駒半人の屋敷、生駒半人の下屋敷、女房の家と記載されている。今回の調査区は、生駒半人の下屋敷の位置に当たると考えられる。これらの絵地図は生駒家時代の高松城を描いており、時期的に今回調査した第2遺構面と同時期であると言える。しかし、検出した遺構は堀立柱建物跡、小規模の溝、井戸、土坑、柱穴であり、記載されている生駒半人の下屋敷に伴う遺構であるかどうかは断定できない。

松平頼重が入部した寛永19年(1642)以後に描かれた絵地図としては、まず明暦元年(1655)以前と考えられる『讃岐高松丸亀兩城図 高松城下図』がある。文字の記載はないが侍屋敷と思われる建物の表記が見られる。次に明暦2年(1656)以前の製作と推定される『高松城下図屏風』(絵図-4)がある。『高松城下図屏風』では西ノ丸の北側に侍屋敷があり、その南側には馬と厩と思われる建物が描かれている。調査区Ⅰ区はこの厩付近に当たる。『高松城下図屏風』より新しく、寛文11年(1671)以前に描かれた『讃岐国高松城図』では侍屋敷、蔵の記載がある。上記の3点の絵地図は高松城東の丸築造以前のものである。今回調査した第1遺構面が時期的に合致するが、記載されている建物として明確に比定できる遺構は検出できていない。第1遺構面で検出した遺構は井戸、土坑、柱穴等の小規模な遺構が大部分であり、絵地図に記載されるようなものではないと思われるが、石組み溝であるSD 1001は何らかの建物に伴う遺構であると考えられ、今後の検討を要する。

松平頼重は寛文10年(1670)に天守の改築を行い、寛文11年(1671)に東ノ丸を築造した。その後の絵地図は数多く現存する。その中で最も古い年代のものは享保年間(1716～1736)に描かれた『高松城下図』(絵図-5)である。その後に元文5年(1740)の『元文5申年讃岐国高松地図』『高松地図』(絵図-6)、正徳享保年間の『日本輿地南海道郡縣部讃州高松地図』、『讃州高松地図』、寛政元年(1789)の『寛政元年己酉年5月高松之図』、文化年間(1804～18)の『文化年間讃州高松城下絵図』『高松市街古図』(絵図-7)、『讃岐文化年間高松御城下絵図』、『高松新井戸水本並水掛惣絵図』、『高松市街古図』、弘化年間(1844～48)の『高松城下町屋敷割図』(絵図-8)、天保15年(1844)の『天保15年高松之図』(絵図-9)、『天保15年高松城下図』、『讃岐国名勝図会』(絵図-10)、安政4年(1857)の『安政4末年高松之図』(絵図-11)、慶応2年(1866)『高松城古図』、制作年代不明の『高松城内図』(絵図-12)、

『旧高松御城全図』（絵図-13）、『高松城下図』、『高松市街之図』、『高松城下古図』等がある。東ノ丸築造以前の絵地図と以後の絵地図を比較すると、高松城の内部は変化が明瞭である。しかし、以後の絵地図は城下町の様子は詳しく描かれているが、中堀より内側の高松城に関してはほとんど描かれていない。唯一城の内部がわかる資料は『旧高松御城全図』のみであり、西ノ丸については南北方向に細長い建物を描くが、その建物の種別は記載していない。図中には桜ノ馬場と西ノ丸を区画する堀が描かれており、SD1001がこの堀に該当する可能性も考えられる。ただ中央より北側に「薬園」の文字が見られ、今回の調査では18世紀以降に比定される遺構はSE1001以外にはほとんど検出しておらず、耕作地としての想定も可能である。寛文10年以降の高松城の詳細は不明である。

上記の絵地図以外に高松城の様子や変化がわかるものとしてはいくつかの文献がある。その代表は「小神野夜話」¹⁾であり、高松城だけでなく城下町の様子も詳細に書かれている。しかし、西ノ丸の記載は意外に少なく、寛文～延宝期（1661～1681年）の様子として巻一に「一、御本丸は古来之通り相更き無之候、西の丸さかいの御多門矢倉戸口を御付られ、刎橋口と申候。」と「一、あり腰宅重取、五重作り替申候、雛形木図、西の御丸御敷之内に捨有之、次第に朽捨中候由、此説疑敷御座候得共記置申候、西の御丸家之内に立申候を、栗田寛規壯年之時、御番にて登城致し候節、度々見申候由、物かたりにて御座候、当午年右寛規八十四才に成申候、」という記載が見られる。また、『増補高松藩記』巻七「高松藩内學事沿革大要」²⁾には寛政11年（1800）城内西ノ丸に一の学館を創建し、13年後の文化10年（1813）に当館を廃する記載がある。さらに時代が新しくなるが、『年々日記 三十』³⁾には「明治4年8月4日 前略・・・西の御丸を見めぐり、元の考信閣をも見るに、昔とはやうかわりていとさうさうし・・・後略」と記している。

ここまで絵地図と文献史料に書かれた西ノ丸に論考してきた。寛文11年（1671）以前の絵地図には西ノ丸の様子が詳細に描かれているが、その後の絵地図は中堀より内側が空白となっている。文献史料にも西ノ丸の記載は非常に少ない。このように西ノ丸に関する情報は少なく、特に松平家になってからの様子はほとんど不明と言える。今後の周辺地域における発掘調査が重要となってくる。

文献史料の西ノ丸の記載については見落としているものがあると思うが、これはすべて筆者の浅学のせいである。先輩諸氏のご批判、ご指導を願う次第である。

註1 『小神野夜話』『新編香川叢書』史料編（1）1979

2 『増補高松藩記』永年會1932

3 『年々日記』多和文庫蔵

絵図-1) 『讃岐探案書』（『香川県史』第3巻通史編近世Iより抜粋）

絵図-2) 『生駒家時代讃岐高松城敷割図』（高松市歴史資料館所蔵）

絵図-3) 『讃岐岡高松城図寛永17年生駒家封地没収人割藩主加藤泰興預當時』（高松市歴史資料館所蔵）

絵図-4) 『高松城下図屏風』（香川県歴史博物館所蔵）

絵図-5) 『高松城下図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）

絵図-6) 『高松地図』（香川県歴史博物館所蔵）

絵図-7) 『高松市街古図』（高松市歴史資料館所蔵）

絵図-8) 『高松城下町屋敷割図』（香川県歴史博物館所蔵）

絵図-9) 『天保15年高松之図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）

絵図-10) 『讃岐岡名勝図会』（高松市歴史資料館所蔵）

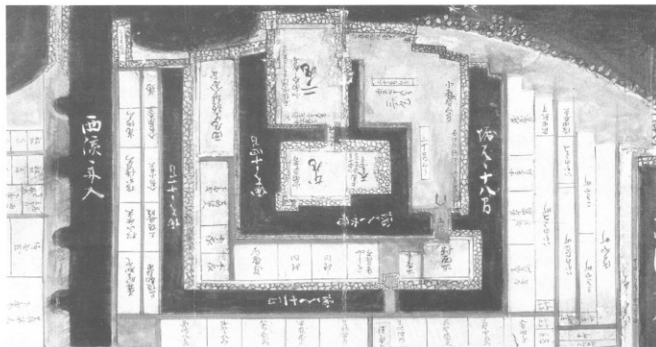
絵図-11) 『安政4未年高松之図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）

絵図-12) 『高松城内図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）

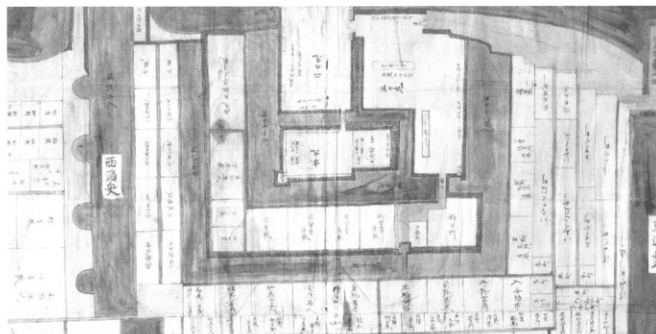
絵図-13) 『旧高松御城全図』（香川県歴史博物館所蔵）



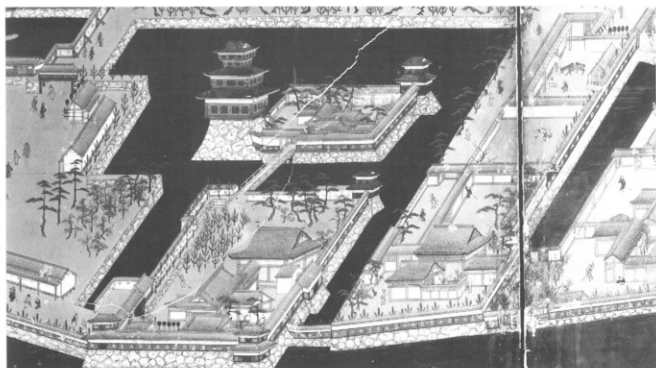
絵図-1)「讃岐探案書」(『香川県史』第3巻通史編近世Iより抜粋)



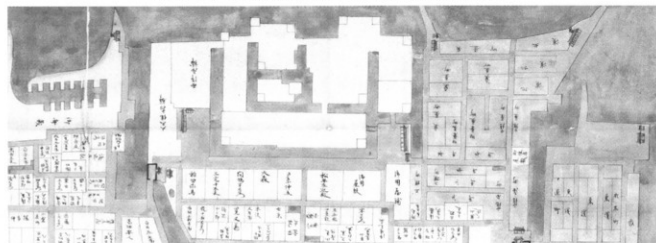
絵図-2)「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」(高松市歴史資料館所蔵)



絵図-3)「讃岐国高松城図寛永17年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興預當時」
(高松市歴史資料館所蔵)



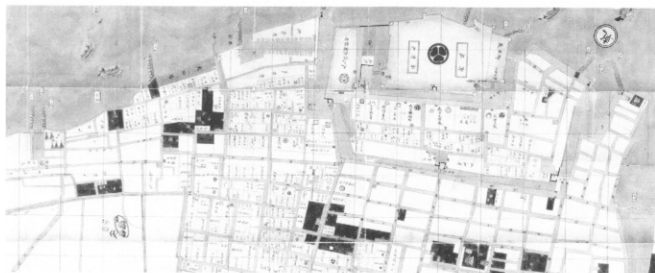
絵図-4)「高松城下図屏風」(香川県歴史博物館所蔵)



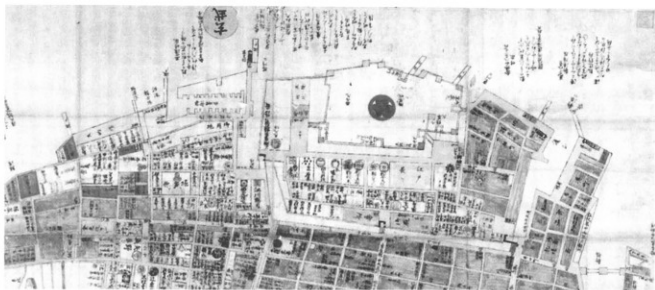
絵図-5)「高松城下図」(鎌田共済会郷土博物館所蔵)



絵図-6)「高松地図」(香川県歴史博物館所蔵)



絵図-7)『高松市街古図』(高松市歴史資料館所蔵)



絵図-8)『高松城下町屋敷割図』(香川県歴史博物館所蔵)



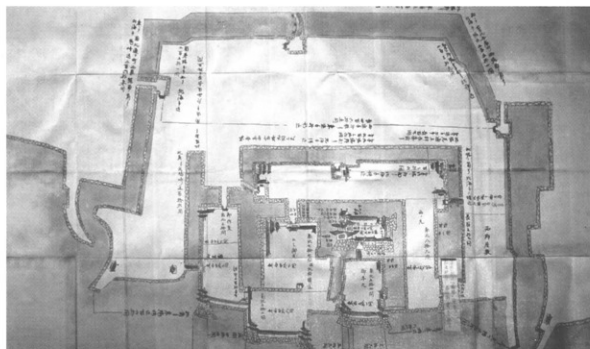
絵図-9)『天保15年高松之図』(鎌田共済会郷土博物館所蔵)



絵図-10)「讃岐国名勝図会」(高松市歴史資料館所蔵)



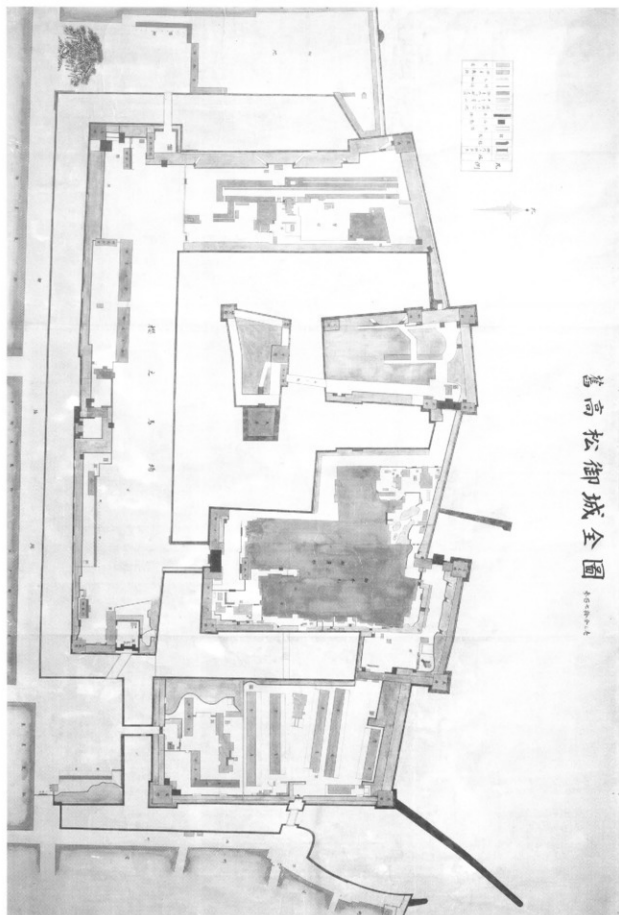
絵図-11)「安政4末年高松之図」(鎌田共済会郷土博物館所蔵)



絵図-12)「高松城内図」(鎌田共済会郷土博物館所蔵)

舊高松御城全圖

香川縣史稿



繪圖-13)『旧高松御城全圖』(香川県歴史博物館所蔵)

高松城跡(舟町一丁目)出土遺物観察表

※表頭の〇は、埋存数を表す。

調査番号	品名	質量(g)		寸法	調査	出所	出土	備考
		口縁	底縁					
1	土師質土師器	5.8	5.7	1.8	内外面：同軸ナデ	内外面：R2.5YR6/6	洗砂	底面：同軸ヘタ切
2	土師質土師器	10.2		(1.8)	内外面：ナデ	外面：R2.5YR7/6 内面：R5YR7/6	洗砂若干	
3	土師質土師器	10.2	6.8	(2.2)	内外面：ナデ	内外面：R7.5YR7/6	洗～細砂	
4	土師質土師器	11.8		(1.0)	内外面：同軸ナデ	外面：R42.5YR8/3 内面：R61.5YR8/1	洗砂若干	
5	土師質土師器		4.0	(1.4)	内外面：同軸ナデ	内外面：R5YR7/6	洗砂若干	底面：磨光ヘタ切
6	土師質土師器	5.4	(0.8)		内外面：ナデ	外面：R2.5YR7/6 内面：R42.5YR7/4	洗砂	底面：同軸ヘタ切
7	土師質土師器	7.6	(0.9)		内外面：同軸ナデ	内外面：R7.5YR7/6	洗～細砂	底面：同軸ヘタ切
8	土師質土師器		(2.7)		内外面：ナデ	内外面：R2.5YR7/6	洗～粗砂	
9	土師質土師器	10.6	(3.0)		内外面：同軸ナデ	外面：R42.5YR8/3 内面：R61.5YR8/1	洗砂	底面：ナデ
10	土師質土師器	11.2	(3.7)		内外面：ヘラナデ	外面：R2.5YR8/3 内面：R61.5YR8/1	洗～粗砂	
11	土師質土師器	8.6	(0.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
12	土師質土師器	8.6	(0.7)			外面：R42.5YR8/3	洗砂若干	底面：同軸ヘタ切
13	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
14	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
15	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
16	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
17	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
18	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
19	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
20	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
21	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
22	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
23	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
24	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
25	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
26	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
27	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
28	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
29	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
30	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
31	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
32	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
33	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
34	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
35	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
36	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
37	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
38	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
39	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
40	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
41	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
42	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
43	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
44	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
45	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
46	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切
47	土師質土師器	11.2	(3.7)			外面：R42.5YR8/3	洗～粗砂	底面：同軸ヘタ切

番	品名	材	寸法(mm)		重量	色	加工	備考
			長さ	幅				
138	鉄板	鉄板	13.9	0.6	厚さ			
139	鉄板	鉄板	4.6	0.2	厚さ			
140	鉄板	鉄板	15.0	0.1	厚さ			
141	鉄板	鉄板	7.0	0.1	厚さ			
142	鉄板	鉄板		0.1	厚さ			
143	土師器(土師)	土師器	8.9	5.0	1.4	内外面:白地ナデ	鉄板	中国製 展覧会
144	土師器(土師)	土師器	9.9	0.9	0.2	内外面:白地ナデ	鉄板	
145	土師器(土師)	土師器	10.8	0.8	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
146	土師器(土師)	土師器	19.0	0.9	0.2	内外面:白地ナデ	鉄板	
147	土師器(土師)	土師器	9.0	0.2	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
148	土師器(土師)	土師器	14.6	1.6	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
149	土師器(土師)	土師器	15.8	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
150	土師器(土師)	土師器	21.8	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
151	鉄板	鉄板	8.9	0.4	厚さ			
152	鉄板	鉄板	9.5	0.8	厚さ			
153	土師器(土師)	土師器	7.1	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
154	土師器(土師)	土師器	7.2	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
155	土師器(土師)	土師器	15.0	0.2	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
156	土師器(土師)	土師器	6.4	0.2	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
157	土師器(土師)	土師器	15.0	0.6	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
158	土師器(土師)	土師器	6.7	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
159	土師器(土師)	土師器	11.5	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
160	土師器(土師)	土師器	8.8	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
161	土師器(土師)	土師器	15.4	0.2	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
162	土師器(土師)	土師器	7.0	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
163	土師器(土師)	土師器	4.6	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
164	土師器(土師)	土師器	12.2	0.2	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
165	土師器(土師)	土師器	37.0	0.2	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
166	土師器(土師)	土師器	11.0	0.2	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
167	土師器(土師)	土師器	3.6	0.2	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
168	土師器(土師)	土師器	5.4	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
169	土師器(土師)	土師器	8.9	5.4	0.2	内外面:白地ナデ	鉄板	
170	土師器(土師)	土師器	8.8	6.2	1.6	内外面:白地ナデ	鉄板	
171	土師器(土師)	土師器	4.0	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
172	土師器(土師)	土師器	5.1	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
173	土師器(土師)	土師器	2.3	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
174	土師器(土師)	土師器	5.4	3.8	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
175	土師器(土師)	土師器				内外面:白地ナデ	鉄板	
176	土師器(土師)	土師器	14.8	0.2	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
177	土師器(土師)	土師器	4.8	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
178	土師器(土師)	土師器	33.2	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
179	土師器(土師)	土師器	11.6	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
180	土師器(土師)	土師器	25.4	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
181	土師器(土師)	土師器	28.2	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
182	土師器(土師)	土師器	30.0	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
183	土師器(土師)	土師器	31.2	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	
184	土師器(土師)	土師器	42.0	0.1	0.1	内外面:白地ナデ	鉄板	

船名	船種	寸法 (cm)			測量	色 調	船 主	備 考
		口幅	長さ	高さ				
230	上野賀十郎		5.7	(3.6)	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/1	船主	底面: 回転ナブ
231	吹上船橋	9.4		(1.0)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/1 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
232	陶器 (足利系)	10.6	4.5	6.3	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
233	陶器 (足利系)	12.0		(2.0)	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
234	陶器 (足利系)	13.0		(2.0)	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
235	陶器 (足利系)	12.2	4.2	4.0	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
236	陶器 (足利系)	5.4		(2.0)	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
237	陶器 (足利系)	5.6		(1.7)	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
238	陶器 (足利系)	5.4		(2.5)	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
239	陶器 (足利系)	5.2	4.4	2.5	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
240	陶器 (足利系)	18.0		(3.9)	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
241	陶器 (足利系)	33.1		(5.4)	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
242	陶器 (足利系)			(9.9)	外側: 回転ナブ 内側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
243	上野賀十郎	6.8	5.0	1.4	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
244	上野賀十郎	7.2	6.2	(1.0)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
245	上野賀十郎	7.9	6.2	(1.1)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
246	上野賀十郎	7.2	6.0	1.3	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
247	上野賀十郎	7.6	5.8	1.3	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
248	上野賀十郎	8.4	6.0	(1.2)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
249	上野賀十郎	8.2	5.1	1.3	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
250	上野賀十郎	7.7	6.0	1.8	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
251	上野賀十郎	8.7	4.4	1.6	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
252	上野賀十郎	8.4	4.3	1.9	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
253	上野賀十郎	9.0	6.2	(1.0)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
254	上野賀十郎	9.0		(2.0)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
255	上野賀十郎	10.0		(1.9)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
256	上野賀十郎	11.0		(2.1)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
257	上野賀十郎	8.6		2.2	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
258	上野賀十郎	5.9		(1.2)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
259	上野賀十郎	8.8	6.1	3.6	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
260	上野賀十郎	9.9		(3.3)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
261	上野賀十郎	10.2	4.6	2.3	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
262	上野賀十郎	11.6		(2.1)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
263	上野賀十郎	6.6		(1.5)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
264	上野賀十郎	5.8		(1.6)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
265	上野賀十郎	5.4		(1.3)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
266	上野賀十郎	7.8		(1.1)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
267	上野賀十郎	6.0		(1.3)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
268	上野賀十郎	10.1		(3.4)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
269	上野賀十郎	10.0		(1.6)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
270	上野賀十郎	21.4		2.8	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
271	上野賀十郎	17.2		(5.7)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
272	上野賀十郎	3.8		(1.8)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
273	上野賀十郎	5.7		(1.0)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0
274	上野賀十郎	4.7		(1.0)	内外側: 回転ナブ	外側: 灰白2.5YR/2 内側: 灰白2.5YR/6	船主	底面: 1.0

種別	種名	断面 (cm)			断面	色相	粘土	備考
		厚	高	厚				
320	土質土層				外面:ヘラナデ	外面:白、黄7.5YR5/3 内面:黄褐7.5YR5/6	細砂～細砂	
321	土質土層	8.8		(2.2)	内外面:同軸ナデ	内外面:黄D17/0	細～細砂若干	
322	土質土層	14.8		(3.3)	内外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D19.5Y/1	細砂若干	口縁部:黄褐色
323	土質土層	8.5	(2.5)		内外面:同軸ナデ	内外面:黄D17.5YR/1	細砂～細砂若干	断面:ナデ
324	土質土層	9.0	3.8	2.2	外面:同軸ナデ、同軸ナデ 内面:同軸ナデ、同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	断面:同軸ナデ
325	土質土層	13.6		(3.3)	外面:同軸ナデ、同軸ナデ 内面:同軸ナデ、同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂若干	
326	土質土層	18.2		(3.3)	外面:同軸ナデ、同軸ナデ 内面:同軸ナデ、同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	断面:同軸ナデ
327	土質土層			(3.7)	内外面:同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
328	土質土層			(1.7)	内外面:同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
329	土質土層	17.0		(3.0)	内外面:同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
330	土質土層			(2.8)	内外面:同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
331	土質土層			(4.0)	外面:同軸ナデ 内面:同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
332	土質土層	24.0		(3.4)	内外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
333	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	長さ:208.6g
334	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	長さ:304.3
335	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ、同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	長さ:273.5g
336	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ、同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	長さ:232.4g
337	土層			(4.4)	外面:ナデ、同軸ナデ 内面:同軸ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
338	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
339	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
340	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
341	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
342	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
343	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
344	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
345	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
346	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
347	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
348	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
349	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
350	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
351	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
352	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
353	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
354	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
355	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
356	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
357	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
358	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
359	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
360	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
361	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
362	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	
363	土層	長さ 5.5 幅 5.5	高さ 5.5 幅 5.5		外面:ナデ	外面:黄D17.5YR/1 内面:黄D17.5YR/1	細砂	

材料番号	部 位	法 量 (cm)			測 量	内 容	出 土	備 考
		コサ	底層	筋層				
364	軒九瓦				凸面・ヘラナデ	凸面・底・深15V7/1	微砂若干	巴文
365	軒五瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
366	軒平瓦				凸面・底層・凸面・ヘラナデ	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
367	軒平瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
368	軒平瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
369	軒平瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
370	龍 瓦	長さ (5.2)	幅 (5.8)	高さ (4.6)	凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
371	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
372	龍瓦(龍前系)	11.8			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
373	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
374	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
375	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
376	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
377	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
378	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
379	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
380	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
381	龍瓦(龍前系)				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
382	土師貫土師 分家	15.0			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
383	土師貫土師 分家	20.5			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
384	土師貫土師 分家	13.4			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
385	土師貫土師 分家	43.2			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
386	土師貫土師 分家	38.3			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
387	土師貫土師 分家	22.0			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
388	土師貫土師 分家	長さ (13.4)			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
389	土師貫土師 分家	5.2			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
390	土師貫土師 分家	6.1			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
391	土師貫土師 分家	8.6			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
392	土師貫土師 分家	16.8			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
393	土師貫土師 分家	35.1			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
394	軒九瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
395	軒九瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
396	軒平瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
397	軒平瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
398	軒平瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
399	軒平瓦				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
400	青銅製銅の 板	長さ 2.5		1.1	凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
401	青銅製銅の 板	長さ (4.1)		2.0	凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
402	青銅製銅の 板	11.4			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
403	青銅製銅の 板	14.6			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
404	青銅製銅の 板				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
405	青銅製銅の 板				凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
406	青銅製銅の 板	8.4			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
407	青銅製銅の 板	8.2			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文
408	青銅製銅の 板	12.0			凸面・底層	凸面・底・深5V8/0	微砂若干	唐草文

図号	部 品	寸 法		測 量	色 調	結 晶	備 考
		内径	長さ				
432	上研歯板	6.8	(1.4)	内外面:同軸ナズ	内外面:浅黄緑5YR8/3	紙へ吸砂	底面:同軸ヘタリ
433	上研	長さ 4.8	内径 1.3		外面:1C3/3黄緑10YR8/4	紙へ吸砂多量	長さ:12.0g
451	磁器(瀬戸・美濃)			内外面:同軸	紙へ吸砂		
455	磁器(瀬戸・美濃)	3.8	(1.5)	内外面:同軸	紙へ吸砂		
456	磁器(瀬戸)		(3.2)	内外面:同軸ナズ	紙へ吸砂		
457	磁器(瀬戸)		(5.0)	内外面:ナズ	紙へ吸砂		
458	内外面:同軸	(1.9)		内外面:同軸	紙へ吸砂		
459	土師器(土師系)	9.0	(3.2)	内外面:ナズ	内外面:浅黄緑10YR8/4	吸砂若干	
460	陶器(肥前系)	11.6	5.1	3.7	外面:同軸ナズ, 断面(体部下半部)内面:同軸	断面:同軸ナズ, 断面(体部下半部)内面:同軸	紙へ吸砂
461	土師器(土師系)	7.6	6.4	1.4	内外面:同軸ナズ	外面:1C3/3黄緑10YR8/3	紙へ吸砂
462	土師器(土師系)	10.2	(2.4)	(2.4)	内外面:同軸ナズ	外面:1C3/3黄緑10YR8/3	紙へ吸砂
463	土師器(土師系)	11.4	8.0	(2.7)	内外面:同軸ナズ	内外面:浅黄緑10YR8/4	吸砂, 磁砂
464	土師器(土師系)	12.8	(1.9)	(1.9)	内外面:ナズ	内外面:1C3/3黄緑10YR8/3	磁砂
465	土師器(土師系)		(6.3)	(6.3)	内外面:同軸ナズ	内外面:1C3/3黄緑10YR8/4	磁砂
466	土師器(土師系)				断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
467	土師器(土師系)				断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
468	土師器(土師系)				断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
469	土師器(土師系)				断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
470	土師器(土師系)	6.4	26.6		断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
471	土師器(土師系)	6.4	26.6		断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
472	土師器(土師系)				断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
473	土師器(土師系)				断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
474	土師器(土師系)				断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
475	土師器(土師系)	長さ 31.7	6.4	24.7	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
476	土師器(土師系)		36.0	(7.8)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
477	土師器(土師系)			(5.7)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
478	土師器(土師系)	12.2	(5.9)	(5.9)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
479	土師器(土師系)	13.2	4.8	3.1	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
480	土師器(土師系)		4.0	(2.4)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
481	土師器(土師系)		4.5	(2.4)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
482	土師器(土師系)			(4.0)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
483	土師器(土師系)		11.1	(6.0)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
484	土師器(土師系)	37.0		(2.2)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
485	土師器(土師系)	8.0	5.8	1.3	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
486	土師器(土師系)	9.0	7.4	(1.7)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
487	土師器(土師系)	11.4	(1.0)	(1.0)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
488	土師器(土師系)		(2.5)	(2.5)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
489	土師器(土師系)	11.0	7.2	(5.5)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
490	土師器(土師系)	12.0	(5.7)	(5.7)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
491	土師器(土師系)	13.6	8.0	(3.3)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
492	土師器(土師系)		3.0	(1.9)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
493	土師器(土師系)	7.8	(2.2)	(2.2)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
494	土師器(土師系)	11.8	(3.9)	(3.9)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
495	土師器(土師系)	30.0	(5.9)	(5.9)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
496	土師器(土師系)	32.0	(6.0)	(6.0)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂
497	土師器(土師系)	30.2	(6.4)	(6.4)	断面:同軸ナズ	断面:同軸ナズ	紙へ吸砂

図番	図名	法量 (cm)			銅 板	色 調	材 質	備 考
		口径	底径	高さ				
498	御器所 石鉢	32.0		(5.4)	内外面:同軸ナブ	内外面:灰H5Y7/1	陶砂	
499	古 甕		7.0	(3.0)	外面:同軸ナブ、磨面 内面:同軸ナブ、磨面 外口:同軸ナブ、磨面 内口:同軸ナブ、磨面	軸:灰H5Y7/2 裏面:灰H5Y7/1	焼土	
500	弥生土 土器	11.8		(4.3)	外面:同軸ナブ 内面:同軸ナブ	外面:焼土H5Y8/6 内面:灰H5Y8/4	灰・灰・灰・灰・ 角閃石	
501	弥生土 土器	22.2		(1.7)	内外面:同軸ナブ	外面:灰H5Y8/6 内面:灰H5Y8/4	灰・灰・灰・灰・ 角閃石	
502	弥生土 土器	16.7		(4.2)	外面:同軸ナブ 内面:同軸ナブ	外面:灰H5Y8/6 内面:灰H5Y8/4	灰・灰・灰・灰・ 角閃石	
503	弥生土 土器	20.0		(2.3)	外面:同軸ナブ 内面:同軸ナブ	内外面:灰H5Y8/6	灰・灰・灰・灰・ 角閃石	
504	弥生土 土器	15.5		(4.2)	外面:同軸ナブ 内面:同軸ナブ	外面:灰H5Y8/6 内面:灰H5Y8/4	灰・灰・灰・灰・ 角閃石	
505	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
506	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
507	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
508	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
509	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
510	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
511	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
512	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
513	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
514	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
515	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
516	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
517	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
518	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
519	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
520	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
521	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
522	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
523	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
524	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
525	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
526	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
527	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
528	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
529	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
530	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
531	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
532	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文
533	土 器	8.4	5.1	厚さ 5.7	外面:ナブ	外面:灰H5Y8/6	陶砂	摩文



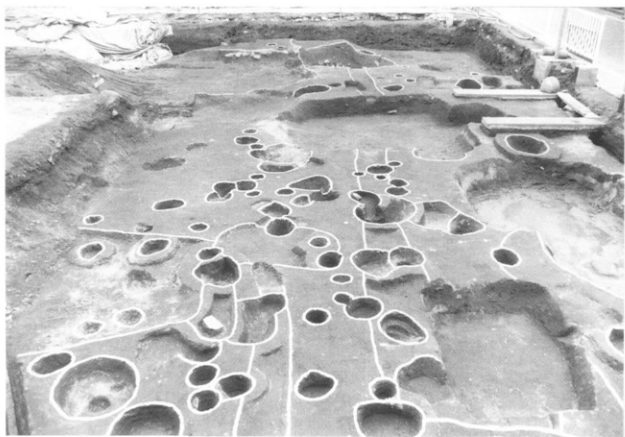
1 第2遺構面完掘状況（東から）



2 第2遺構面完掘状況（西から）



1 第2遺構面完掘状況（南から）

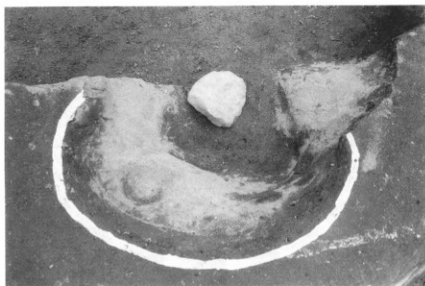


2 第2遺構面完掘状況（北から）

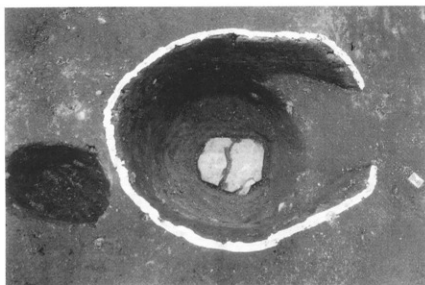
1 SB 1201 完掘状況 (西から)



2 SB 1201 P-2



3 SB 1201 P-4

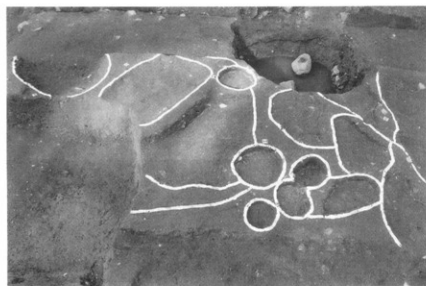




1 SE 1201 土層断面 (西から)



2 SE 1201 完掘状況 (南から)



3 SK 1202 ~ 1208 完掘状況
(北から)